

花たちよはな



古稀 福岡 鯨三

花たちばな



絹本 勝入公池田信輝 着色画像

天正十二年四月九日長久手合戦に際して
長子紀伊守之助公と共に長久手仏ヶ根に
戦死する。画像は合戦当日の雄姿を写す
長久手町北熊の画人 浅井金万画
昭和五十九年四月 長久手合戦四百年祭

左上賛文は

岩作安昌寺住持

柴田義雄和尚撰文

鯨三 所蔵

序

八十二叟
山本鶴善

郷土を愛する者は「歴史を愛する」心にあると言う如く扱て郷土の歴史を調査研究するには撓まざる精魂と努力が肝要であり、先ず古人の伝承や文献を基に積極的踏査研究をなす。反面、極致的には一木一草に至るまでの緻密な原流を摺めなくてはなりません。このような努力を重ね取纏めて行く人こそ極めて稀な人と言えましょう。それを屈せず調査研究を成し遂げた福岡録三さんこそ稀な郷土史家であり、ここに十有余年を郷土史愛好会の主幹として卓越した史的指導に当たられ妙を得た時代感覚の画描を添え生きた郷土史を飾られた事は、地元長久手の至宝であり尊敬の的として賞讃いたします。

此のたび目出度くも古稀の天寿を迎えられるを一つの節目として、積み重ねられた踏査資料を一巻にまとめ編纂されると聞き其の真髓に触れる事を楽しみに願って居る私であります。まだまだ録三さんに学ぶところは極めて多く、其の上梓を寿ぐの念は人一倍のものがあります。

謹んで一言賀詞を寄せて序に代えさせて頂きます。

昭和六十二年 仲秋

郷土史書作品集の発刊に際して

浅井鹿雄

日頃尊敬する録三さんが、このたび自分の歩いて来られた足跡を残すために一冊の本にまとめられ発刊されるとお聞きし誠に感銘して居る一人であります。福岡録三さんと私との出会いは十数年前でした。郷土史愛好会と云うグループ仲間で見跡古戦場を如何に保存してゆこうかと毎日の話し合いからでした。当時は現在のようには戦場がきれいに整備され公園となっておらず、行政としても手を付ける事すらしなかった時代でした。それでも岩作の元門にあります首塚の供養祭を録三さんが地元の方々に呼びかけて始められ、今日まで長い間祭が続いて居ます。又、録三さんは町内の郷土史家としても第一人者であり、万人がみとめて居るところであります。愛好会が発展的解消しまして町行政が正式に認めた団体である郷土史研究会のリーダー格で常に私どもを指導されておられました。年に一回の研修会を行っていますが、録三さんは必ず紀行記を文書にきれいに保存されておられます。録三さんの素晴らしい郷土愛と人間性には私ども大いに学ばなければならぬと思っております。

長久手の町も大都市の発展と共に、昔の古き時代の遺跡がうしなわれようとしています。其のためには録三さんのような方が必要です。いつまでもふるさと長久手の町のため頑張られることをお祈り致し、発刊に際してお祝いのごとばと致します。

昭和六十二年八月

郷土作品集の発刊に際して

日比野義信

戦前、戦後の貧困と混乱の中で郷土愛一すじに史跡、文化等に精魂をかたむけ、其の都度、綿密に記録されたことは、大変な努力であったと思います。ただただ敬服する次第です。

今回、其の纏として冊子を刊行されることは、大いに意義があると思います。

お座なりや、お上手でつくられた冊子は沢山あると思えますが、実際に自分で心血をそそぎ記録した、調査研究の記事を出版されることを高く評価するものであり、深く敬意を表する次第でございます。

福岡録三さんは長久手町郷土史研究会の会長であり、常に私共の先頭に立って指導をいただいておりますが、史跡、文化については実によく調査されている偉大な方で人望も厚く、長久手町の生き辞引的存在であり、人一倍熱心で、私共の遠く及ばざる所であります。

今後共にも一層健康に留意され、益々の活躍をお祈りいたします。

昭和六十二年八月吉日

趣味というものは全く無欲であるから楽しいものである。釣り人は魚が釣れようと釣れなかりと、釣り糸を垂れている時が楽しい。水中の目に見えない魚を釣る為に全精力をかたむけて、おしまない。別に一銭の得にもならないし、誰も喜んでくれない。この得にもならない無欲なところが美しい。

私は永年茶華道を趣味として、自営の家業に生きながら、一銭にもならない花を活け、茶を啜ってきた。ここに私の魂の解放があり、青春期から現在までの、心のよりどころでもあった。

それがいつの頃からか、茶華道にかかわる仕事の依頼が多くなってきた。趣味でなくなり、趣味が銭を生む結果となってしまったのである。これはいけない不純である。

心の糧としてきたものが今や苦痛とすら思える。趣味が仕事になったらおしまいである。そんなある時、福岡録三氏との出会いが生まれた。

時、郷土民俗資料館建設構想真っ最中であり、福岡録三氏の自然環境から歴史、生活、民俗に致るまでの、それこそ銭にならない調査研究に、趣味以上のものを感じ、これこそが将来の社会的要請であると考え様になった。しかし、建設構想、施設の使命など当局の理解が得られず、公立資料館の実現を見なかつたのはまことに残念なことであった。

この何年か、福岡録三氏の感化を受け、趣味も郷土史の研究となり、仲間と共に調査研究に没頭している。まことに放楽である。

最近私はこうした方達の調査研究資料を、教育的に活用出来ないものかと、考える様になった。不純であろうか。

最後に、郷土史家 福岡録三氏の記念出版に心から敬意を表し、今後のご精進を祈る。

昭和六十二年九月



福岡 三さんのこと

伊藤 祥子

氏を初めて知ったのは、昭和五十三年の秋でした。折から秋の町民作品展が、福祉会館で盛大に行われている中、氏が友人と一緒に、当時私の職場であった児童館にやってこられ、お茶を飲みながら、一時を過ごしていかれたのです。

その時、氏らがなぜ児童館にやってこられたのか、そのいきさつは忘れてしまいましたが、普段、婦人と子供しか出入りしない館に、初老の紳士と、既に老に達した紳士とが二人、のんびりと事務机に向かい、紫煙をくゆらせながら、何やら楽しく、かつ真剣に語り合っている姿は、場所が場所だけに印象の強いものでした。が、それ以上に印象づけられたのが、初老の紳士の身拵えでした。淡色のスラックスに、少し大柄なチェックのブレザーコート、そしてブレザーの胸には色合いの良いポケットチーフ、衿元にはやはり配色を考えたアスコットタイ風のタイ、眼前の机上には、ハットと牛皮の手提げカバンが、きちんと置かれていました。よく見るとハットのボアに、チロリアン風に色鮮やかな鳥の羽根が飾られ、程良いアクセントになっていました。靴はと言うと、カバンと同色のローハニー。どこまでも計算された色づかいと、小物のあしらいでした。

この時、私はこの紳士に「華」を感じました。この最初の出会いから十年、この間、くだんの紳士が福岡三氏であったこと、ふるさとを想う心が誰よりも熱いこと、郷土の歴史に造詣が深いことなど、いろいろ氏について知り、また、私が長久手町史編さんの職務に就いてからは、仕事上の様々な面で御教示を賜りました。

その間も、氏のダンディぶりは決して失わることなく、私は今なお、氏に十年前と変わらない、大きな「華」を見続けています。昭和六十二年八月

歴史紀行の発刊に際して

石崎 義雄

荒廃する自然、日毎に消える町並みや良き伝統。昔がどんどん失われていく。時代が代わっても「良き長久手の伝統」を未来に残したい、伝えたいと精魂こめて努力し続けてみえる福岡三氏がこのたび「歴史紀行集」を出版されました。

これは同氏が日ごろから「脚下照顧」の信念を貫かれ、情熱的な郷土愛から生まれた長久手古戦場史跡の整備・保存、歴史的景観の保存、文化財の発掘・保存等を常に話題とされ、他地域の状況視察を試みられていた。その他の各種研修会や小旅行に行かれた折りの「歴史紀行」を執筆されたものを、このたび冊子にまとめられ、同氏の研究成果の集大成といえましょう。

日ごろ敬愛する福岡氏に巡り会えたのは、十五年前に日本三大古戦場（長篠、関ヶ原、長久手）の一つ、長久手町に移住して最初に出会った人です。この情熱的な郷土史家・福岡氏とは二周りも年齢差があっても感じさせない行動派であり、歴史学から古美術、その他全般にわたって造詣が深く、これほど郷土愛に燃えている人は、他に類を見ないといえましょう。

習勇兼備とは、まさにこの人のことでしょう。それ以来未熟な私を引っばっていただき今日まで数多くの史跡整備のお手伝いの出来たことに深く感謝している次第です。

特に古戦場史跡については、古戦場公園、長久手城跡の史跡整備、長久手町郷土資料室の設立には長い歳月を費やして東奔西走され、ご苦労の結晶といえましょう。さらに木下勘解由塚、血の池公園の整備、施設づくりの提言や首塚・胡牀石の長久手合戦四百年祭記念碑の建立、安昌寺山門前の十一面観世音菩薩の石碑建立、また岩

作城跡、大草城跡の発掘調査、それに町史編さん室委員としての調査・執筆、また棒の手保存会の古老から若者へ免許状継承、町文化財の保存指定など多方面にわたって全精力を傾注されての活動には誠に敬服する次第です。このような多忙の中から、町文化協会、郷土史研究委員会、町史編さん委員、町郷土史研究会などの他地域の研究、見学をする研修会やグループ、個人旅行等の全ての旅の「歴史紀行」を毎回執筆されたものの集大成です。これは同氏が日ごろから「温故知新」を座右の銘とされ、こよなく歴史（郷土）を愛されてみえる証左といえましょう。きつと多くの方々々に絶賛を博すものと確信いたします。

中国・魏の武帝の言葉に

「老驥伏櫪 志在千里 烈士暮年 壯心未已」とあります。常に志は千里に在り、元気でその心は壯年だ。千里を見渡せるのだ」と。

益々お元気にて、今後のご活躍をお祈りいたします。

昭和六十二年八月吉日

使命感に生きる 歴史家 福岡鯨三氏

大 西 次 郎

政経公論社

福岡さん、最初に申し上げたいことは、常日頃、見るからに健康そのもので、澁刺たる姿で、人生の大事な節目である古稀を迎えられたことは何より結構なことであり、誠にお目出度うございます。

人、それぞれに生き方があるでしょう。普通世間一般の考え方からすれば、七十才を越えれば、そろそろ平凡に可愛い孫達を相手にして、残された余生を安楽に永生きしようと自愛するのが当然と思う人が多いと思われる中、貴方は、これまで三十年間に亘って、足で稼いで綴った郷土文化の数々を、後世の人の為に引き継ぎたい一念から、集大成のため更に研鑽努力しようと心に決めておられることは実に立派な生き方であると思います。

昔、中国の大聖哲孔子は「我四十にして惑はず、五十にして天命を知る・・・」と名言を残しております。

福岡さんは、過ぎし齡四十才の頃に、長久手が生んだ貴重な歴史家の一人としての使命を自覚し、発祥以来二千年の歴史を持つ郷土長久手の史実遺産を末永く後世の人達の為にと発心し今日に及んでいると思えてなりません。現代は「変化」の時代といわれます。人間の欲望は限りなく、安易な文化生活を求め余り、益々高度化社会へ進んで行くものと思いますが、半面において、何か置き忘れないか、つまり「心」の問題であると考えます。先人達は人間として、艱難辛苦の上どんな生きざまであったか。温故知新。人類歴史を振り返り、何時の時代が来て人間らしさを失わないため、郷土史の持つ意味は極めて大きいと云わねばなりません。福岡様の今後のご精進ぶりを期待して止みません。

昭和六十二年八月

紙本 翁 大石真虎 墨画 軸装

寛政四年に春日井郡に生まれる。十五才で月樵に師事して、後に土佐派の渡辺清に画を学ぶ。名古屋市熱田に住して、年魚市郡故郷の印章を押す。仁明天皇の正月京都清凉殿にて長寿楽の翁が舞う舞姿を絵画したもの

録三 所蔵



は じ め に

夏の朝は早くから明けて、多くの庭木の緑が日ましにこくなり、まきの大木の葉並も 茂りを増して、影を落とす、根元の一隅に 十七、八年前か、家内が植えた 花たちばなの一本が大きく成長して大株となり、昨夜の雷雨にぬれた葉上に露が 淡い緑の美しい葉並の重なるの茂りに、朝の陽光をうけて 滴と落ちる。春には白く美しい花を葉先につけて、六、七月頃には 青い葉影の 其処 此処に豆つぶ大の翡翠色の実を三、四個ずつくっつけてつけるが、秋の深まりと共に 実が淡紅色にかわり、次第に寒さが厳しく 正月頃には、雪の中に 真赤な実となり、常磐の葉影に その風情はひときわまして、池泉の水に その影を映し、宿した 美しい「花たちばな」と共に、長い 永い歲月、ひたむきに 長久手を愛し、郷土を愛してきた。

私が 強い信念と、情熱を炎し尽して、郷土 長久手の史実の調査 発掘に努めた。戦前の生活 文化は勿論のこと、長久手町の発祥二千年 数十代の先人が、その一代 一代に精魂をかけて、村(町)を築いてきた。昭和六年以来、十四年間に亘る 戦争生活と、敗戦後のくるしい生活の中で 立ち上がり、昭和三十年以降の高度経済成長は 速い都市化の波と、多くの土地整理事業、家の新築建替等で 生活状態を一変して、教育も文化も大きく変貌して 現代化の中に、その多くは 消滅し去っていった。現代に生きる 町民の一人として、黙視することは出来ない。先人が遺した 好いものは遺し、保存したいの一念が、私の作品となり、調査書となった。

幸にも 夫妻共に健康で、私は本年七十歳 古稀の年齢を迎えた。多くの方々の御指導と御援助を多年に亘り賜わり、亦花たちばな発刊に際しては、深甚なる賛辞を賜わり、心よりうれしく 亦妻の献身的な協力と、息子

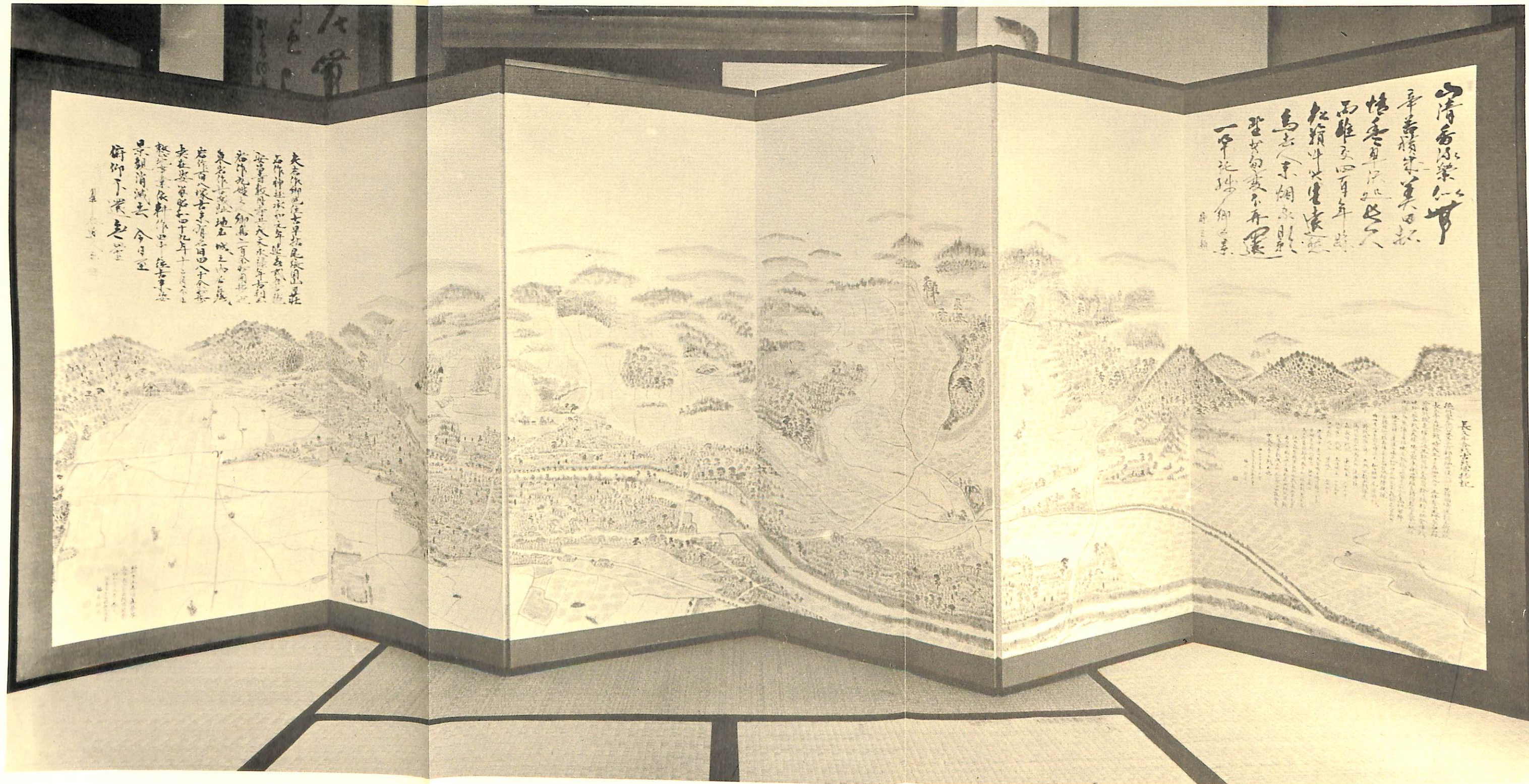
夫婦の理解と、恵まれた生活環境に深く感謝し、有難く御礼申し上げます。

今 花たちばなの発刊に当たり、願わくば 天よ 今 我に、十年の余齡と 健康をあたえてほしい。余命を馳し 郷土愛に一層の信念を炎して 長久手町の為に、社会に 少しでも尽し得れば 幸甚であり、人生を全して終わる。

いささか心の一端をのべて 謝辞とする。

昭和六十二年八月

福 岡 隼 三



紙本 六双屏風 天正十二年四月九日 長久手古戰場全図 福岡隼三 墨書画 所蔵

目次

絹本	勝入公	池田信輝	着色画像	一
序	山本鶴善			三
〃	浅井鹿雄			四
〃	日比野義信			五
〃	青山清治			六
〃	伊藤祥子			八
〃	石崎義雄			九
〃	大西次郎			一一
紙本	翁大石真虎	墨画	軸装	一二
はじめに				一三
紙本	六双屏風	長久手古戰場全図		一五 一六
目次				一七
第一章	福岡録三(翠谷)	書画作品集		二一
紙本	道法自然	墨書		二三
〃	月落烏啼霜天滿	墨書		二四
〃	臥竜梅墨画図			二五
〃	妙蓮墨画図			二六
〃	無為自然	墨書		二七

紙本	寿	墨書	二八
〃	風花月	墨書	二九
軸	南江悠流東海注	墨書	三〇
紙本	誠心	墨書画	三一
〃	青嵐東海静沖舟外	墨書	三二
〃	菜花映緑奪吟眸	墨書	三二
軸	寒山唯白雲	墨書	三三
額	黒部峡谷画	墨画	三三
〃	長久手合戦	徳川家康手紙文	三四
〃	〃	織田信雄手紙文	三五
〃	岩作石作神社前田園風景	墨画	三五
石碑	十一面観世音菩薩碑	安昌寺	三六
〃	長久手合戦四百年祭記念碑	首塚	三六
〃	〃	色金山	三七
樺板	徳風偃草紫極転星	彫刀	三七
書述書	神々之宿	書壁杉箱	三八
〃	警固祭	書林杉箱	三八
紙本	長久手町全図	真景写	三九
		墨書画	四〇
第二章	長久手町歴史資料集		四一
	長久手合戦記抄画		四三
			四四

長久手記	四五			
祭りの発祥	五一			
捧の手の発祥	五七			
絹本	社頭杉	西山翠嶂	着色画	六〇
	岩作古城跡について			六一
	長久手の石造物と岩作史考			六三
	小面一面			六五
絹本	白牡丹	着色画		六六
〃	うずらに秋草			六六
	長久手の神楽			六七
絹本	青桐にせみ	今尾景年	着色画	六八
	長久手の万歳			六九
紙本	触書	双幅掛	軸装	七〇
	長久手の歌舞伎芝居			七一
紙本	折本五冊	加藤豊翠	墨書	七二
	長久手の獅子舞芝居			七三
絹本	牡丹	着色画		七四
紙本	露白秋江	墨書		七四
	岩作首塚と首切塚由来伝説記抄			七五
	長久手御とめ山風聞伝説記			七七

森武藏守長可の戦死と遺言状記	七九
長久手の戦と徳川家康手紙文抄記外	八一
岩作百八塚記抄	九一
第三章 研修資料随筆紀行文	九九
大東町・榛原町史跡地見学研修について	一〇一
近江徳勝寺と琵琶湖めぐり	一〇五
東濃岩村城跡・明智大正村見聞記抄	一〇九
紙本 浅井思水 墨書画	一一二
額 メキシコ風景 洋画	一一二
根尾谷淡墨の桜を観る記	一一三
孫とともに奈良に遊ぶ記	一一七
初秋の信州・甲州路をたずねて	一二一
秋の行楽 みちのく二人旅紀行	一二五
延暦寺・三千院にたびして記	一二九
北海道二人旅行紀行	一三三
長久手町に生きた 郷土史と私	一三七
歴史紀行作品集の発刊に際して	一四二
おわりに	一四三

第一章 福岡隼三（翠谷）書画作品集



紙本 道法自然 墨書
老子題 卯年春日 翠谷書

鏡三書 所藏



紙本

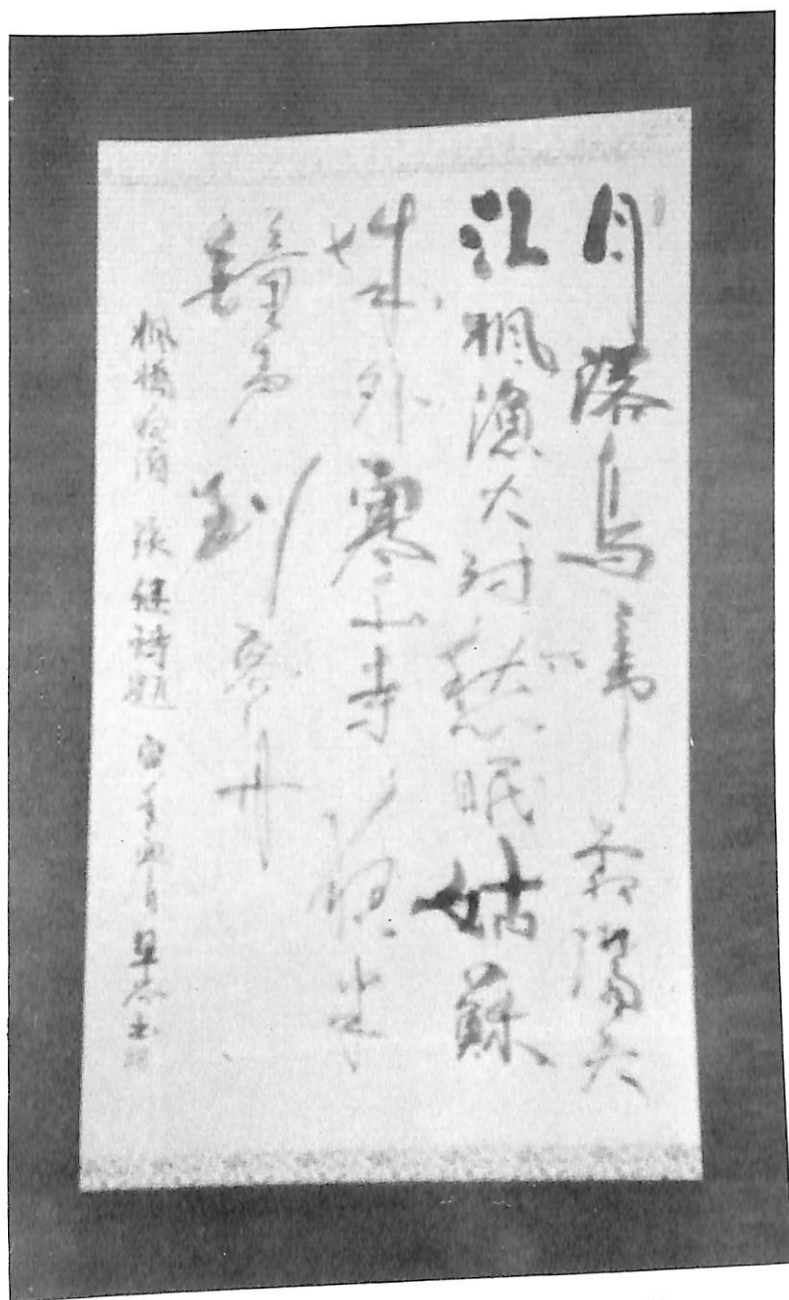
臥龍梅 墨画

雪裡寒梅花作粧

昭和六十一年三月作

鏡三書画

所藏



紙本

「月落烏啼霜天滿

江風漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺

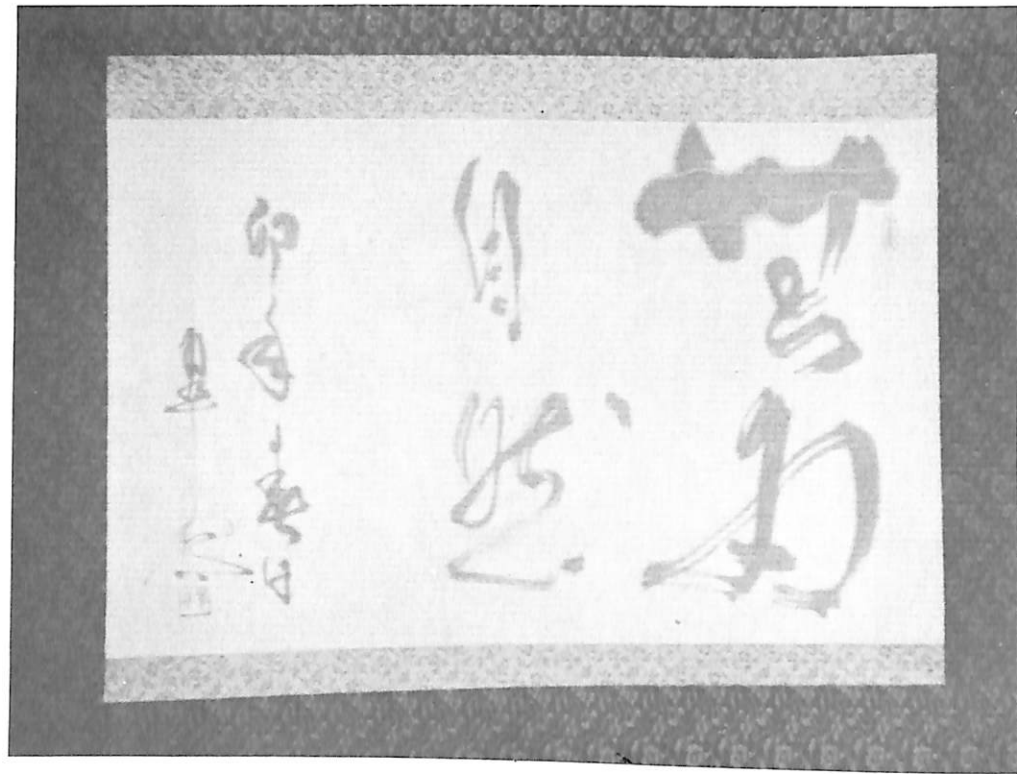
夜半鐘聲到客舟」

墨書

寅年 寒日 翠谷書

鏡三書

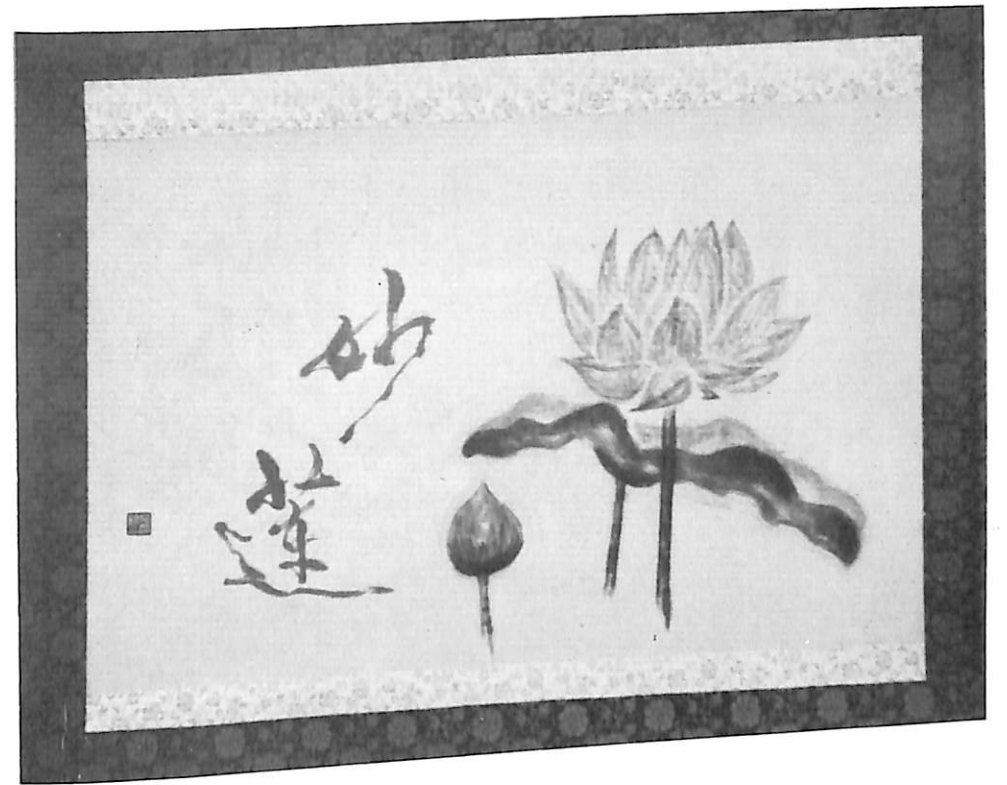
所藏



紙本

無為自然 墨書
卯年春日 翠谷
昭和五十年作

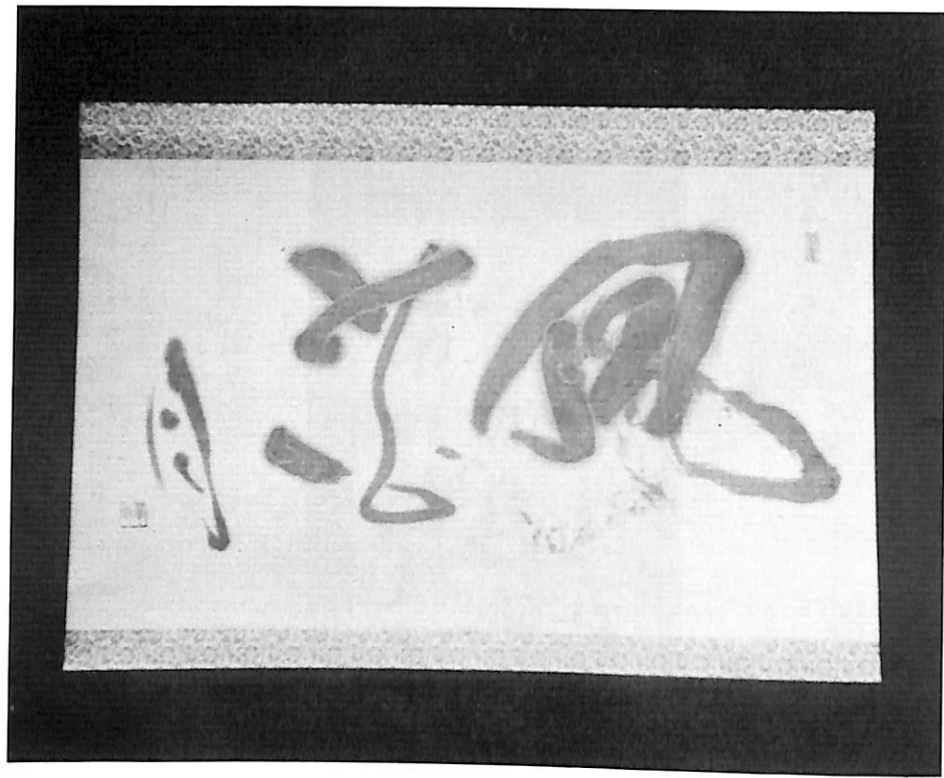
三書
所藏



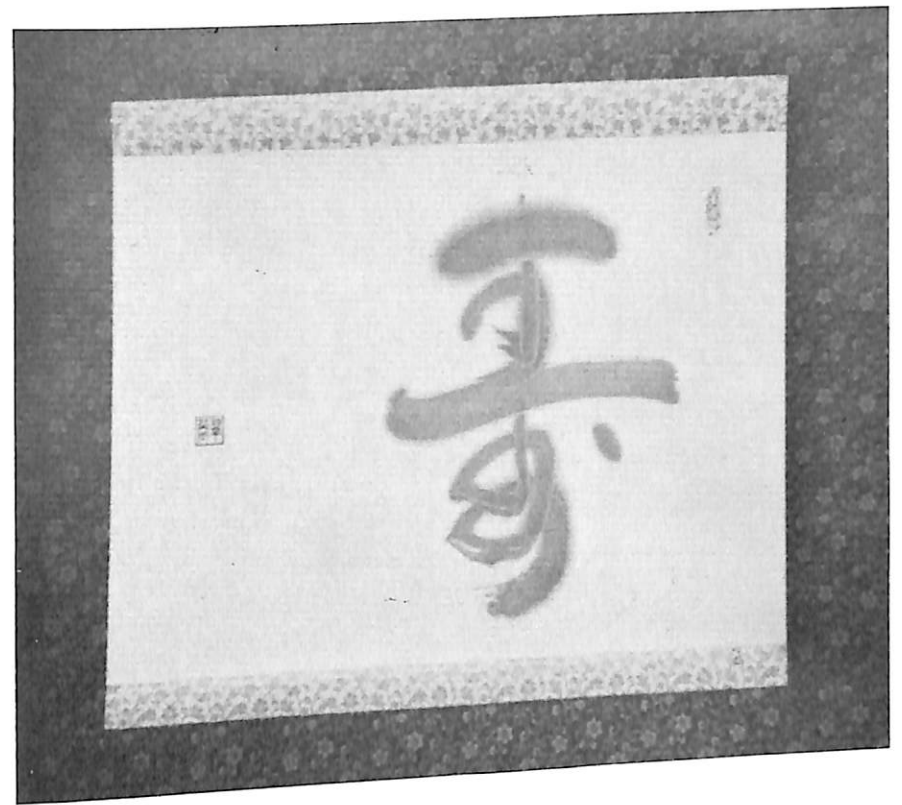
紙本

妙蓮 墨画
昭和五十六年八月十四日
亡母かね儀三回忌に画く

三書画
所藏



紙本
風花月 墨書
昭和五十一年一月作
鯨三(翠谷)書 所藏



紙本
壽 墨書
昭和五十一年一月作
鯨三(翠谷)書 所藏

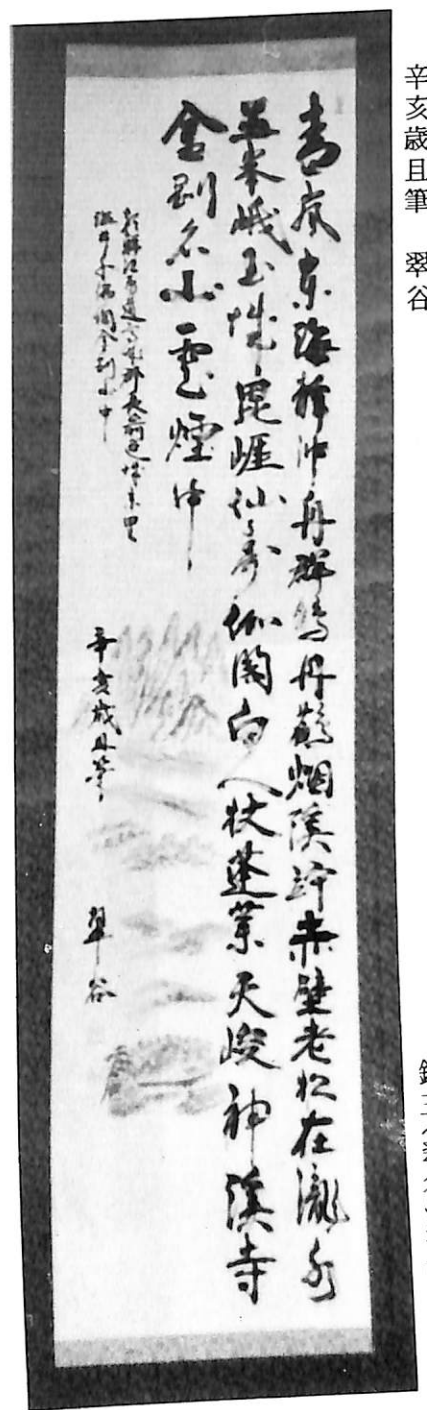


紙本 誠心 墨書画
 昭和五十九年七月作
 富士は金泥にて画く
 鏡三書画 所蔵

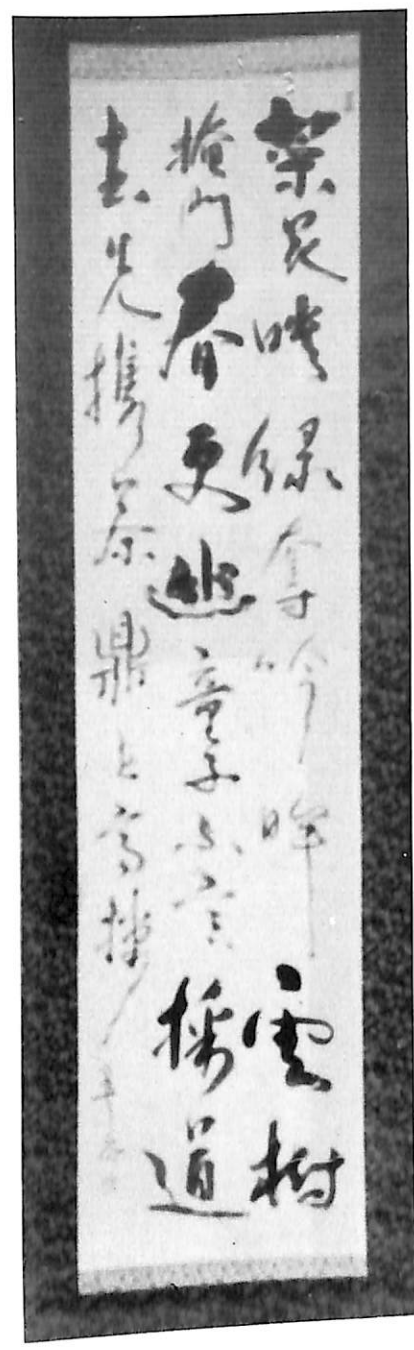


軸
 南江悠流東海注 赤壁老松深淵影 孤舟愁々高城浜 残月金剛懸秋寒
 鏡三自作詩
 朝鮮江原道高城郡高城邑東里赤壁橋にて金剛を望む
 昭和二十五年頃書作
 福岡翠谷書（鏡三）軸

紙本 「青嵐東海静冲舟外」 朝鮮江原道高城郡長箭邑城東里温井千仏洞金剛山中 墨書
 辛亥歲且筆 翠谷 録三(翠谷)書画 所蔵

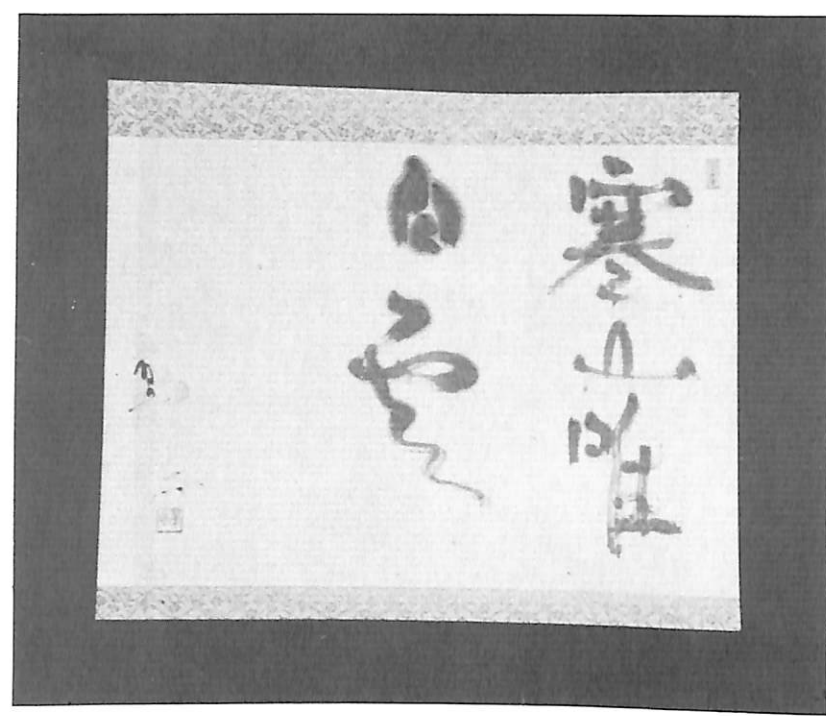


紙本 「菜花映緑奪吟眸 雲樹掩門春更幽 童子不言採道去 先携茶鼎上高樓」 録三(翠谷)書 所蔵
 作品は昭和四十八年春作



寒山唯白雲
 淡墨竹筆にてかく
 昭和四十二年頃の作品

翠谷(録三) 書軸



昭和五十八年七月
 岩作石作神社氏子総代七名 黒部峡谷に
 清遊して画く
 黒部雲峯天至佇 千尺白雲生落下
 録三作 詩題 書画 額装

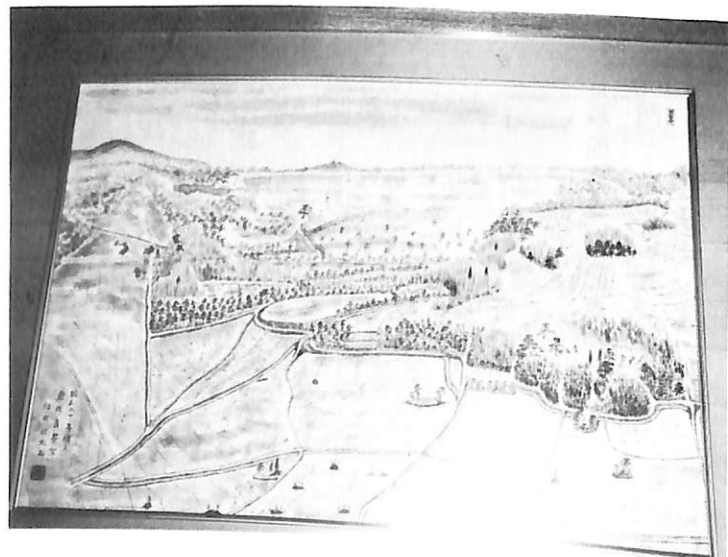




長久手合戦 天正十二年四月九日
徳川家康 長久手町大字長湫字仏ヶ根、
東浦 からすが峽間の地に於て戦い大
勝す。当日、岡崎城主 平岩七之助
鳥居彦右エ門に勝利の手紙を送る。
絵は昭和二十年頃の仏ヶ根風景図
鏡三書画 額装
長久手町役場 所蔵

長久手合戦に勝利を得た徳川軍の織田信
雄が四月十一日吉村又吉郎に合戦勝利の
手紙文
絵は仏ヶ根からすが峽間 武蔵塚等古戦
場風景

鏡三書画 額装



岩作石作神社泥亀首立花かり又立石池
権八池 北山高山本地ヶ原と一本松
白山林かしゃご塚 手洗池 妻宮塚
恵比須塚 直会社等及昭和四十三年土
地整理以前の田園風景を画く。

鏡三画 額装 所蔵



十一面觀世音菩薩碑
 岩作 安昌寺門前
 昭和六十年六月 鏡三寄進建立
 福岡鏡三書



長久手合戦四百年祭記念碑
 岩作元門 首塚に建立する。
 昭和五十九年四月九日
 福岡鏡三書



長久手合戦四百年祭記念
 岩作色金山上床机石前の
 天竜青自然石に刻す
 昭和五十九年四月九日
 福岡鏡三書



櫨 厚板材に自書彫刻す
 徳風偃草紫極転星
 史跡 胡牀石銘
 昭和五十三年一月作

福岡鏡三書彫刀

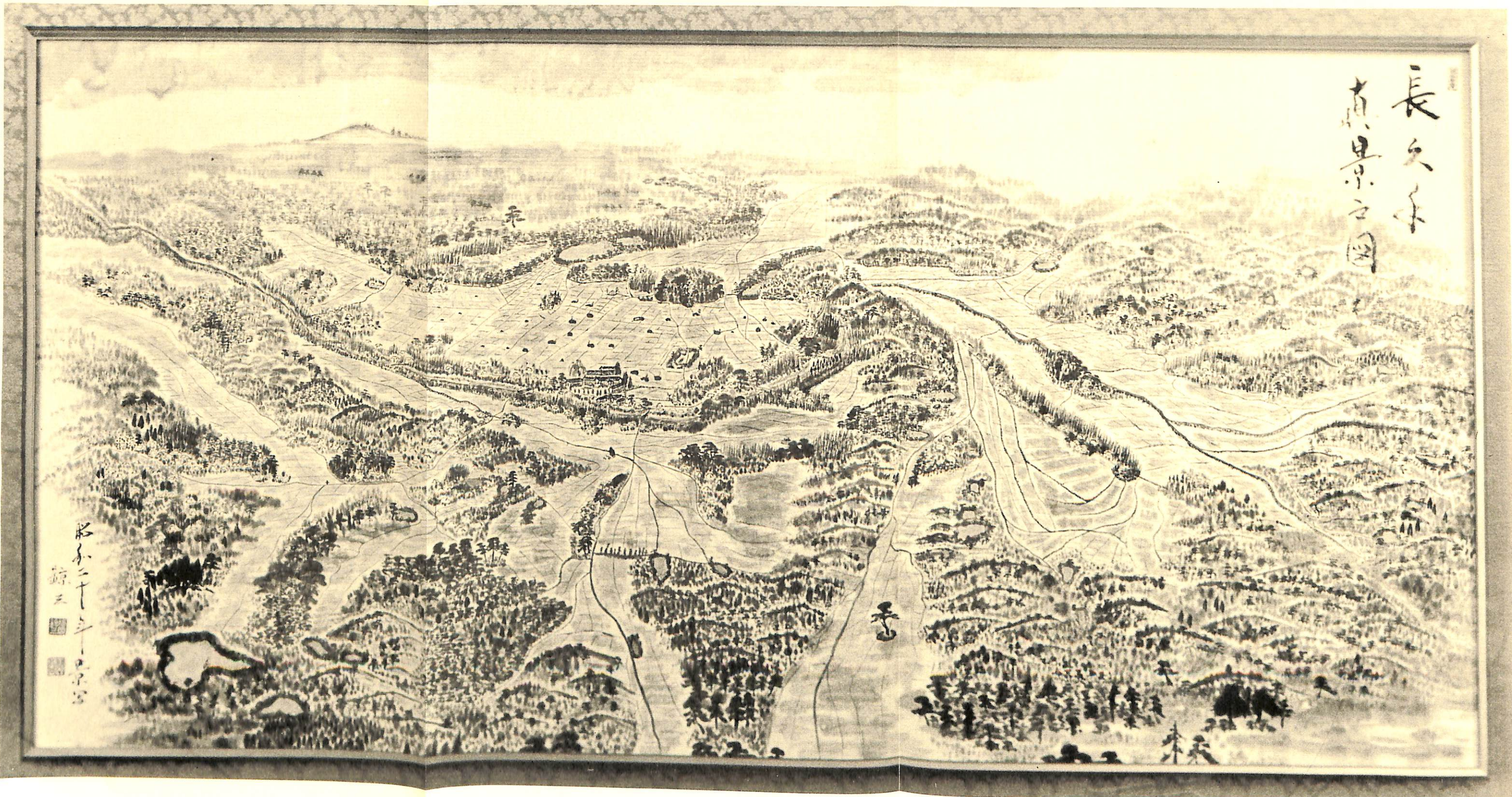
寸法 一八一×三三三×三



箱中の神々之宿は長久手町岩作石作神社
 長湫景行天皇社 北熊神明社 前熊多度
 社 大草熊野社の五社を書いたもの
 書壁書類深箱は杉材
 彫刻共に 鏡三筆刀



箱中の警固祭は岩作警固祭 猿投祭南合
 宿二十四ヶ村の祭り行事を詳記した。
 書林書類深箱は杉柾目材
 表題 書林は鏡三筆



長久手
真景之圖

長久手
福岡鯨三

紙本 長久手町全図 真景写 福岡鯨三 墨画 長久手町役場 所蔵

第二章 長久手町歴史資料集

長久手合戦記抄画

小牧、長久手の戦 天正十二年旧四月九日（五月十八日）（一五八四年）
徳川家康、織田信雄は小牧山に、羽柴秀吉は犬山城より楽田に拠り対陣するが、容易に勝敗が決せず、秀吉方の部将池田勝入信輝は、家康留守中の岡崎城攻略を策して、四月八日夜陰ひそかに、篠木柏井の地を出発して南進する。その総勢二万余人と云う。それを後刻しつた家康は急ぎ信雄と共に、小牧山を発し急追して小幡城に入る。

四月九日長久手合戦当日早朝の隊形は、秀吉方第一軍池田勝入父子が日進町岩崎城に続いて第二軍森長可が、第三軍堀久太郎秀政は景行天皇社附近に、第四軍三好秀次は尾張旭市本地ヶ原白山林に、延々長蛇の態勢にあった。小幡城に軍議した家康は軍を二分して大須賀康高、丹羽氏次の別軍が、九日払暁白山林の三好秀次軍を攻める頃、家康本隊は信雄と共に、小幡城を発して山口川、本地小坂を経て岩作立花色金山に登る。金扇の馬標を押立て騎下の軍勢九千三百、八幡の森、神明の森、立花御林の山野にあって、軍議展望する頃、池田勝入により岩崎城が落城する。白山林の三好軍も破れて南に敗走し、これを追う徳川方大須賀、丹羽の諸軍が、長湫松ヶ根、杉ヶ根、高根の山陵に拠る堀秀政と遭遇して香流川附近に戦う。「世に松ヶ根の合戦と云う」。その頃家康は勝入と決戦すべく軍を御旗山、東浦附近に進め布陣する。先陣は井伊直政、奥平信昌、織田信雄は予備軍として先達附近に駐屯した。後続の三好、堀軍の戦いと、家康軍の追跡を知った、池田、森軍九千余人は岩崎城より馬を返して、長湫字山ノ田、喜婦嶽、山越、菅池の山野一帯に鶴翼の布陣をする。「松ヶ根の決戦である」

時に天正十二年旧四月九日午前九時すぎ、毎日のように降り続いた小雨も昨夜に上り、晴れて（五月十八日）松ヶ根田ノ尻方面より井伊直政軍と池田紀伊守軍の鉄砲隊の撃かけにより戦端は開かれた。鴉廻間、松ヶ根の攻防を繰返して、一進一退、力戦奮闘しつつ家康は鴉廻間の山頂より前山（御馬立所）の山陵第一線まで馬を進めて血戦する時、不幸池田軍の左翼隊森長可（二十七才）が鉄砲により落馬遂に死する。その混乱に乗じて益々徳川軍の猛追撃となり、池田軍も敗走する。主将勝入信輝（四十九才）は松ヶ根において永井伝八郎に討れる。また長子紀伊守之助（二十六才）父子共に松ヶ根露草に消えた。彼我の戦死傷者二千五百とも三千五百余人とも云う。「白骨風寒雲影暗」と明和八年十二月赤林信之が詩題している。戦いは徳川軍の勝利となる。時は十二時を過ぎていたと云う。「巳刻にはじまり午刻」と史書にある。

戦勝後家康は全軍を岩作立花の地に集結して、尾山ヶ沢（熊張立花）にて、池田勝入以下の首実驗と戦場処理も早々に小幡城に入城して、後に小牧に帰る。長久手における池田軍の危急を知った羽柴秀吉は、家康を追って竜泉寺城に入るが時すでに遅く、無念勝入戦死を知って犬山楽田に帰還する。以上で合戦を概説するが、往時の岩作村は近隣の大村として、五十戸以上、三百五十人前後の人が農耕していた。戦況と共にその殆どは三峯の山野に七日以上難をのがれていた。又長久手村人も高針界の山地に難をさけており帰家は安昌寺雲山和尚と共に戦場の処理及び埋葬等回向して後に首塚となる。

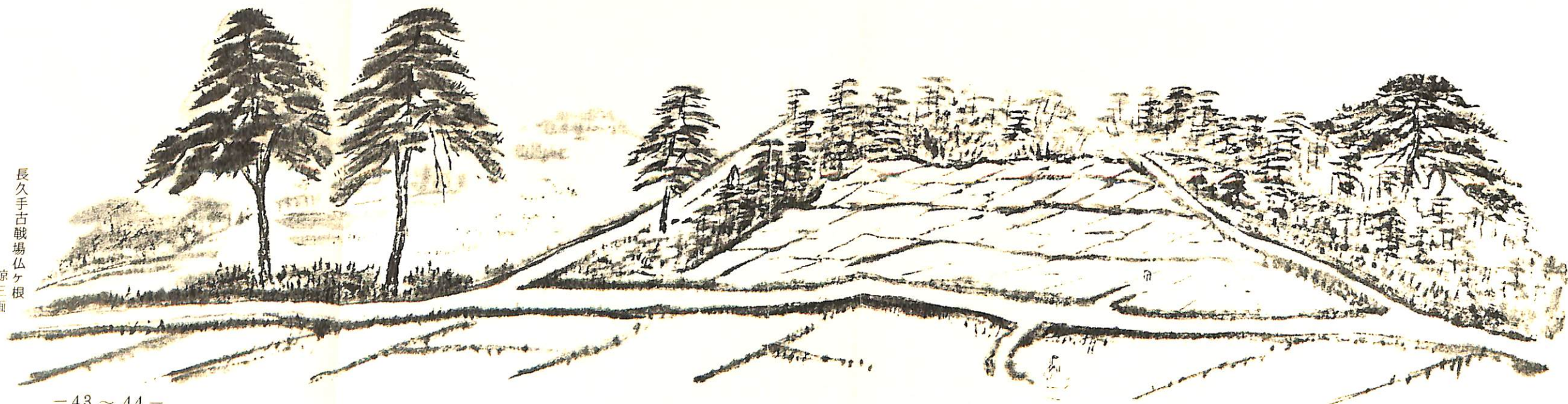
「松ヶ根に戦雲去っていく星霜、松吹く風は蕭々と哭き、露草にすだく虫の声、花の若武者春四月（勝入、之助父子）竹叢のあたり路のとう萌る小丘（勝入塚）に桜花紛々と散して」此処に合戦以来百二十二年、時宝永三年四月（一七〇六年）尾張藩臣福富親茂床机石、首塚の二碑を建立する。又明和八年十二月人見弥右エ門赤林信之、勝入、紀伊守、武蔵塚等に建碑する。亦宝暦十三年十月、安永二年九月及び文化八年四月と三回に亘り代々の名古屋藩主徳川大納言卿が古戦場を巡視して安昌寺に御入来せらる。其の後明治四十三年前後に床机石、首塚と勝入塚、庄九郎塚、武蔵塚及び御旗山の六ヶ所がそれぞれ現在の姿に整備して曰く「不朽遺蹟又慰遊魂也」と昭和九年四月三百五十年祭を盛大に挙行する。亦昭和十四年九月七日国の指定史跡となり、現在長久手町を代表する文化財としてある。

昭和五十九年春四月桜花の候、此処に四百年祭を迎えるに当り感無量 聊か合戦伝記の拙文を抄記する。

昭和五十九年三月

長久手町郷土史研究会

福岡 録三 画



長久手古戦場松ヶ根

録三画

長久手記

長久手（町）が上古何時の時代に発祥したかは不明で、縄文 弥生時代等の遺跡の確認は 今だない。古墳時代七、八世紀と認定する古墳は、北熊神明社境内に二基、及び字助六山境内に一基は確認されて、未だ他に未確認の古墳が数基程あるのを伺い知ることが出来る（北熊古墳群）。かつて昭和四十五年頃に愛知青少年公園設営当時 地域内の古墳は未確認のまままで消滅した。亦岩作字雁又及び高根山稜等の古墳、及び岩作字塚本の田中に多く散在した草塚 百八塚（愛知県史第一巻五十一ページ）等も未調査のまままで、昭和四十五年三ヶ年による岩作土地整理事業の中で、総て消滅した。

又その他 大草 前熊 長湫等の所在は不明であるが、長久手町内に七、八世紀の古墳は確認されているので、すくなくとも五、六世紀頃には既に岩作、北熊の地には人の居住はあったとする。

上古孝徳天皇の大化改新（六四五年）に、国 郡 郷 里が置かれ、岩作は 尾張国山田郡石作郷として今より一千余年前に編さんされた 倭名抄と云う本にのる。亦石作神社は承和元年（八三四年）の創建で、尾張氏祖を祀る。明治五年五月には 延喜式内郷社となる。石作連は、

一説には 上古景行天皇御東征巡行のおり、石作連 長湫に斎宮を設営して歓待した。

一説には 六七二年の壬申の乱には、尾張美濃の兵と共に 大海人軍に参加したと云う。

一説には 七八〇年の坂上田村麻呂軍の東征に従軍したという。

一説には 尾張石作氏（祖）は石作（岩作）の地を中心に 附近一帯の地域を数世紀に亘り支配した首長で、地方豪族（郡守）という。

一説には 古墳時代終末期 白鳳期には、尾張氏石作連が 権道寺を創建したと云う。

一説には 石作連は豪族で武人の神であったので、古くより棒ノ手 鉄砲を奉納し、徳川時代尾張藩も祭祀として許してきたので猿投祭り、岩作の百柄鉄砲として、古来より有名である。亦北熊も岩作と共に古く古墳時代尾張氏首長一族墳墓の地を香流川の源泉 三ヶ峯幽翠の聖地に設営して神明社斎宮により永く祭祀したので、古墳祭祀守護人として神明社周辺に居住したのが北熊の発祥で、後年には寺院が建立し、大日如来、薬師如来、観音が祀られていったが、人は水害の被害により、神明社附近の地より現在の地に遂年移住して北熊を形成した。

長湫も亦古墳時代には山間の「くて田」の辺りや アシ原の沼地の河畔に集落を其処 彼処とつくり、氏神を祀って生活したが、時代推移発展の中で、修合して郷となり 氏神も三社相殿（神明社 景行社 白山社）として、景行天皇社となり、承和四年（八三七年）に創建し、長久手（長湫）を形成して発祥した。

以上で長久手古代の発祥を概略したが、上古の時代は支配する首長が祭り事により治めて、神社 寺院等を創建し、神仏の信仰教儀 奉納講社衆等の祭礼行事と、弥生以来の農作業による 五穀稲作の豊穰を祈り、子孫繁栄を祈願する、農事信仰と合体して、時代の中で発祥したのが郷土芸能で、長久手に古く発祥したのは、神楽で棒ノ手（棒振 棒舞）が室町時代に、警固祭りも天文年間頃と云う。今長久手町地内に所在する 神仏に關係の深い小字の地名を列記してみると、上郷地区より 字神門前 宮脇 寺田 神明 大日 観音堂 根ノ上 大明神 権道寺 宮前 宮後 元門 山神 権代 寺山 権田 仏ヶ根 香桶 先達 富士浦 武蔵塚 氏神前 神作 根ノ神 卯塚 塚本 坊ノ後 等と多くの地名を遺している。

岩作色金山頂床机石は自然石で上古の時代、天津神の降臨を願い 唱い 舞い 祈願した、石くら神仰の聖地で、亦尾張 三河の国境、三ヶ峯の山頂に祀る 自然石の水神碑も古く北熊が水分の神として奉祀してきたものである。

である。

その頃権道寺は創建されて、古墳祭祀は 斎宮を奉じて、永く鎌倉時代以降頃までも続き、三ヶ峯附近一帯の山地には、土師部氏により須恵器 土師器等の碗 皿 水瓶等が、八世紀後半から十一世紀にかけて多く焼かれて十四世紀（室町時代）には終る。猿投古窯 山茶碗窯とも云う。山麓の集落は 郷となり、室町時代頃には大日如来を祀り観音 地藏信仰が入り、香流川畔には観音の道が出来て、岩作寺山に妙善寺千手観音（寛文年間に廃寺） 安昌寺十一面観音 大草三光院十一面観音 北熊聖観音と、観音信仰の花が開かれる。時代の中で長湫に斎藤氏、岩作に今井氏、上郷に福岡氏等（室町時代）郷土支配者が城塞を構えて支配する 室町末期争乱時代 天台真言密教による 三光院 常照寺 安昌寺 教円寺 宗延寺 前熊寺等、多くの寺院が建立されて、後年 禅宗 真宗へと改宗されていく。（大草 三光院に宝徳年間建立碑 長久手町最古）

戦国争乱の当時 一般郷民は苛酷貧困な社会の中で、信仰に生き祭り余興行事の娯楽に生きていく。その頃に郷土芸能は発祥する。

神楽は古く、棒ノ手は警固祭りと共に天文年間頃より猿投祭り 氏神祭りにより発興していく。亦当時の真宗寺院の檀下講衆制度 道場制度等は、戦国争乱時代の渦中で結成されて（長湫常照寺に長久手合戦戦死三将の池田勝入外二将の五輪塔三基建立及び元和元年古墓等建立）亦、一般禅宗寺院等の檀下制度及び念仏講衆制度等は徳川時代初期の寛永年間頃より寛文年代頃に各寺院の結構整備と共に構成されて、信仰と共に年々強固となっていく。又、寛文年間当時の旧長久手村（長湫）戸数三十一軒 人口四百十五人 馬二十五疋、旧岩作村 戸数七十一軒 人口五百十六人 馬三十五疋 旧北熊村 戸数二十七軒 人口百七十八人 馬十九疋、旧前熊村 戸数二十五軒 人口二百十四人 馬十三疋、旧大草村 戸数十九軒 人口百二十七人 馬十一疋と云う（寛文十年村々

覚書による。一、六七〇年。

前熊多度社 北熊神明社の二基の石鳥居は、寛文初年に建立したもので 長久手町を代表する稀有な石造物で 往古郷民の信仰心を伺い知ることが出来る。亦前熊 牛頭天王社夏祭り 山車 打囃太鼓は、天和二年（一、六八二年）に発祥したと云う。又、大草三光院 猿投祭り絵馬も天和年と云う。

安昌寺 岩作十一面観音 九万九千日祭り、北熊大日祭り等は、それより発祥は古く、各村々の秋の氏神祭り 大草観音祭り 地藏祭り等々と多くの村祭りの中で、徳川時代中期 元禄年間頃より経済的振興により急速に各村共に戸数人口が増加して、多くの田畑が開拓され、用水溝渠が築造されて、岩作に於いても其の頃に、中根原、高根等が開拓発祥する。又寺院の念仏講社衆や個人の墓石類 碑等もこの頃より建ち初まり、延宝年碑 元禄年碑（岩作、大草、長湫）等が建立する。長久手古戦場史跡 床机石 首塚碑は宝永三年、尾張藩士福富親茂が建立する。

亦池田勝入 之助 森長可碑等は、明和八年に尾張藩士 人見弥右エ門 赤林信之が建立する。徳川時代封建社会の百姓統制の压制下の中で 貧困生活と 不自由に呻吟した農民は、三河百姓一揆 高山百姓一揆等と、一揆の続発する世相の中を、信仰と 祭りにより、生る喜びと 自由解放を求めて、伊勢参り信仰 山岳行者信仰 秋葉山火防信仰 庚申信仰等多くの農民信仰が年々盛大に、警固祭り 曳馬祭り 棒ノ手 夏祭り 其の他多くの祭り（秋葉山常夜灯 庚申碑 道標碑等は寛政年（一、七八九年）より文化、文政年頃に多く建つ）が行われ、尾張藩に於いても、享保年以降 度々の禁制と取締の中を、文化 文政年頃を頂点に万歳 獅子舞 歌舞伎芝居 獅子芝居 義太夫等を導入し伝承して 祭りに奉納する事、即ち余興 娯楽行事として、又村々には 旅芸人 旅役者 売薬商人 旅職人等の往来もはげしく、時代は流れの中に変遷して「倒幕」 明治維新の朝明と

なり、明治親政を迎えることとなる。大政奉還 王政復古の大号令は版籍奉還により 各国に県令（県知事）が置かれて政治は変ったが、徳川時代三百年の封建思想の残る中に、平安時代以来一千有余年の神仏修合時代は終り 分離して、明治五年五月には郷社、村社の社格を発令する。亦学制を定め、明治六年には徴兵令 税法令等 多くが発令されて変革する。

明治十年の西南の役後までも 国政は困乱するが、其の後の躍進により、日・清兩國間不和を生じて、遂に明治二十七年、二十八年の日清戦役となり、又十年後の明治三十七、八年の日露戦争等により、国論の統一、産業の開発々展 国威の宣場等により、明治三十九年五月 上郷 岩作 長湫の旧三ヶ村が合併して、此処に長久手村となる。当時の村は稲作中心の農業で、養蚕飼育が盛んとなり、又垂炭採掘も年々増加して、時の長久手村初代村長は、元尾張藩臣で 岩作の地頭であった吉田知行（北海道八雲町に移住開拓して開祖となる。明治十六年三月に尾張徳川家家令となり、明治十八年には欧州視察旅行 遊学して帰る。岩作字中島一番地に居住する。実父知紀は岩作安昌寺に葬る）は、岩作字中島一番地に居住して、合併当時の役場とした。村長月額 十四円、収入役 九円、書記（一名）八円、書記（三名）七円の給料で、村長以下六名であった。（長久手町古文書） 日露大戦後 国威宣場により、明治人骨骨は旺盛となり、明治四十年前後には、色金山 床机石 首塚 池田勝入 之助 森長可等、長久手古戦場史跡地の碑の建立、石垣等 今日姿に整備した。先人の恩恵の賜物で、昭和十四年九月七日 国の指定史跡となる。

明治初年より大正時代まで、猿投祭り 各村々の氏神警固祭り 曳馬祭り 棒ノ手 歌舞伎芝居 獅子舞芝居等が、記念行事 縁日行事としても多く興業されたが、昭和に入り、六年には満州事変がおこり、十二年には日華事変が勃発して、国運は増進し軍国化して行く。昭和十六年 遂いに太平洋戦争に突入して 戦果むなしく

二十年八月敗戦となり、終戦時食糧飢饉の線上にあったが、よく耐え 凌ぎ よく復興して、高度経済政策は、豊かな祖国を形成したが、「人の心」は経済発展と共に「金」や「物」の影に忘却されて、戦前と 戦後は一変した。意義ある伝統文化は、現代と云う世情の中に消滅し、大名古屋経済圏都市化の波は、長久手の開発宅地化発展と共に、自然の山野は崩潰し、数百年来に亘り営々と耕作した美田は 轟々たるブルドーザーの足下に埋没して、整然たる宅地化の中に 長久手古戦場 前山御馬立所 血ノ池 長久手城跡 等悉く 長久手東部土地整理組合により消滅した。亦現在設立中の長久手中部土地整理組合により、今後四、五年以内（昭和五十九年より 昭和六十三年まで）頃までには、大字長久手中部地域に所在する（長久手古戦場）自然の山野、鴉ヶ廻間 杉ヶ根 桧ヶ根 高根の連峯は悉く。御旗山だけを残して 崩壊消滅せんとしている。「開発と保存」の相反する重大な課題を如何に善処して「長久手百年の大計」後人によく継承し伝えるのが、現代に生きる長久手町民一人一人の務めであることの自覚と英知、今長久手町を代表する 文化財 長久手古戦場 磐固祭り 棒ノ手は、四百年來我等先人が辛苦の中にも伝承して来た 貴重なもので、他に獅子舞 万歳 歌舞伎 獅子芝居等、演劇は時代の中に流没して消滅すると言えども、この三大文化財だけは、不滅栄光の中に、後世ながく継承したく祈念して筆を置く。

昭和六十年三月

長久手町郷土史研究会

会長 福 岡 鯨 三

（昭和五十九年度郷土史研究会資料）

一、祭りの発祥

長久手町及び町近隣附近の地に、古くより多くの祭り神事が行われてきた。原始上古の時代、人は火の神、水ノ神、山ノ神を祀つり、又老大木、巨岩石等を祀ったのは人間自然の摂理であった。

神代の岩戸神楽に始まる神事より、弥生時代、稲作が中国より、朝鮮より、又東南アジアより導入すると同時に、稲作と共に祭り行事が多く移入したと言う、

上古の時代より、近世の時代に至るまで二千年余の歴史は長く、稲作農業生産以外人の生計をはかる道はなかった。

山間に、川畔に、数戸の農家をなした集落は、何時か洞となり里となり、島、郷と呼び村邑となって農業生産共同体として生成し生活していった。集落の家長、族長は、数十人の人を支配して、水ノ神、火ノ神、山ノ神の自然神を祭祀した摂理によって、生産物の配分、管理、開拓等を進め集落の進展を図り、何時か其の永年の功績によって、氏人の氏神として宅地神として祀られた。

長久手町大字岩作、長湫、北熊、大草、前熊の発祥は古く、特に岩作、北熊は原始、弥生の古代に既に人の生存があったらしく、北熊東部山稜の地辺に、亦神明社境内地域には、今数基の古墳を跡す。

岩作石作神社は延喜式内の古社で、尾張氏石作之祖を祀る。古く倭名抄に、郷名石作とある。石作は、岩作にして、ヤザコと言う。ヤザコは弥座固にして、弥は歌舞音曲を意味し、座は多くの人が土の上に座ることであり、固は一ヶ所にかたまること、山上石くらの聖地に、多くの人が集いあつまって、歌い、舞い、歓喜して、天降りまします神々を迎え奉る。祭りの様を郷名として今日に残る。古代用語である。

人々は原始神代の時代より、この様にして祀り祭りして来たのも、生る人間の自然の心からの発露である。

上古神代の祭り神事が弥生時代、稲作の全国分布発展と共に、稲作行事の一つ一つが、祀り祭事として、種まき祭り、田植祭り、虫送り祭り、刈り上げ祭り等々、秋の豊年祭りの中に同化して其の年一年の最後とした。五世紀始め、我が国に仏教伝来と共に、遂次全国に寺院が建立されて、進出し信教の祭事と稲作祭事が、何時か自然の摂理の中で修合してゆく。七、八世紀頃、全国の大社に神宮寺院が併立されて、伊勢神宮寺、熱田神宮寺、多賀大社神宮寺、多度社神宮寺、越前氣比神宮寺等々多く社領の拡大と共に益々増大していった。又、津島神社、眞墨田神社、猿投神社等にも神宮寺が併立されて、神仏は修合して信教は愈々振興して、祀り祭儀は年々盛大を極めていった。又、長久手町内にも岩作安昌寺に八幡社、長湫常照寺に熊野社、前熊前熊寺に津島社等多くの寺院に社寺が併立されたのは、天正時代前後からのことである。

長久手町の祭りは古く、岩作石くらの原始祭事に始まり、今の岩戸神楽、湯立神楽となって伝う。北熊六、七、八世紀の古墳之の祀祭儀は、古くより数百年來に亘り、神明社により斎祀祭されたものであろう。

石作神社、景行天皇社の祭りも、亦承和年中に初まり、今より一千百余年の往古である。

北熊の山地、尾張、三河の国境に祀る、水神の自然石之の祭祀亦古く、岩作安昌寺の十一面観音は、嘉祥年より九万九千日の祭儀が、一千余年の今日まで続いている。北熊の大日如来、大草の延命地藏祭り、三光院の大草観音祀り等は古來有名にして古く、永享室町時代前後に始まると云う。長久手町警固祭りは古く、往占の時代より各郷村共に、豊年祭りとして神社寺前に引馬祭りとして、献馬奉納に初まったのは、鎌倉時代、時の武将が戦勝を祈願して、鎧、兜、弓箭、馬等を起請奉願したのに初まり、古くより箱根神社、三島大社に神馬、絵馬等を奉納しているが、馬上に馬標駄司、的位を標示して馬装をするようになったのは、天文、永祿年代のことと云う。其の後、猿投祭り、竜泉寺祭り等が文化、文政年より、天保、明治年間へと百八十余年に亘り隆昌を極めて今日

に残る美麗整然たる警固祭りの姿を形作って来た。(警固祭りは別に詳記する)

前熊、牛頭天王祭りは古く、夏祭りとして長久手町を代表する唯一の祭り、山車と共に天和年銘を有する、祭り太鼓を保存する。又多度社々頭の石鳥井は、寛文元年建立にして長久手町最古の石造物として稀有である。又、岩作石作神社には、享保六年銘を有する神楽太鼓を社宝として保存する。又、報恩講、道元講等本山宗祖の祀りとして元仁、安貞年代より浄土眞宗曹洞宗を開いてより、七百五十余年、法燈守って今日に至る。人々の信仰深く厚きを知る。

又其の他に、山ノ神祭り、日待・月待祭り、秋葉祭り、左義長、七草がゆ、ひな祭り、七夕祭り、盆聖露祭り、節分、農休み、秋揚げ、虫送り等多くの稲作祭りと共に、御嶽講祭り、金比羅祭り、弘法祭、観音、地藏祭り等々、念仏講祀り等、上古原始の神祭りは、稲作行事祭祀に混同して神仏教祭法事へと時代の発展推移の中を變遷しつつ修合して、今日にある祀り祭儀を多く残す。

二、島、郷、邑村の発祥

明治三十九年五月、岩作村、上郷村、長久手村(長湫)の三ヶ村が合併して現在の長久手町(当時は村)が成立した。徳川時代は北熊村、大草村、前熊村、岩作村、長久手村の五ヶ村として、古代より生成発展して来たものである。

(一) 明治九年十月、北熊村、大草村が合併して、熊張村となる。

(二) 明治十一年十二月、郡区町村編成法により、戸長制を置き、明治十六年五月より実施した。愛知郡第三十

八組として、岩作村、前熊村、熊張村が役場を岩作村に設置した。
又、長久手村（長湫）は、第三十七組として藤森村、猪子石村が役場を藤森村に設置した。

(三) 明治二十二年十月、熊張村、前熊村が合併して上郷村となつて、町村制を施行した。
(四) 明治三十九年五月十日、当時の岩作村、上郷村、長湫村の三ヶ村が合併して長久手村となり、役場を岩作

字中島一番地の地に設置して、現在の長久手町となる。
往古、五ヶ村の発祥は各々古く、詳かならずも特に北熊郷、岩作郷、長湫郷の発祥は、弥生の古代に初

まり、

(1) 香流川の源泉、三ヶ峯の山稜奥くふかく、北熊、神明の地辺に古代の遺跡と古墳を数多く残す。亦鴨田、香流の川畔、中井、志水、一ノ井の地に古代人は生活して開拓したものである。

農耕生活の発展と時代の変遷によって、何時か、北熊、大草、前熊等の集落が里となり、島となり、郷となり、生成してきたのは室町時代のことである。祖人の氏人として、北熊に近藤氏が、大草の地に中野、伊藤、戸田氏等が、亦前熊に与語、伊藤氏等氏人が多く生活して拓いたが、郷村の中心は北熊にあって、時代と共に順次発展して郷をなしていった。

(2) 寛文村々覚書（一、六六一一年）によれば、寛文村々覚書とは、今より三百二十年前に各村々庄屋より、当時の徳川尾張藩の藩令によって提出された古文書である。其の当時の各郷村の戸数人口等は、

山田之庄	北熊村	家	二十七戸	人数	百七十八人
山田之庄	大草村	家	十九戸	人数	百二十七人
山田之庄	前熊村	家	二十五戸	人数	二百十四人

山田之庄	岩作村	家	七十一戸	人数	五百十六人
------	-----	---	------	----	-------

山田之庄	長湫村（長久手村）	家	三十一戸	人数	四百十五人
------	-----------	---	------	----	-------

現在の長久手町（五ヶ村）が今より約三百二十年前の寛文年間頃には、戸数僅かに百七十三戸で、居住人口は一千四百五十人であったと、記録されている。（寛文村々覚書、長久手村誌）

(3) 上古岩作郷の発祥は、尾張氏、石作連に始まる。十三代、成務天皇の四年二月（一三五年）国造が始まり、郷邑を置く。

人皇、三十六代、孝徳天皇御世、大化二年丙午正月（六四六年）に国司、郡司、里坊長会、郷村の制を置く。

当時既に、岩作郷は発祥して石作と言う、代々の氏人、稲作農耕に励んで開拓を多くし、承和元年（八三四年）石作之連、祖人を祀る。又壁ノ本の川畔に十一面観音を勧請したのは嘉祥の古代にして、今より一千年の往古のことという。石作の氏人を多くして浅井氏、加藤氏等を言う。古くより東島、南島の地、香流の川畔に住して、又寺山島川畔にも多く生活した。

(4) 長湫郷の発祥亦古く、弥生の古代に始まると言う。山谷狭間多く、久手（くて）、沼沢を多くなしていたと言う。古代、根ノ神の地に早く拓けて、東西に発展伸長して、多くを農耕した。古くより景行社、神明社、白山社の三社を相殿として祀ったのも、山田氏、青山氏、水野、寺島、山本、川本、吉田氏等々、多くの氏人が集落をなして開拓した。長い久手地で古くより長久手（長湫）と郷名し、一千余年の往古より景行天皇社を祀る。又三社大明神とも言う。

(5) 大草、前熊郷、亦共に古く、往古北熊郷が西に伸長し、前に発展したとも云うが、古くは大草字中井の川

畔に発祥して三光院附近以東に発展したと云う。往古奈良朝時代、権道寺を創建し、永享年代（一、四三九年）室町時代前期に三光院を開基して、十一面観音を祀つる。

中野氏、戸田氏の氏人多くして、今の瀬戸市山口、菱野等の地辺に深く悠縁を知る。前熊郷亦、志水、ノ井の河畔に発祥して生成し、古くより大明神を祀つり多度社を創建する。古く天文庚子の年に前熊和合寺（前熊寺）を建立して、多くの氏人、与語、伊藤氏を称して郷を拓き日進町本郷附近に又三河の地に、遠く祖人の悠縁の何かを知るが、詳かならず。

以上縷々として五ヶ郷村の発祥を大略したるが、一つの郷村は又数多くの島と言う氏人の集落の寄合によって長い年代の中に生成し和合発展し来たものである。

左に岩作郷（村）の島組織（行政）を詳記すると、（現在島は改廃して七ヶ分会となり、岩作を構成している。）

岩作東島（岩作東及中根原、高根）

岩作東中島

岩作南島

岩作中脇島

岩作中島

岩作寺山島

岩作西島

岩作下島

岩作郷は右の八ヶ島でなりたち、島中によって育成、組織されて一郷村をなした。

棒ノ手の発祥

棒ノ手が何時の時代に発祥したかは詳らかでない。戦国時代発祥説、徳川時代発祥説等、いろいろと説は多い。棒の手は、警固祭りと、表裏一体のもので、古くより祭りと共に、神仏に供し奉納して来たものではあるが、発祥の起源は別々で、棒の手は、上古の時代、神楽の発祥と同じように、平安時代、既にあった。

「棒」は、百姓農民が手にする、農具の一つで、弥生の古代、焼畑に、穴をうがち、数條の筋を作つて、種を下したのは、一本の棒であり、その生産物を運搬したのも、一本の棒であった。その一本の棒は、唯一最古の農具で、農民の生命であり、農作物の祈願に、感謝に、又雨乞祈念にと、神仏への祈りに対し、農民はその生命である、一本の棒を、以つてした。既に「棒振り」「棒舞い」の発祥が、後世時代の中に、生き利用されて、今日、の棒ノ手と言う型をつくつてきた。

棒には、古くより、六尺棒、三尺棒、四尺棒等、其の用途によって、長短はいろいろとあるが、普通は六尺棒で棒の手も又六尺の細樫の棒を以つて使う。六尺の棒を「三尺に使い」「六尺に使い」又「一丈二尺」にも使う。処に、棒の手の妙手がある。

平安古代よりの棒が、時の真言密教の中に同化して、護法の棒となり、山岳行者の修験の金剛杖が、杖術化して、身を守る棒杖として、鎌倉時代、争乱の中には、武器として守りに使用した、「棒の手本来は神仏に奉納祭事する」もので、身を守るもので、人を攻撃する武器ではない。よつて棒の手には、勝負も、試合もない。

棒振り、棒舞い、から発想した、棒の手には、現在も棒を振つての演技が非常に多い。

又、棒がらみ、棒ちざり、棒合、棒組、棒しばり、棒だま、等々、演技の中に多くの型と用語がある。

棒の手には、棒本来の「本手」がある。今日つかう棒の手は「花棒」と云う。観衆に見せる棒で、古来伝承の神前の棒ではない。

棒の手は 古く「棒」の一字で、徳川時代中期頃より、多くの諸流派が派生するが、その時代でも「棒」「棒免許」「棒巻」等の表現で、棒の手の表現は余りないが、棒ノ手とは、一手一手の演技が型であり 型の連続した演技が棒ノ手である。型は手であり、手は型であるので、棒ノ手と云うが、本来は「棒」の一字である。棒ノ手は「棒」だけが本来のもので、太刀 長刀 槍 鎌等は、後世附随したもので、演技上 組まれたものである。又、一般観衆に見せるために 演技の上から考案されたもので、古来 棒神事奉納からは 大きく変化している。その棒も、室町末期より 天文 永禄 天正の戦国時代、武力兵力の充実に努めた。支配者は 一地方の土豪地侍に至るまで 土地の百姓農民に強く、その棒の武術化に精進し、又その農民もこれに呼応したのも、戦国争乱と云う 大きな時代の背景があった。

特に、当長久手地方に於いては、古くより棒祭り祭事があり、天正十二年四月の長久手合戦当時は、村の多くの集落に於いて棒演技が武芸化していた処、合戦と共に益々その気運は上昇して、演技を競うようにはなったが、末だ棒の流派はなく、時代は慶長から徳川時代へと入り

その頃、猿投警固祭り、尾張南合宿が結成されて 祭りは年々武装行列されて盛大となり、馬之塔祭事の中に献馬と共に、棒ノ手の妙技が 競って奉納演技され 寛文年以降 多くの棒流派が沙門、法師、武芸者等によって出され、祭りと共に益々発展し、拡大流布してゆく。

棒の手演技に関する古代文書

1 日進町 本郷城主 丹羽氏清 大永年間 祭り棒の手を 白山神社に奉納した。

2 豊田市伊保の地にて、天正十三年 祭り棒ノ手を 射穂神社に奉納した。

棒ノ手は元来 師匠よりの口伝 秘伝が相伝で、古くからの文献、文書、覚書類は殆んどなく、実技の修練 錬磨を主体に、心、礼、技の修練に努め、口伝で相伝されたものである。

徳川時代も中期以降は、打ち続く平和な御治世の中を、祭り神事は益々盛大となり、棒ノ手も祭り行事と共に多くの武芸者によって 至芸の妙手を入れて 数多くの流派を生だ。即ち

見当流	刀神流	起倒流	検藤流	鎌田流	無二流	石清流	梶原流	神刀流
真影流	東軍流	直心我流	鷹の羽検藤流	藤牧検藤流	源氏天流	等々	多くある。	

現在長久手町に於いて多く演技している流派は、左記の通りである。

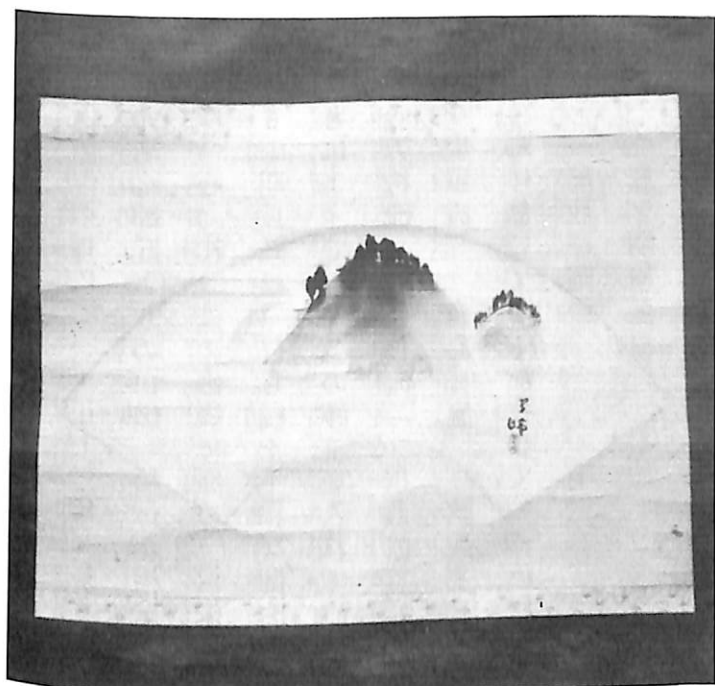
岩作東	藤牧検藤流	中根	見当流
岩作西	鷹ノ羽検藤流	石清流	
長湫	鷹ノ羽検藤流		
長湫先達	検藤流		
大草	検藤流		
前熊	検藤流		
北熊	起倒流	検藤流	

棒ノ手の発祥地は詳かでないが、往古熱田神宮を中心とした、尾張国東部地方の日進町岩崎、長久手町岩作、瀬戸市山口、今村、旧猪高村高針地方一帯の地域が発祥の地で、西三河地方の棒ノ手は、猿投祭りの隆昌と共に、徳川中期年代に伝流したものである。

小牧地方、東濃地方も又、徳川中期以降に順次伝流したものである。

「棒ノ手」は「型」である。型の演技である。

演技は二人で相対し、「礼に始まり、礼に終わる」修練の練磨は「静」と「動」に始まり、至妙の神技心芸に達する。処に棒ノ手本来の妙趣がある。徳川時代中期 正徳より享保（一七一一年―一七三五年）以降、祭りの盛大と共に、棒ノ手もまた多くの流派を出して競った。流派には流の型と 特徴があつて秘伝とした。六尺の丸棒と 三尺の木太刀を持って相対演技するのが棒ノ手の本随で 本分である。



絹本 社頭杉 西山翠嶂 着色画

翠嶂 京都の画人で東の大観 玉堂と共に
日本画の双壁と云う。堂本印象

長久手町岩作の人 浅井正臣は共にその
門に学び、後に日本芸術院会員で文化勲
章を受章した。

録三 所蔵

岩作 古城跡 について

岩作は古く 六、七世紀頃には、尾張氏の一族 石作氏が支配していた処で、八三四年には延喜式内（郷社）石作神社を創建した。中世 室町時代末には 城主今井四郎兵衛 又は今井五郎太夫が築城したという。城は岩作集落のほぼ中心部にあつて 古来発祥の元郷地であると共に 政治支配の中心地でもあつた。古城跡は、山ノ神台地が西に伸びた 尖端の平城で 東西四十四間（約九十米余）南北三十二間（約七十米余）（尾張誌 旧愛知郡誌）周囲は幅八米より十米ほどの水濠を廻し、又土居は 幅六米余 高さ一米五十余で水濠に並行して廻し構築して、南面土居は 水濠をへだてて二重に築造されて 城の大手（虎口）とした。土居上は細竹（大和竹）の密生地での人の侵入を防いでいた様子。土居の郭内を城ノ内と云う。城内は城地面積の三分の一程度の東より南から四米幅程度の水濠が 北に深く入りこんで、城地内を二分しており、東の曲輪に家士下人をおき、西を本丸としていた様子で、北の「イヌイ」の方に周囲を水濠で廻らした飛地があり、本丸地内の南東角附近には 三米ほどの小山（塚）を造り、又北よりの裏側にも小山（塚）が存在していた（物見箇所）。

城跡の南正面を字城前と云う。全部水田地帯で 四百米余の前方（小学校の東北附近）には二米位の断層があり、その南前方は一帶の深田で 一年中自然の湧水地であつた（現在の中脇 農協組合 武田金物 岡田新聞店附近一帯の地域）。又城跡の西方を字細工師と云つたので 往古の時代には工人の住家が存在したのか、その後水田と化して農耕して来たが、細工師の西方に長池を構築して、城の要害としたものである。

亦城跡の裏手（北）を字外堀と云う。現在の役場附近で、その北東一帯を古来木ノ下と云つた。東の早稲田との境界地線に 水路を構築して、香流川の用水を水濠に注ぎいれていた。附近は一帶の水田で宮前附近の水田は

深田であった。

亦城跡の東を字田中と云う（現在は字早稲田）。往古は人家が存在したが、毎年の水害により何時か前方の高地に移転して、その後水田と化して農耕して来たが、昭和の初年頃まで 田中の処々に古井戸が残存していた。亦城跡西北角附近の水濠は、明治三十年頃まで 池となり堀の面影を残して、夏の子供の水浴の場であったと云う。（小生実父 開太郎談）。その後、埋立て水田とした。

亦城主 今井四郎兵衛は苛酷な農政と きびしい年貢米の取りたて騒動による 百姓一揆により（首謀者 浅井藤三郎と云う）撲殺されて、城は灰燼となり、城跡地は分割して各々分け取りしたと云う。後年 その一揆一族中に十二年毎に火災が発生して不幸がつづいたと云う（古くよりの伝説）。

天正十二年四月 長久手合戦当時には既に廃城となり、城跡地のみを遺していた。
以上、岩作古城跡を概説して、調査研究資料の一端とする。

昭和六十年十月十日

長久手町郷土史研究会

福岡 録 三 書

附記

追而 本調査書は、本年度城ノ内発掘調査に際し書述した。

長久手町の石造物と岩作史考

人が自然の大地に生息する上古の原始時代、海浜 河川 沼沢の地よりも 照葉重畳たる深山幽谷の地に多くすんだ。鉄も 土器もない石器時代には、堅い石をもって狩猟用の武器を作り、生活の道具にも転用してきた。亦人の装身具として、丸玉 勾玉 管玉等を作り体につけた。古代人は自然の中にある大石、巨岩 老大木 滝等と共に、青山霧烟（神体山）に神仙靈気を感じて、神籠（ヒモロギ）として本能的に自然に崇拜してきた。人と石との神秘自然の関係は、土偶 埴輪 土器以前のもので、人が大地に発生して生活する時にはじまる。人は天にも地にも 神の存在を、雷や風雪地震による 天変地変の中に知り感受していた。古代の人がより高い山岳の頂上に より高く大石を積み上げて（尾張富士石上げ祭り）、天により近づけて天降ります 神の聖地として、石くら 岩くらの神事信仰は、古代原始の人の信仰が岩戸信仰であり、太陽信仰でもあり、同じ原理の古代信仰であった。

古代に発祥した 岩作は「石作」で「ヤザコ」と言う。ヤザコは古代の語原によると、石作と書いてヤザコと通称したのが、室町時代末期か 亦太閤検地頃とも云う。その時代に、石作から岩作に転化して、ヤザコと言う。石も岩も同一の意で、岩作はヤザコで「弥坐固」である。「弥」は歌舞音曲を意味し「坐」は多くの人が土の上 にスワルことを意味する。「固」は一ヶ所にかたまることを意味して、即ち弥坐固（ヤザコ）とは、多くの人が一ヶ所にあつまって 唱い 舞い まつる様を云う。古代の天降ります神の石くら神事の神迎行事を表現した語原が、ヤザコ（岩作）である。

今岩作色金山床机石は山上の自然の大石で、二個以上あるが、天正十二年四月 今より四百年前、長久手合戦

のおり、徳川家康が床机した石として有名で、国の指定史跡である。

此の石は太古の時代より自然の大石で、上古の時代より岩作の里人が天降ります神を迎えた神事の地であり延喜式内石作神社は八世紀創建の古社で、尾張氏石作連は往古の豪族で支配した。垂仁天皇の皇后日葉酢媛命より石作の姓を賜た武人という。古代の人は天地の根原は石であり、岩と信じ、人や物も発祥し生産育成する大地を、太陽と共に神として信じ崇拝した石には、神籠石 神座石等多く、又 石上神宮 岩木大社 石巻神社 石切神社 石作神社等多く、石や玉を神霊とした。

亦北熊が古代より三ヶ峯山稜に祀る水神碑も全くの自然石で、現在は愛知県青少年公園地内に弁財天として祭祀しているが、北熊郷の発祥は古く、往古は神明社附近に住した 神社の草創は古く詳かならず、祭神に 国常立命を祀り 斎宮司を置く 境内地には七、八世紀頃の古墳二基を保有している。

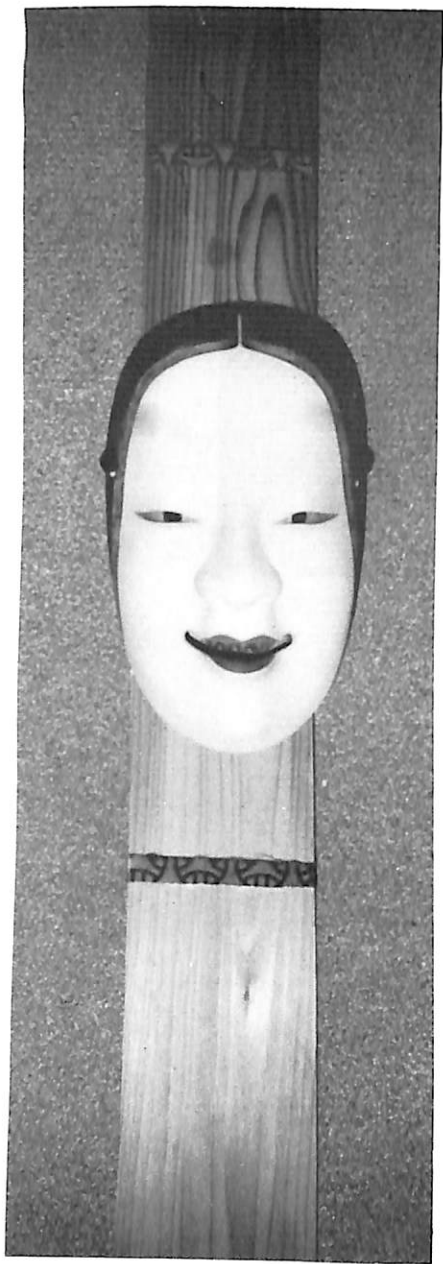
北熊が上古の時代より水神石を、尾張国 三河国の国界である 三ヶ峯の山稜に水分之神として 崇敬篤く祀た古代人が、自然石を水分の神籠石として崇拜し、稲作農業に五穀豊穰を祈願した霊石である。

何時か時代は歴史と共に変遷して、鉄 土器 古墳等の出現と、仏教の伝来は多くの文化と共に、石造文化も又百済 新羅より多く移入して発展したが、長久手町内の石造物に於いては、七、八世紀頃の北熊神明社の古墳築造以来、中世時代のもは僅かに室町時代 大草三光院の開祖 三光大徳法師の古碑 宝徳年間（一、四五〇年）建立を最古として、次は長湫の常照寺 元和年間（一、六一五年）、墓石碑（戦国時代）池田勝入外二将の五輪墓石 前熊多度社 北熊神明社二基の石鳥居は寛文年間（一、六六一年）の建立で、長久手町石造物を代表するもので、岩作安昌寺の延宝天和墓石碑、元禄年の岩作念仏講衆石仏碑等は、教門寺宝永年間 石仏碑と共に代表石仏である。大草の延宝碑、長湫の元禄碑等 江戸時代の古碑石である。

長久手合戦古戦場 岩作色金山 床机石 首塚等の建碑は、合戦以来百二十二年後の宝永三年四月（一、七〇六年）尾張藩臣福富親茂が建碑する。又池田勝入碑 紀伊守碑及び森武蔵守碑等は、明和八年十二月 尾張藩臣人見弥右エ門 赤林孫七郎の兩名により建立する。亦秋葉社信仰による各大字の常夜灯は岩作安昌寺前建立が寛政元年（一、七八九年）と古く、大草三光院前建立は寛政十二年で、前熊 北熊共に文化年間に建立し、長湫は嘉永年間に建立して居り、長久手町内に於ける秋葉火防信仰は 寛保 宝暦年間頃より信仰されたものである。亦寺院境内や墓地等に建つ六地藏尊 辻観音 庚申碑 行者碑 山ノ神 水神碑等は殆ど江戸時代中期頃以降に建立した。亦道標は大草市坂の寛政八年を最古として、天保 嘉永 文久年の建立が多く 石仏道標又は一面観音等を刻字して旅の安全を祈願した、旅人の心情を伺い知ることが出来る。

小面 作者不詳

昭和五十六年六月



鏡三 所蔵

絹本 白牡丹 着色画

長久手町北熊の人 浅井金万画
京都にて小松 均に師事する。

昭和五十三年三月作 録三 所蔵



絹本 うずらに秋草 着色画

長久手町北熊の人 浅井金万画
昭和五十五年七月

録三 所蔵



長久手の神楽

神楽とは、縄文、弥生時代の上古に発祥した神事で、神の降臨を迎え 神慮をなぐさめ奉るもので、古く出雲神楽、岩戸神楽、高千穂神楽等が有名であり、神社に神殿 拜殿 神楽殿等が設営されるようになったのは、奈良、平安時代の初期頃よりのもので、それ以前の神は 自然の山（神体山）、老大木（神木）、巨岩（神座石）（神籠石）、滝（那智の滝）等を神とし、神霊とし、神籠（ヒモロギ）として、自然に人は崇拜して来た。

（縄文・弥生の上古の時代） 人は天にまします神の降臨を祈願して、天に近い山の頂上に 人は集い、柳をかざし、唱い 舞い 哭き 呵々大笑して、神迎をしたのが神楽の起原で、石くら信仰 岩くら神仰と云う。岩作「石作」「ヤザコ」「弥坐固」の名称も此処から発祥したものである。

神楽も弥生時代 稲作の導入により、稲作信仰によって豊穰豊作を祈願し、子孫繁栄 無病息災を祈り、伊勢流神楽、出雲流神楽と発興分派して、坐女神楽 湯立神楽 採物神楽 獅子神楽となり、稚楽囃方も亦 日本古来の和楽も、唐朝時代代に仏教の伝来により唐楽、高麗楽 新羅楽と共に、寺院の法会儀式 法要等にも伎楽として 聖武天皇の天平勝宝四年（七五二年）には、東大寺大仏開眼法要に、久米舞 唐古舞 新羅舞等が稚楽と共に法要されて以来、徳川時代末期まで 千数百年余年来の神社仏閣は、神仏修合時代 変遷の渦中を、稚楽 囃方と共に発興して、神事奉納より一般民衆の娯楽へと余興され、郷土芸能に発展していったが、古くより春日大社の神楽 出雲大社神楽 賀茂大社神楽 巖島神社の神楽等是有名である。長久手町の神楽も、岩作石作神社 長湫景行天皇社 北熊神明社 前熊多度社 大草熊野社に於いて毎年の大祭には稚楽と共に坐女神楽を奉納している。

神楽舞には、一人舞 二人舞 四人舞等があって、五条の舞（岩戸の舞 日月の舞 五穀豊穡の舞 弥栄の舞 大平楽の舞）で奉納する。

絹本 青桐にせみ 今尾景年 着色画

景年 京都の画人で、明治大正時代から昭和初年にかけて、近代日本画に貢献した。名古屋市の富豪材惣家がながく保持したが、大東亜戦により名古屋焼失と共に世に出た名画

録三 所蔵



長久手の万歳

長久手町に於ける古来よりの伝統芸能には、神楽 万歳 獅子芝居 田舎歌舞伎等がある。

万歳 獅子芝居は古くより長湫、北熊等で行われ、歌舞伎芝居は岩作で多く行われた。

万歳は万歳楽と云う 尾張万歳、三河万歳、知多万歳が古くより有名で、尾張万歳は鎌倉時代治承三年、弘長二年頃に、尾州春日井郡山田庄木賀崎長母寺の無住大円国師が正月万歳として、素袍烏帽子姿で祝詞を唱え、祝うことを愛知郡印内村の民に教えたことに始まると云う。上古奈良 平安時代より踏歌と言うものがあつた、これが変貌して 無住の作詞とも云う。新猿楽記に「千秋万歳之酒禱」とあり、亦定家の「明月記 建仁四年」 「花園院記 文保三年」にもある。知多万歳は、長母寺の寺領地が 味鏡 西大高 数 横須賀村にあつたので、初代尾張敬公時代（慶長年）は味鏡に栄えたが、徳川宗春の享保年間に大高、横須賀に伝承して 知多万歳が発祥したとも云う。三河万歳は、古く三河守だった大江定基（のちの寂昭法師で平安時代の人）から伝承した三河院内小坂井村に発祥して栄えた。亦万歳の流派は「大和 伊予 越前 美濃」にも伝わり、「神力 地割 六条 法花経 御殿万歳 御城万歳」等がある。

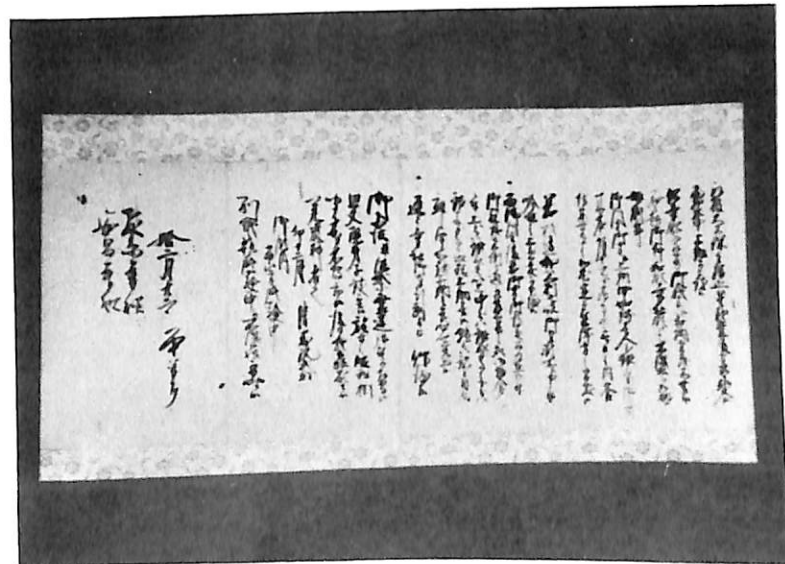
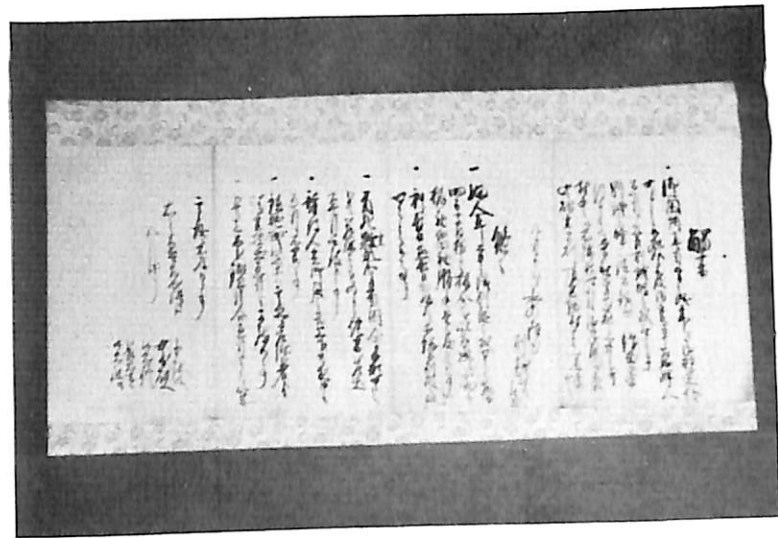
万歳楽は正月や祝儀事の祝い歌詞が最初で、のちに舞事を加えたものという。又他に「尾張今様くどき」「九州博多くどき」等、別に派生した庶民芸能がある。長久手町内に興行された万歳は、徳川宗春の享保年間頃より、名古屋及び春日井等の地で栄え盛大となり、近隣接地の長久手には猪子石方面より遂次伝承したもので、長湫においては文久年頃より明治、大正時代、昭和初年頃までが最も最大で、昭和十六、七年頃を最後に、戦争と時代の変様 発展推移の中に、自然に消滅し去つた。

長久手町北熊宗延寺には、天保年間の画家 張月樵の万歳墨画（太夫 才歳）一軸を保有する。

紙本 触書 双幅掛 軸装

天保時代水野代官平善十郎が岩作安昌寺、教円寺及北熊、前熊、大草、岩作、長久手、岩崎村の各村々の庄屋に出した触書を表装した双幅である。

録三 所蔵



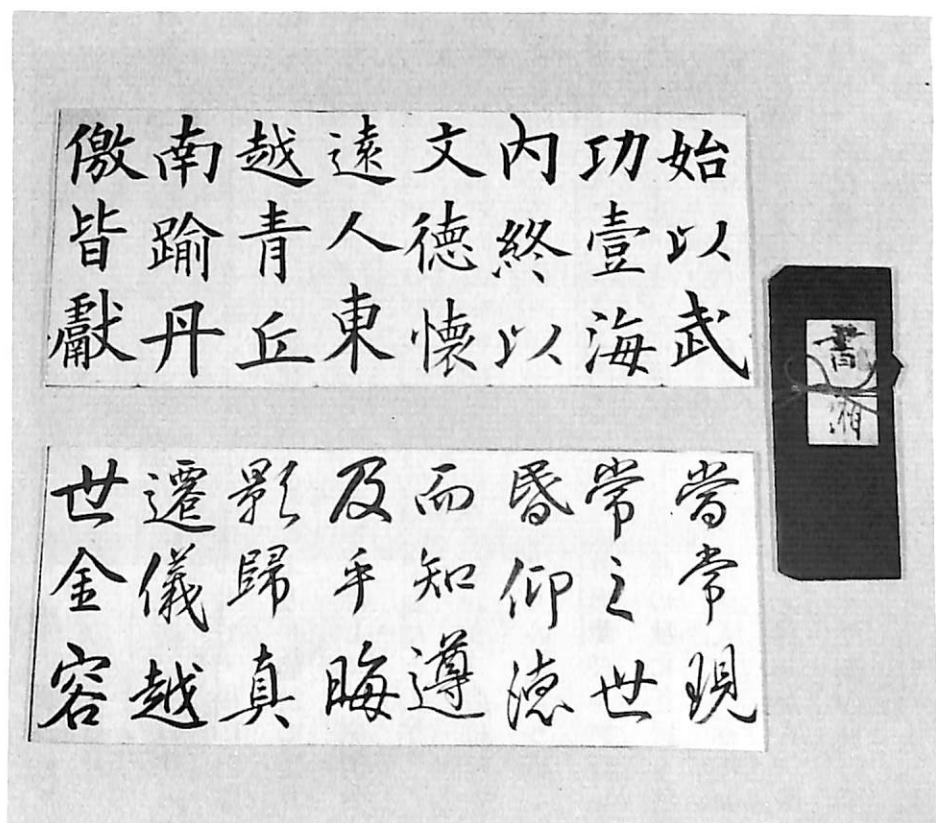
長久手の歌舞伎芝居

歌舞伎芝居は演劇として、室町時代より能楽から派生したと云われるが、永禄年間に名古屋の人 名古屋三左エ門 幼名を山三郎と云い、尾張古渡村の人で 後に出雲ノ於国を知り、京都北野に於いて 説経に合せて小舞（説経操舞）を覚えたのが初めで、それより 演題に振り付演劇化して発展し興行したものと云う。名古屋に於いては、慶長十四年頃 名古屋城の築城に際して、諸国の大名衆による城普請に賑い、狂言芝居を興行したのが最初で、当時は熱田の町の「出はなれ」でしたと云う。

亦江戸芝居は堺町の中村勘三郎を元祖と云う。慶長年中の江戸城御作事の中に多く興行されて「江府に於いて芝居狂言を永代御免の儀を願奉る」とある。其の頃より広く庶民の間に発展し興行したもので、寛永年の始め頃、名古屋巾下の人で 次右エ門という者、女歌舞伎を興行して大当りを受けて益々盛大となり、各地の祭り開帳等に興行が多くなり、遂いには寛永十年 酉の秋に芝居を禁制したとも云うが、二代徳川光友の頃 寛文年間（一、六六一年） 名古屋の人口は五万五千八百余人で、熱田の人口は八千七百余人程であったが、芝居演劇は既に橘町若宮社境内等で多く興行されていた。亦元禄年から享保年時代の徳川宗春の政治当時は、政策を以って名古屋は繁昌し、旅役者 茶屋女等の出入りも多く演劇の興行多く益々盛大となり、殷賑を極めたので、その近郷の町村にも強く波及して、長久手町内に於いても其の頃より庶民の娯楽民衆劇として、神社寺院の開帳祭り等に際し多く興行された。特に岩作地区に於いて田舎歌舞伎として上演され、又明治、大正時代は女義太夫語りが流行した。上演された芝居の演目は、忠臣蔵三段目、十段目、勘平腹切、二度目ノ清書、大功記本能寺、尼ヶ崎及段、朝顔日記、菅原手習鑑、安達原、熊谷陣屋、先代萩、紙屋治兵衛、お染久松、義経千本桜、佐倉宗吾、等々が多

く上演された。

明治より大正、昭和十年頃まで上演した 岩作の役者は、浅井常三郎 浅井杵太郎 浅井留三郎 川本治助
武田高治 林保次郎 林義信 浅井兼広 等多くの人がいた。



紙本 折本墨書

長久手町岩作字中根 加藤豊翠作品

名古屋市佐分利移山に師事

昭和五年頃の書跡 五冊

上 九成宮醴泉銘

下 千字文

録三 所蔵

長久手の獅子舞芝居

獅子舞は古来よりの神楽（岩戸神楽 出雲神楽 高千穂神楽）から発祥したもので、神社祭礼に奉納し、全国各地に郷土芸能として伝承している。「獅子舞由来記」によれば、鎌倉時代中期の寛元元年（一、二四三年）頃に発祥したと云うが、鎌倉仏教禅宗の渡来による。唐舞よりの伝導教化により 神前の唐獅子と共に発祥したものである。往古より子孫繁栄 家内安全 五穀豊穰を祈願した 奉納神事で、江戸時代享保年以降頃から一般民衆の慰労余興行事に移行して、明治 大正時代より昭和十年頃まで特に盛大であったが、現在も各地で奉納されている。

当長久手町に於ける獅子舞は、大字長湫地区に於いて特に盛大で、獅子舞歌舞伎を多く興行して来た。獅子芝居とも云う。演技は獅子神楽舞囃子の中に 義太夫浄瑠璃を入れて、義太夫語りと 三味線の糸にのって、ただけしい獅子面（頭）をかぶった主役の獅子が演技して舞いおどり、優艶な女形を演じて たくみに観衆の涙を誘い、拍手喝采を得たものである。そのような獅子舞歌舞伎が多く演じた芸題は、「阿波の鳴門」「朝顔日記」「源平盛衰記」「梅川忠兵衛」「太功記」等が多く上演された。亦近隣で古来より有名な獅子舞には「豊明市の梯子獅子」「名古屋地区如意の嫁獅子」等は指定の文化財である。往古は各村共に若イ衆制度が強固で、村内の祭り行事の一切を司り、祭りの主体であったので、男十四、五才頃より農作業の外に、獅子舞、祭り囃子、棒ノ手等の郷土芸能演技の修得練習にはげんで伝承したもので、至芸に達するまでには十余年以上の研鑽修練を要したと言う。

時代は大きく流れて農村の宅地化、都市化への移行は如何ともしがたく、長湫地区に於ける獅子芝居もかつて

の名役者 名子役の名声を僅かにのこして 戦争を契機に、時代の中を消滅し去って行った。

絹本 牡丹 着色画

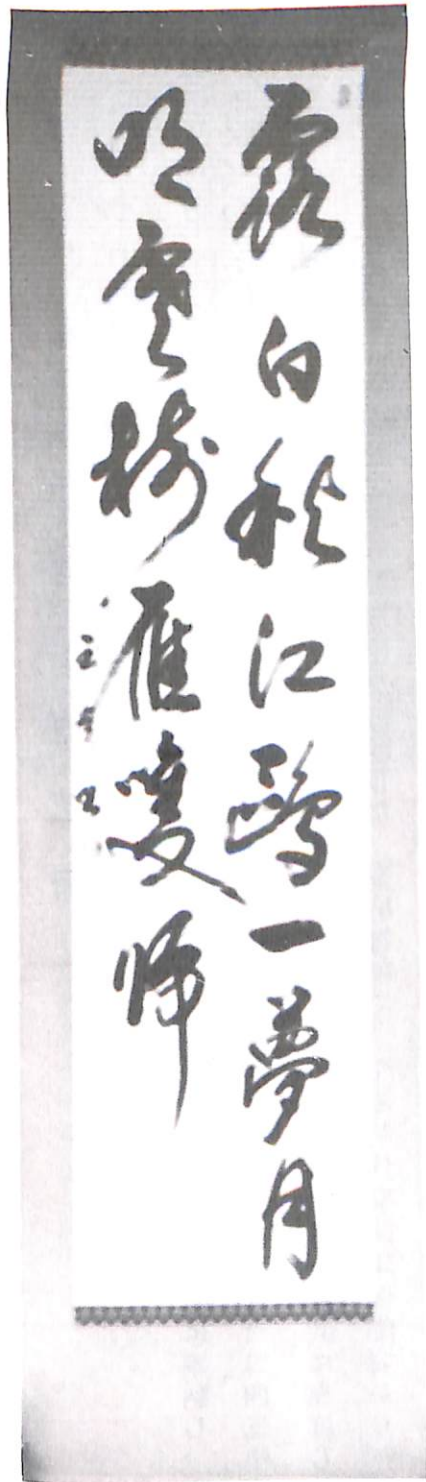
京都の画人 森 五風画 昭和二十年頃より



録三 所蔵

紙本 露日秋江 墨書

長久手町大草の人 戸田久雄筆



録三 所蔵

長久手合戦秘話 其ノ一

岩作首塚と首切塚由来伝説記抄

天正十二年旧四月九日 長久手合戦は早朝より、白山林ノ戦 松ヶ根ノ戦 午前十時頃よりの仏ヶ根ノ戦と、日に三度の戦と云う。当日は連日の小雨模様も上り 快晴で、長久手の昼合戦と史書はかく。二千五百人とも、三千五百人ともいう数多くの戦死傷者を出して、家康方の勝利に終り、戦後軍を岩作立花の山野に集結して、寅山尾山ヶ沢（現在の田伝池附近）の地に於て、勝入以下の首実検をし、戦場処理をしたが、秀吉方の急追が激しく 早々に小幡城に引き揚げた。

合戦当時の岩作村は近隣にない大村で、戸数六十戸余 人口は四百人前後で、戦いと同時に、村人の殆は三ヶ峯の山地に、五日より七日間ぐらい難をさけて居り、帰家後 累々と四散する多くの戦死者、遺品 遺物等を、安昌寺 教円寺（当時は宮ヶ洞池附近）前（現在の字元門）の原野の各所に於て収容し茶毘に付して、其の地で そのまま埋葬したので、後年草塚として多く田中に遺る。亦松ヶ根ノ戦い戦死者は、中脇 中縄手 石田 長茂 八瀬ノ木等に草塚として遺る（耳塚については別に書述する）。史跡 首塚（国指定）は、岩作字元門四十二番地にある。高さ二米 面積四・五アールで、長久手合戦のとき、時の安昌寺雲山和尚が 村人と共に敵、味方の区別なく、戦死者の首を集めて埋葬し 供養した田中の草塚で、合戦後百二十二年 宝永三年四月（一七〇六年）名古屋藩士 福富親茂が塚上に首塚の小碑を建立したが、後明治四十三年四月 岩作東の人 浅井広助、長久手村初代村長 吉田知行、安昌寺住持 柘植吟海、長久手小学校初代校長 浅井作三郎、長湫の人 青山亮、岩作区長 加藤栄三郎、浅井松兵衛、浅井延太郎等 多くの有志者及び岩作の多くの人の勤労奉仕作業によって、

字元門地内に散在する多くの草塚より 遺骨 遺品等を多く掘取して、首塚の一ヶ所に収集し、頼戸大がめ数個に納骨埋葬し、回向して、現在の姿に整備し 一大建碑して曰く「其由欲用不朽遺蹟又慰遊魂也」と、書は長湫の人 青山亮氏の筆跡である。

以上で首塚を詳記したが、首塚より南方百五十米ぐらいの地点に、通称 首切塚がある。大字岩作字早稲田、土地の人は山ノ神という。天正十二年旧四月九日 長久手合戦により多くの戦死者の遺体を此の地に集めて、首を切り、知名人 勇者の首は各々持参して処理したが、其の他判明しない者は そのままながくさらして 放置したと云うが、後に埋葬して塚となる。昭和初年頃まで竹藪 雑木の荒地に 自然石を寄せた塚らしいものがあり、附近一帯は竹藪が多く、竹林の中に松、イチヨウの大木があつて陰惨無気味な処であつたが、現在は明るい場所となり 附近に多くの住家も建ち、塚は何時か自然になくなり、その角地に モチ 棕の木があつて山ノ神の小碑がたつ。人呼んで首切塚と云う。此の山ノ神（早稲田）附近までが、往古の安昌寺の寺領地であつたといふ。長久手合戦後の天正十三年九月 時の岩崎城主 丹羽氏次より安昌寺雲山和尚に対し、戦場処理と多数の戦死者菩提の為に知行地十貫文が下り寺領を得て、ながく四百余年の今日まで 追善し弔て冥す。

郷関家去幾歳月

雄途何処此地斃

月落勇魂哭露草

誰知椿花一輪春

首切塚題

録 三 詩

昭和六十一年九月一日

長久手町郷土史研究会

福 岡 録 三 書

長久手合戦秘話 其ノ二

長久手御とめ山風聞伝説記

長久手合戦は、天正十二年旧四月九日 今より四百二年前に長久手町の山野で戦われた合戦で 多くの合戦記伝説、伝記等を今にのこしている。四月九日早朝 仏ヶ根決戦に際して 徳川家康 織田信雄の両軍は、岩作色金山より長湫富士ヶ根に移り、池田勝入 森武蔵守との決戦にのぞんだと戦記はしるすが、実際の家康本陣の跡地は何処か 謎であり、不明のまま今日に至る。富士ヶ根の山頂は 家康金扇の馬標を立てて 杉ヶ根 松ヶ根による 堀久太郎秀政勢に対応して後備を置いた場所で、家康自身の実際の本陣跡地は 富士ヶ根東麓二百米余の山地で、現在の長湫字香桶九十六 九十七 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五番地及字鴉ヶ廻間三十五 三十六 三十九 四十 四十一番地及字東浦五十七 五十八番地附近一帯の広い地域がその跡地と云う。合戦以来の史跡地は、後年 江戸時代、名古屋徳川藩設置と共に藩の禁令により「御とめ山」として、水野代官所 山奉行による山番を置き、樹木の伐採 世人の出入を厳禁して保存したと云う。永年の保存により大樹老松が多く 繁茂ウッソウとして、昼なお暗く 村人は「うばがふところ」と呼称した。

慶長十五年 名古屋城築城と共に、初代藩主 徳川義直 治政以来、長久手村の地は、神君家康公が 長久手合戦戦勝の跡地として、藩制治下に特別な配慮をして 城内に多くの松苗木を植えると同時に、長久手古戦場地にも 多くの松を植えて管理し、後に三百余年 勝入の松 水野惣兵衛物見ノ松 片桐半右エ門よろい掛松 渡辺半蔵槍たて松 雲霞ノ松等々多くの銘松に成長して、その名を後世に残す。亦長久手村には二百五十余年の長い間、村内に一人の地頭も置かず、采地もなく、直接の蔵入地として支配した。（岩作村の地頭十名 前熊村四

名 北熊村九名 大草村八名 長久手村なし) (尾張国では、長久手村と 大森村だけで、大森村は二代藩主光友公御生母の出身地として) 特別地とした。亦長久手村 景行天皇社に対しても信仰篤く、代々の藩主代参により その都度 宝剣 引幕 提灯 鳥目(錢)等多くの寄贈があつて「村、社、古戦場」は共に藩政の中で特別に配慮されたものである。

亦史跡地「御とめ山本陣跡地」は徳川時代 度々の検地にも、除地として取り扱つたと古老は伝説に云うが、その真偽の程は不明で、亦その確証もないが、ただ一つ、長久手町役場が保存する 長久手合戦古図(掛軸)享保七年(一七二二年)名古屋藩士 横井也有(永言齋)が写した墨画(仏ヶ根決戦に際して)富士ヶ根本陣図に「此間三町余(布陣)徳川家康 内藤四郎左エ門 丹羽六太夫 本多佐渡守 鶴飼兵庫 かが衆」と記載はあるが、地名の記入はない。勿論 長久手合戦当時には、現在のような地名はなく、簡単な山容を墨画してある画中より推測しても「御とめ山」附近が本陣地であつたことの伝説が思考できる。以上長久手町役場が保有する本図の原画図は、九州熊本藩主 細川家伝来の重宝で、和紙三十六枚を一枚に継合せて 墨画したもので、非常に大きく 掛軸に表具する 貴重品で、今より二百六十四年前 名古屋藩の重臣 横井也有(有名な俳人)が墨画して写したもので、長久手合戦史料として最高にして 町の文化財である。

今 此処一、二年の中に、長久手合戦の主要地 鴉ヶ廻間の山峽風景が永久に消滅しようとする時に当り、合戦秘話の伝説文を草して 遺す。

昭和六十一年八月二十八日

長久手町郷土史研究会

福岡 鯨 三 書

長久手合戦秘話 其ノ三

森武蔵守長可の戦死と遺言状記

森武蔵守長可は、天正十二年四月九日 長久手合戦に於て、義父池田勝入信輝 池田紀伊守之助と共に、長湫字武蔵塚の地に於て戦死した。合戦当時は、岐阜県兼山城主で 金山と云う。鎌倉時代建久年間頃は、土岐氏遠山氏が東濃地方を広く支配したのに始まる。其の後、天文初年には、齊藤道三この地を平定して、猶子齊藤正義古城山(二七三米)の頂上に兼山城を築造し、近隣を平定して支配したと云う。永禄八年(一五六五年) 織田信長 齊藤氏を東濃から駆逐して追い 家臣森三左エ門尉可成 初めて入城する。森氏の初代である。二代森武蔵守長可は武勇の士であり鬼武蔵という。十六才で信長に任えて、長島の一向一揆攻めが初陣で、長篠 高遠 天目山等の戦に転戦して 長久手に戦い不幸戦死する。三代森仙千代忠政は長可の末弟である。森蘭丸 坊丸 力丸の三氏は、共に長可の弟で 兼山城内で出生し、天正十年京都本能寺で、信長と共に戦死する。実父森可成は 元龜二年信長の延暦寺攻により江州坂本で討死する。亦兄の可隆は手筒山で討死する。いかに戦国の世のならいとはいえ余りにも悲運で 父、兄の戦死、弟三人の戦死、亦自分が長久手で討死とは、不幸な家柄である。

森武蔵守長可 小牧羽黒八幡林の戦に於て、徳川方 酒井忠次 松平家信 奥平信昌と戦い、遂に敗戦し、家臣 鍋田内蔵助 野呂助左エ門等討死し敗走する。その敗戦の恥辱をそそがんとして 岳父 池田勝入の岡崎攻めに討死を決して参加する。その意は悲愴で いたましい。天正十二年春三月二十六日の朝まだき 小牧の陣を出発するに当り、左記 六ヶ条の遺言状を認めて 秀吉の側近 尾藤甚右エ門知定にその書状を托して、我れもし討死の場合は母の生活の知遇を 戦死の代償として考慮してほしいと書きとどめて遺す。

- 一、さほひめのつば 秀吉様へ進上 宇治にあり
- 一、台天目 秀吉様へ進上 宇陀にあり
- 一、もしうちづに候はゞ 此分に候 母に候人は まかないぶん秀吉様へ 御もらい 京に御いり候へく候
- 仙は今のごとく 御そばに奉公之事
- 一、我々あとめ いやにて候 此城はかなめにて候間 たしかなる者を 秀吉様よりおかせられ候 へと御申之事
- 一、女ともはいそぎ 大垣へ御越候べく候
- 一、あしき茶道具 みな 仙にとらせ候……

若き 戦国の武将 森武蔵守長可(二十七才)は、切々と悲情と覚悟を秀吉にうったえて 長久手町大字長湫字城屋敷 前山の激戦に於て 雄途むなしく 徳川軍の柏原与兵衛の銃砲にうたれ、本多八蔵がその首級を挙げ 可児勝六がとり返し帰つたが 城は木曾義昌の包囲するところとなり、近より難く 断念して遂に 岐阜県可児市 惟子石原の真禅寺境内に葬り首塚と云う。宝篋印塔を建て 下臣達の霊を弔った五輪塔も多く建てて祀る。

岳父池田勝入 長子之助共に、長湫字仏ヶ根に戦死して 遂に池田軍の敗戦となり

死屍 蠅蝮四散し 懐古して 白骨風寒雲影暗 青松歳尽暮烟岳 到来今日何看処

空有荒墳鳥雀悲 明和八年十二月 赤林信之 詩

後に長可 岐阜県兼山町森公の廟所 可成寺に 可成 蘭丸 坊丸 力丸の父子共に五人葬り 祀る。

尾張名古屋藩臣 松平君山 冥して曰く 一代雄師、世以鬼名、長湫之厄、命因義軽の一軸をのこす。

兼山町文化財指定 昭和三十八年十一月

昭和六十一年九月五日

長久手町郷土史研究会

福岡 鏡三 書

長久手合戦秘話 其ノ四

長久手の戦と徳川家康手紙文抄記

天正十二年四月 小牧・長久手の戦に際し、徳川家康は三月七日浜松城を出発し、岡崎より清洲に 三月十三日到着した。羽柴秀吉は、三月二十一日大阪城を出発したがそれよりさきの三月十三日 時の大垣城主 池田信輝は長子之助と共に、犬山城を奪取して守る。秀吉は三月二十七日犬山城に入り本陣とし、徳川家康は清洲城より小牧山に移り本陣とし、宇多津 小山 北外山 蟹清水等に城堡を築き、亦秀吉方も 小松寺 久保一色 田中 岩崎 青塚等に、高さ四米以上 厚さ三米の堅固な土塁を構築して、両軍共に相対峙して持久戦になり、後に秀吉は楽田に本陣を移すが、戦いらしい戦もなく、羽黒八幡林の戦いだけで、森武蔵守長可が敗走する。

十万余の大軍をようする秀吉軍は、近江 大阪と補給線がなく 決戦を急ぎ、岡崎追討を画策(中入り作戦)して、遂に長久手の戦となり、池田勝入 之助 森長可の戦死敗戦となり、徳川家康の勝利となるが、小牧の戦いは持久戦の中での外交戦で、秀吉 家康双方共に、外交的戦略をたくみに画策しており、家康は四国の 長宗我部元親 越前の佐々成政 紀州の根来 雑賀 下野の皆川広照 信楽の多羅尾光俊 鈴木重次等、多くの領主土豪に密使をおくり書簡を出して包囲体制を策しており、亦秀吉は、淡路の千石秀久 備前の宇喜多秀家 北陸の前田利家 黒田孝高 越後の上杉景勝 上野の佐竹義重 信州の木曾義昌等、多く諸国の守領主に書を送り、家康包囲体制をしき、伊勢、熊野の水軍 九鬼嘉隆をして、知多 岡崎方面に上陸作戦を画策していたと云う。外交戦略では秀吉に一日の長があり、且つ優勢な兵力の一部をさいて、四月九日長久手合戦後も、美濃の加賀ノ井城 竹鼻城 脇田城等をつぎつぎと攻略する。その様な 戦略推移の中での 長久手の戦いは、各個撃破の作

戦で、仏ヶ根決戦となり、徳川家康 織田信雄軍に対し、池田信輝 森長可軍の決戦となり、家康軍の先陣は井伊万千代 奥平信昌で、仏ヶ根田ノ尻方面の鉄砲の打ちかけにより戦端を開き、その日の一番槍は平松金次郎という。前山の戦場に於いて森長可（二十七才）が戦死して左翼軍が崩れ、池田信輝（四十九才） 池田之助（二十六才）乱戦の中で共に討死して池田 森軍の敗戦となる。時に十二時を過ぎており、家康四十三才で後厄「乾坤一擲」の戦いであった。

家康は勝利を喜び、その日の中に書状を岡崎に送った（徳川義親氏所蔵文書）。「今日九日午之刻 於岩崎之口及合戦 池田紀伊守 森武蔵 堀久太郎 長谷川竹 其外大将分悉人数一万余討捕候 即可遂上洛候間 本望可被察候 恐々謹言」 卯月九日 申刻 家康 花押 平岩七之助殿 鳥居彦エ門殿 亦織田信雄も四月十日に書状を吉村氏吉に送る（吉村文書という）。「書状委細被見候 如申越候 大将分池田父子三人 勝蔵 久太郎 竹 三好孫七郎 其外面々共不知其数候 筑前楽田二追籠候 今明之間討果 頓而其左右可申聞候 謹言」 四月十日 信雄 黒印 吉村又吉郎殿

四月九日 長久手の戦後も、小牧の役は両軍共に対陣となるが、秀吉軍は別動隊 羽柴秀長により北伊勢 伊賀方面で、上野城 関城 亀山城等を攻略して、遂に十一月十一日 秀吉 信雄は、矢田川原において和議し、小牧・長久手の戦は終る。

昭和六十一年九月八日

長久手町郷土史研究会

福岡 録 三 書

長久手合戦秘話 其ノ五

（一）梶田甚五郎と梶田神社記

天正十二年四月九日 長久手合戦 仏ヶ根決戦に際しては、多くの戦死傷者をだした。徳川軍の勇士 伴若狭 守盛兼 松平長綱 大河内政局 佐脇安連 松下勝綱 間宮信高 山田重則 山田正直 森久右エ門 服部源兵衛 阿部平六 大橋新三郎 大久保新七郎 梶田彦十郎等名ある勇将名士が戦死し、亦池田軍は、秋田喜兵衛 竹村善正 岩越治左エ門 笹尾助右エ門 梶浦兵七郎 片桐与七郎 古内甚内等多くの勇者が討死し、池田 森軍の総敗軍と共に 四散しその多くは東に現在の県農業試験場方行に猿投山を目ざして北に、菱野 山口 瀬戸方面に敗走した。その中に若年の武者 梶田甚五郎は池田勝入の輩下で 躰に数個所の重傷を負い、ようやくに菱野の地にたどりつき 農民にたすけをこうたが 無暴にも数人の百姓により殺害されたという。無念の怨霊は、此の地にたたり毎年のように稲作は不作で、はやり病が村にでて事故が多く 遂に慰霊 平癒を願って武者人形を作り警固祭り駄司飾りに奉載して 山口合宿 猿投神社の祭礼に奉納し、亦郷社祭りを挙行した。後に 昭和三十三年六月 瀬戸市新郷町の丘上に 梶田神社を創建し、梶田甚五郎を祀り 武者人形は郷倉に保存する。

（二）五月のぼりを立てない風習記

天正十二年四月 長久手合戦数日後、瀬戸村の五軒島（瀬戸市羽根田町及葉師町附近）（長久手合戦当時 瀬戸村四十戸 赤津村百六十戸ぐらい）の瀬戸川ぞいの農家に、重傷を負った一人の落武者が 川を渡り民家に何かたべる物を求めたという。当時その附近の農家では五月の節句の餅搗の準備をしており、村人は無慈悲に数人

で追ったので、落武者は必死に川を渡り逃げたが、遂に倒れ 撲殺された。以来落武者の怨霊か 五軒島の集落に男の子が生まれても よく育たず恐れて 以来四百年に亘り、此の地に「五月節句ののぼり」を立てない風習という。亦印所の墓地に於て毎年五月 慰霊祭を行う。落武者の墓は薬師町の宅地内にあって菩提を弔い祀る。

㊦ 農業試験場作業事故風説記

県農業総合試験場は昭和四十一年 長久手町三ヶ峯の山地に開設されたが、天正十二年四月 長久手合戦仏ヶ根の決戦に際し、池田勝入 森長可両軍の総敗軍となり敗走したが、その多くの武者は 傷つき倒れて 東に試験場地内及附近を通り、三ヶ峯山地を東に 北に彷徨して 倒れ いくの地名をしらずして山地で多く戦死したという。亦試験場地内にもその様な事があつたらしく、試験場開設以来 農作業中に農機械事故、農薬事故等 いろいろの作業事故が発生しており、疑心 安危と 人はいう。

四 大草長久手合戦落武者帰農伝説

長久手町発祥の歴史は古く、二千年の古代 弥生 古墳時代にさかのぼるが、その当時の人は、極く僅かな人だけで生活した。

平安時代 鎌倉時代と中世に人は増加して田畑の開発も進み、集落が出来て 郷となり、村に発展していく。戦国時代の天正十二年四月 長久手合戦より 町の歴史は正確となり、他の処より多くの人が移住して、町民の祖となる。即ち、岩作の浅井氏 加藤氏は古代よりの人、熊張大草の伊藤氏 鈴木氏 中野氏の先祖は、長久手合戦 池田勝入輩下の落武者で大草の地に帰農し、勝入外 多くの武将の菩提を陰より弔ったという。昭和三十

四年九月 伊勢湾台風により、大草 永見寺本堂の屋根が大きく破損して修復の際、その屋根裏より一枚の木片が出た。鈴木武兵衛通宜 中野伝之丞行光 伊藤三右エ門友信と墨書してあり、井藤氏も 伊藤で、松原氏は松原小五郎の一族で、元和年間頃に初まる。外に山田氏 戸田氏等は、寛永 正和年頃に移住し、帰農したものという 伝説。

㊧ 長久手合戦怨念説伝話

昭和五十六年頃 長久手合戦史跡 首塚の首塚まつりを挙行するに当り、之が準備の為、岩作東の喫茶店エリートで要談中、隣席で話を聞いていた。四十五六才の婦人が、「私は大字長湫富士浦のものだが、此処毎年のように 家族に病気や事故が多く、不幸が続く、その原因がわからず 不審に思いなやんだ上、御岳山に伺いを立て 又八卦にみてもらったら、昔 長久手合戦の折 貴方の屋敷地内で、二、三人が非業の死をとげていると出るので、その菩提を祀り お抜いをする事だ」といわれて困っているといった本当の話。

㊨ 長久手合戦首塚夢物語抄

昭和五十年頃 長久手町大字岩作東島の一六屋呉服店に、店員として名古屋から若い男の人が勤めて居り、首塚のすぐ隣地地のプレハブ住宅に宿泊していたが、寝ると毎晩のように「血にぬれた よろい武者」の夢を見るので気味が悪く、退職して名古屋に帰ったと云う。

(七) 長久手合戦史跡首塚霊魂記抄

昭和五十八年四月 恒例の首塚まつりを挙行するに当り、以前より首塚の塚の上に建つ首塚の石碑が、右にかたむいて居るので、真直に建て直しを 安昌寺和尚に相談したら、「首塚は霊魂が多いので そのままで余り樹木等の整枝にも 手を入れないほうがよい」といわれた。亦四月九日 祭り当日、朝八時頃 祭壇を飾る前に 写真を撮って現像して見たら、塚上石組中の間に「ボォッ」と白い人影様のものが二、三ヶ所写っているのに、一同驚き寺に納めた。

(八) 長久手古戦場二本松伐採顛末記

長久手町古戦場を代表する 勝入の松、二本松の銘松が、戦後の昭和二十一年頃まで「合戦を見た松」として四囲を圧し 樹令を誇り古戦場らしい風致と 環境をつくっていたが、勝入の松は自然に枯死したので、後日切り倒した。二本松（オンカノ松）は、長久手町大字長湫字武蔵塚四番地の二 古戦場紀伊守の前に、日進町方行通路脇西側に並行して 二本が立っていた老松で、直立し樹高二十五米位、天に押し四囲に枝を広げ、樹廻り五、六米位の巨松で、樹令四百年余という。大東亜敗戦後の社会不安と無秩序の時代、長湫区長が 区議会と協議の上、年度予算捻出の為 払い下げて切り倒したもので、伐倒当日 昭和二十二年十二月十日 岩作御岳山大先達 加藤銀太郎師による 切倒抜い神事 後岩作の人 浅井兼松外数名により 不幸伐採したもので、世人松の霊を憂い、後日 二本松跡碑を建立する。

(九) 長久手城跡地男子夭折風聞記

長久手城跡は、長久手町大字長湫字城屋敷二十三番地にある。往古の総面積は八八九坪で、尾張徇行記には二反七畝歩とある。

城跡中央部より西寄りに中堀りがあり、東城跡約四百余坪は畑で耕作し、西城跡約三百余坪は殆ど竹藪で竹林の中に堀りが残存していた。北寄りの土居は高く堀りより六米から十米と急坂で 竹林の密生で、旧跡を留めて居り、城の創建は、室町時代の永享年間度々廃城となり、戦国時代の天正十二年長久手合戦頃は、加藤太郎右エ門忠景が居城し岩崎城落城に際し戦死した。その後、名古屋藩制時代、加藤氏の一族 加藤太郎右エ門忠景外二名により「文化六年十一月 加藤太郎右エ門忠景宅趾」の石碑を城跡に建立するが、城跡の一部に何人か居宅を建てて住居し、男子の出生をみても 途中で夭折して育たず、遂に断念して他に転居して農耕地となり、竹藪のひろがるままに放地していたが、昭和五十年以来の長湫東部区画整理事業により、城跡は整理され、その跡地に長久手城跡碑 加藤太郎右エ門忠景碑 観音堂及び延命地藏菩薩像等建立し、史跡城趾公園としてある。

(十) 長久手古戦場雄魂怨霊夜咄伝説

徳川時代の 安永年間頃、岩作安昌寺の大林和尚が 小僧を伴ない 日進町岩崎の妙仙寺に、四月の朝 所費で出かけた。出発から雨模様で、天候を気ずかいつつ出発した。用談は思いの外 長くかかり夕闇の深い頃寺を辞し 小雨の中を小僧の先導で 岩藤新田をすぎた頃より雨足も強くなり 長縄手を通り北新田にかかった頃は風も出て、先に小僧の持つ 提灯の灯が風雨のせいから 闇の中で 息をひくように細くなり、又ボォッと足元を照した。二人の足は自然に早くなり 葺池の畔りから 深廻間にかかる頃、何か背後でザワザワとした

様な人の物音が 次第に近ずき、又遠のいていく。耳のせいばかりではなく、武蔵塚から 仏ヶ根の古戦場地内にかかる頃は、人馬のいななき 勝どきの聲 鎧のすれ合う音までが耳朶をうち 夢かうつつか 無我無中。和尚の口から 摩訶般若波羅密多心經と 読経の聲も高く 唱和して古戦場地内を走りぬけ 無事に寺に帰り着いたという。

天正十二年春四月 長久手合戦仏ヶ根の決戦は、池田勝入 紀伊守之助 森武蔵守等外多くの武將勇士が、岡崎追討を目前にして無念の最後をとげた処で、戦後二十年余りはそのままで 田畑は荒廃し 村人もよりつかなくなったと云う。明和八年十二月 名古屋藩臣 赤林孫七郎信之が詩題している。

詩題 長久手古戦場

白骨風寒雲影暗 青松歳尽暮烟岳

山 長湫東部土地開発事業と 地蔵尊像建立風聞記

長久手町 長湫東部土地整地事業組合 代表者川本清十郎の事業組合が 昭和四十九年一月十六日 事業認可されて、長湫東部地域の開発整地事業にかかってより十二年九月 昭和六十一年九月の現在に至るまでに、その殆どの全地域を開発し整地した。今はその細部を僅かに残すのみである。

懐に 長久手町発祥二千年の歴史の課程において、我等の先人数十代が 営々と 培かい 耕した田畑も、山野の自然風物のごとくが、十二年余の開発事業の中で消滅し去ったが、その開発地域内には、長久手合戦古戦場の主要地部分が多く存在して、即ち、長久手城跡地は 原形を整地して その城地を 城跡公園とした。亦

血の池は、当初池の東部を一部残すはずの計画を途中に於て変更し、池の全部を埋立てて 遂に消滅したが、その後 血ノ池公園の名称だけのこした。亦前山御馬立所は、長久手町大字長湫字城屋敷九十番地ノ二 山林として、約一町二反歩ほどの小高い山丘で 長久手合戦の折 徳川家康が前山激戦に際し 前線に馬を立て陣頭指揮した山であったが、開発の中で消滅したが、その跡地は 交通公園となり 宅地とした。亦武蔵塚附近は、森長可討死の処で、最大の激戦地で 多くの戦死者が出た場所と云うが、自然の山丘に 松林や 竹藪が多くあった。昭和五十四、五年頃 此の地域を整地作業中「何んとも よくわからない 屍臭 らしい、いやな悪臭が どこからともなく一週間ぐらい附近を漂よった」という（武蔵塚で聞く）。武蔵塚附近一帯の地域は激戦地で、多くの死者をそのまま多く 谷間や窪地に山積して埋葬処理したものではないのか疑心暗気の中で想像したが、真偽のほどは不明であるが、霊魂は その地に浮遊するかと？

亦その他 多くの神祠 史跡地 石像石仏等が、その処を変えて消滅し 人の非情か 社会の無情か、開発々展の陰に、良心と因縁の中で多くの事故者が出たので、昭和五十八年九月 城跡公園地内に、延命地蔵菩薩像を建立して祀る。

（二）長久手合戦と伊賀上野の仇討記文抄

寛永十一年（一六三四）荒木又右エ門伊賀越鍵屋の辻の仇討は余りにも有名である。

天正十二年四月 長久手合戦仏ヶ根の戦に際し、池田勝入信輝の家臣 渡辺金右エ門は、徳川方の井伊万千代直政の手にうたれて戦死した。その時金右エ門が所持していた刀が 重代の銘刀 五郎正宗で、討死と共に紛失したと云う。討死した渡辺金右エ門の同輩 河合又左エ門は、池田信輝の二男 池田三左エ門輝政が、叔父池田

丹後守 老臣片桐半右エ門等の説得により、仏ヶ根の戦線を離脱して、家臣 土居権右エ門 河合又左エ門等と共に長久手を落ちて、後に幡州藩主となり 渡辺金右エ門の長子 渡辺鞆貞に、長久手の功により 知行二千石、亦河合又左エ門には、知行七百石を賜ったと云う。両士共に池田家譜代の臣であったが、其の後何時か、長久手の戦で 紛失したはずの正宗の銘刀が、河合家にあることが知れて 両家の間に葛藤が続き、遂に又左エ門の嫡子 河合又五郎が 渡辺鞆貞の長子 数馬の弟 源太郎を殺害して、又五郎は江戸に遂電して、旗本 久世三四郎をたより 保護されたので、時の幡州藩主 池田忠雄は 河合又五郎の身柄引渡しを 旗本久世三四郎に要求して、外様大名と 旗本が対立したが、遂に 幕府が仲介して、河合又五郎は九州に仕官することとなり、旗本の一行三十六人 又五郎を護り江戸を出立して 伊賀の上野 鍵屋の辻にさしかかるを、渡辺数馬 荒木又右エ門の助刀により 下僕と共に三人 これを鍵屋の辻に迎え討ったと云う。世上 荒木又右エ門の三十六人斬りといわれるが、実際に討ったのは、河合又五郎 桜井半兵衛 河合甚左エ門 槍持ち一人の四人という。合戦後五十年のことである。

昭和六十一年九月二十日

長久手町郷土史研究会

福岡 録 三 書

岩作百八塚記抄

抑々長久手町大字岩作は明治三十九年五月十日、町村合併に至るまで尾張国岩作村として遠く古代より生成し、承和元年石作神社の創建と嘉祥二年岩作安昌寺十一面観音創祀等歴史は古く、朱雀天皇の承平年間（平安時代中期）発刊の倭名類聚抄によれば郷名石作とある。古代数戸の土着民の生活を始めとし天文・天正の戦国動乱時代は数十戸をかぞえた。徳川中期寛文・延宝・元禄・宝永・享保・元文の頃より漸くにして、人口戸数共に増加して、浅井・加藤一族を始めとし林・倉地・福岡・松原・日比野外等を岩作九姓之祖先と云う。元禄年間（二百八十余年前）までに田畑の開墾五十六ヘクタール余（町歩）にして、大正十三年頃までに田畑の開拓二百二十有余ヘクタール（町歩）に及ぶという。岩作の中央部東西の田圃は八十余町歩（ヘクタール）という。その一望広範の地域田圃中に大小無数の草塚が点在し古来より岩作の百八塚として有名であった。（天保年間尾張名所図絵の塚絵外史料編纂所古文書等にあり）

その小塚は、四・五坪（アール）より大塚は六十坪程も有り、高さは田圃面より一米位い程度のものが多く、中には二米位い高い塚も数個は存在していた。

殆んどの塚が雑草の繁茂した塚であり、その中数塚は漆・櫟・桜・カモツカ・シラサ木等の雑木があった。古文絵図等によれば、松数本が画中にある塚もあって殆んどの塚が無名塚で、えびすの塚・かしやごの塚・妻ノ宮塚・鍛冶ノ塚・夜泣石の塚・木下の塚等、又耳塚など数ヶ塚には名称があった。

岩作は古くより近隣の本地・菱野・山口・猪子石・一社・長湫・大草・前熊・北熊・北新田・岩崎等の中心的な村邑地であり（学校・日常生活雑貨物商店取引等の中枢地でもあった）、相当古代よりの田畑耕作地もあり、

特に岩作中心部の田圃は平担広範肥沃な土地と湧水流水等水利の上よりして長久手合戦当時には、相当面積が開拓耕作されていたものと思う。草塚は岩作の発祥開拓時に出来たもので、又長久手合戦時に創生したもので何れにしても一千年より四百年以上の歳月を経て現在に至るまで自然のままに変わる事もなく残して来た草塚も、誰一人として詳しく知ろうと思う人もなく、里人も耕作者も岩作に塚の多い事は、又自分の耕作田中に塚のある事は普通であり自然であった。今昭和四十八年よりの岩作土地整理事業により忽然と消えた草塚の創立と創設事由等を列記してみたいと思う。

記

- 一、字宮前・塚本・久手田附近の草塚は古墳時代よりの墳墓で塚として残存した。
- 二、字石田・長池・寺山・平地・元門等の草塚は、多く長久手合戦時に創生し残存した。
- 三、草塚は田圃開墾時に大石、巨木、株等の集積地であった。
- 四、小字の境界余剰地を草生地として残した。
- 五、所有耕作者の耕作中の小石器物等の投棄場所であった。
- 六、一般農民耕作者の共同草刈場、わらズミ場、農作業場として使用した。
- 七、小祀仏社等旧蹟奉拝祈願場所として残した土地が塚となった。
- 八、耕作田圃の中央部にも多数在った。
- 九、耕作所有田畔畔境にも多数存在した。
- 十、塚には全部地番・地積があった。
- 十一、私有塚地が殆んどで一部には区有公有地塚もあった。

十二、長久手合戦檢ヶ根の戦は、岩作西石田・長池・塚本・寺山・平地・藪田・長箴等は、当時殆んど原野地にして現在の田圃中に於いて激戦死闘が繰返され徳川軍大須賀榊原隊堀秀政・三好秀次の諸軍兵中五百数十人の戦死者を出したという。死者の地点遺品器物個所がそのまま埋葬塚となり。現在まで残し存在した。

十三、一千余年の古代より四百年來、私人個人の土地所有地でありながら、又耕作田中邪魔な雑草塚を其のまま自然の形で現今までも残して来た処に不可解が有る。

十四、塚を少しでもかまうと何にかの祟があるとは古人・里人・父母等の言い伝えであったこと（雑草も刈らなかつた）。

十五、耕作者や所有農民は、自分の耕作田地内や畦畔に草塚の存るのは普通であつて自然であり、少しも削り取るのも、なくする事も考えなかつた。代々の耕作農民は皆その様な考えの人達ばかりであつたので、幸に現在に至るまでも残して来た。

十六、字宮前耕作道路建設時（昭和初年頃）に字塚本東の塚より埋立土の用土採掘中、古骨古銭等が露出したので中止した事（父開太郎談）。

十七、昭和初年、字白針地区の耕作道路を建設中、埋立土の採掘を直会神社の東の相当大塚より採取中、古骨刀の折れた物、鏝等十余点も出たので、後日の祟を恐れて其のまま同一場所に地中深く埋葬したという（浅井充幸・加藤兼男氏談、外に七、八名立会したという）。

十八、昭和初年頃、道路建設中町役場西の字長池付近の古塚二ヶ所より鎧の袖・刀の鏝・古骨らしき物・其の他器物が沢山に出たので其のまま土中深く掘り埋葬したという。現在県道路下になって居る由。長久手合戦檢ヶ根の戦遺物と思う（加藤兼雄氏談、外に五、六名の立会見聞者あり）。

十九、大正の初め頃と思う。字元門の古塚より用土採掘中古骨・古銭・器物等が沢山出た。現在の首塚近くであり（二百米余）、安昌寺・教田寺の寺前にて合戦当時には数ヶ所にて埋葬したものと思う。後世草塚として残って来た。

本当の首塚は何ヶ所かある（浅井善太郎談 明治二十六年生 現在八十四才健在）

二十、岩作石作神社前の字宮前のえびすの塚は小社旧蹟であり、五十坪余り平面で農耕畑となり、区有地であり中心部に五、六十貫大の大石が一個在った。塚取り破壊時に立会見聞したるも赤土の本山で他に石一個も出なかった。僅かに陶器の小片二三個を見たのみでした（昭和四十九年岩作農地改良整備事業により大塚は建設業者の手により破壊整備された）。（筆者 録三）

二十一、字宮前妻の宮旧蹟の小塚は、僅か五、六坪の塚で塚上にネズ古木があり田圃の中心部に在ったが、昭和初年農道建設時に採土して全部耕作田圃になっていた。

二十二、字宮前かしやごの塚は十二、三坪、塚の北側に三坪程の沼地があり小祀旧蹟にして塚上に山桜の大木・かもつか木・漆・しらさぎ等の雑木草が繁茂していた私有地なり。

二十三、字早稲田木下の塚（私有地）三十坪余りの大塚で、高さ二米余りの漆・櫟等小樹雑草が茂り、昭和初年農道建設時に東側三分の一程採土した処、大石が十個余りも露出した。当時不用意に採掘したるも後日大石の間が赤土粘土で良くかためてあったので古い墳墓地であり採土を中止して、掘り出した石は全部石作神社に献納した。

二十四、字元門石作神社御神田三百坪余りの田圃真中の二十坪程の塚、小祀旧蹟にして後年二、三坪の草塚に縮少され石作神社神田銘の石碑が建立されて居た御神田、塚ともに石作神社の所有地なり。古来は松雑木等

あり、石作神社前西より恵比須之塚・中のかしやご之塚・東の御神田塚の三ツの塚は旧蹟にして東京史料編纂所所有古絵図面古書等に銘記せり。

二十五、岩作百八塚中特に数多く点在して居た小字は、塚本・久手田・長池・平地・元門・中繩手・八瀬ノ木等にして、小字宮前・城之内・白針・早稲田等は字に三、四ヶ塚ほど点在していた。下田・落合等は極く少数であった。

二十六、現在の長久手町小学校裏手の草塚より古墳か合戦埋葬品か遺物が出た（浅井弘氏談）

二十七、現在岩作寺山の豊龍院は元と塚本に在ったと云う。享保年間先達の神官青山助太夫現在地に移築したと云う（浅井弘氏談）。

二十八 宅地・道路・水路其の他の工事等により永年の間に消滅した塚もある。

二十九、別表の通り田地図面により九十塚まで地番・地積等調査した。

以上此処に二、三の塚につき個々に詳記してみた。

古来有名な岩作の百八塚は一千余年の古代より三百年・四百年と古く永い歴史の課程の中で形成されて、長久手合戦の中で生成されて八十余町歩に点在した草塚は、岩作発展と共に生き、農作者と共に語った自然の塚も史実をあかす事も語る事もなくして昭和四十九年十二月一億二千万円余の巨費と三ヶ年の歳月をかけた岩作土地整理事業の前に古代以来の姿を消した。嗚呼 瞑肝追想 抄記して筆を置く。

昭和五十二年八月

溝 添

番地	坪		
1	12	田	
45	15	"	
31	11	"	
24	10	"	
17	19	"	
18	44	"	
19	36	"	
19 -1	5	"	

欠 花

番地	坪		
16	4	田	
27	30	"	
28	14	"	
29	36	"	
34	27	"	
19	18	"	

宮 前

番地	坪		
15	60	畑	えびす
24	5	田	
35	19	草	
62		田	夜泣石

城ノ内

番地	坪		
65	88	畑	

藪 田

番地	坪		
52	9	田	
45 -2	9	"	
43	28	"	
23	21	"	
23 -1	12	"	
24 甲	27	"	
24 乙	38	"	

石 田

番地	坪		
23	64	畑	
20	27	田	
15	16	"	

五反田

番地	坪		
15	20	田	
22	29	"	
5	14	"	

中繩手

番地	坪		
50	4	草	
10	37	田	
11	31	"	
12	49	"	
13	29	"	
16	37	"	
17	27	"	
18	22	"	
20	22	"	
23	30	"	
27	39	"	
28	35	"	
29	24	"	
58 甲	6	"	

長 池

番地	坪		
56	42	畑	
55	32	"	
71	57		道 下
61	18	田	県道下
62	29	"	"
63	13	"	"
64	5	"	"
5	17	"	

平 池

番地	坪		
12	17		県道下
13	15		"
25	5	田	
27	9		県道下
29	32	田	
8	78	"	
9	70	"	

久手田

番地	坪		
53	45	田	直 会
54	32		"
55	23		"
13	17	田	
15	19	"	
16	24	"	
17	29	"	
39	12	"	

第三章 研修資料隨筆紀行文

昭和六十二年一月

福岡 三 再書

合計 九十一塚

元門

番地	坪		
21	25		石作 神田内
30	25		県道下
42 -2	24		耳塚
19 -2	8	田	
32	34		県道下

塚本

番地	坪		
4	7	草	
20	16	〃	
8	11	〃	
9	16	〃	

早稲田

番地	坪		
98	6		黒石
96	41	草	
80 -乙	11	田	
60	10	畑	

八瀬ノ木

番地	坪		
29	7	草	
1	33	田	
18	29	〃	
7	21	〃	
52	18	〃	
53	24	〃	
51	18	〃	
46	27	〃	
20	7	草	

昭和五十九年二月五日

大東町・榛原町史跡地見学研修について

長久手町郷土史研究会が昨年十月十五日に創立以来、会として最初の行事を実施する、五十八年度の視察研修地を、静岡県大東町並びに榛原町の二ヶ町に決定したのは、今年が例年にならない寒さがことの外厳しい年で少しでも温暖で史跡な土地をと思い選んだのが御前崎附近の大東町であり、榛原町となりました。

二月五日早朝八時 役場前に集合して出発した。二、三日前から心配していた天候も、厳しい寒さの中にもかかわらずと晴れた好天気です。ほっとしました。長湫の景行天皇社前で 浅井千鶴子さんを、又西長湫のバス停付近で 山本鶴善 石崎義雄御両氏の御乗車を願い、一路名古屋インターより東名高速道へと入り東進した。途中十五分ほど浜名湖サーブエリアにて休憩し、寒い外気にふれて湖周の景観を見る。談笑することとしきり、車中の人となり、何時か車は 袋井インターに到着して、大東町へと向う。静かで 広い砂地の畑、平和で 温潤らしいたた住いの家々と 町の様子 海が近い 点々と多く連なる 白いビニールハウス、苺や胡瓜が多く栽培されている様子。絵画に描かれたような長い松並木、古い街道らしい。十時三十分 予定通り大東町役場前に到着する。併立する町体育館が立派である。出迎えて下さった 町教委の方の御案内で、資料図書館に到着する。二階で館長さん外二名の文化委員の方の説明と、多くのパンフレット等を有難く頂戴する。当時の村で十年ほど前に製作されたと云う 高天神城の映画を約二十分ほどに亘り拝見して、戦国争乱の往古当時 如何に要衝な地であったかを知り、又町が、当時の村が、史跡高天神城の記録映画を製作せられたことに対し、深く敬意を表したい。いろいろと御苦心であったと推察申し上げます。

高天神城跡は、静岡県小笠郡大東町にある。昭和五十年十月十六日 国指定史跡となる。海拔一三〇米の鶴翁

山上にあって、天陰の要害で 海道の要衝として、戦国争乱の時代には「高天神をとるものは 遠州を制す」といわれ、元龜 天正の間、武田 徳川の両雄が数度に亘り激突し 攻防を繰り返した城として有名である。古くは鎌倉時代に上方次郎義政の築城に初まると云う。天正二年 武田勝頼が 高天神城を攻めた。時の徳川方の守将小笠原与八郎長忠は遂に敗れて開城に際して頑強に反対した 家康の臣 大河内伝三郎正局は捕虜となり、城地石牢に足かけ八年もの長い間幽閉されていたが、天正九年三月 徳川家康 高天神城の攻略により、正局は石牢より救出されて 感泣した。恩に感じ「天正十二年四月九日 長久手の戦 仏ヶ根決戦において遂に戦死する」。徳川方の勇将 伴若狭守盛兼 松平長綱 佐脇安連 松下勝綱 間宮信高 山田重則 山田正直 森久右エ門 服部源兵衛 阿部平六 大橋新三郎 大久保新七郎 梶田彦十郎等と共に、名ある勇士多数力戦奮闘したが、遂に家康の馬前に戦死。天正の春四月 長久手仏ヶ根の松風露草と消え果てて、此処に四百年 「無情の風に誘われて ああ細々と虫の声 元龜 天正と人の世に 高天神に月の影」と、うたった 感無量。視察時間の都合により、高天神城地史跡の見学を断念して 二階よりその雄姿を遠望して、十一時又車中の人となり出発する。御親切な館長さんの御先導で、有難く感謝しつつ 浜岡発電所、宮城マリ子さんのネムノ木学園等を外見する。大太平洋岸の白砂青松と、タンタンたる 白く美しい道路を 御前崎へと走る。途中海岸よりの景観の地に停車して、車中で昼食とする。長久手町の大黒ずしが早朝より用意してくれた 持参のすし一折を車中で各人に番茶と共に配る。南には洋々と紺く広がる 大太平洋の荒波が、今日は静かに 白砂を洗う。遠くに航行する数隻の船 西方の磯の白波に数十人かの波乗りに興じる 元気な若者。好天気とはいえ、車外の風は冷たく 車中の春暖とは想像以上の寒さ。昼食も終り発車する。途中 御前崎グランドホテルで十分ほどの小休止と会員の記念写真を撮り出発する。途中相良町を経て 榛原町へと入る。一時四十分 予定の時間で 役場前に到着する。町教委 資料館長さん 御両名の出迎えをうける。立派な町民文化センターが右手に、左に隣接して 郷土資料館

が建つ。二階に案内されて、町文化財委員の桐田栄氏の 勝間田城跡、並びに夫木和歌抄等 郷土の歴史を聞く。又資料館を参観して 勝間田城跡実施研修に 桐田氏の御案内で約十五分ほどで現地に到着した。見事な茶畑に史跡は 静岡県榛原郡榛原町勝間入山沢にある。昭和五十八年二月二十五日 県史跡に指定される。

勝間田城跡 勝間田氏は、鎌倉実記 遠江国風土記 伊豆日記等によれば、保元の乱（一、一五六年）頃にはじまると云う。鎌倉時代初期 榛原の国人 勝間田平三郎成長を始祖と云う。古くより勝田庄附近一帯の土豪として栄え、支配経営すること実に三百二十年。時には京都に上り警衛の任に当り、亦時に 建武の時代 楠木正成の部将として 千早、赤坂城に共に戦ったと云う。平三郎成長より四代の曾孫勝間田長清は 縦五位下越前守左近太夫に任ぜられた。文雅の人で 永仁初年頃より 延慶二年まで、十七年間の歳月をかけて 夫木和歌抄三十六卷 実に一万七千三百六十首の和歌抄を編集した。後に出家して 蓮昭と称す。

今 その和歌一首 勝間田城跡山上に建つ

下荻もかつ穂に出つる夕露に

宿かりそむる 秋の三日月

一代の歌人であったが、世は応仁の乱（一、四六七年）となり、駿河 遠江の国にも発展して 遂に駿河の守護 今川義忠の攻撃をうける。時の勝間田城主 勝間田修理亮 文明八年（一、四七六年）春の決戦にすべて滅び去り、その一族は、戦の後 富士野の林宮ヶ尾にかくれ、しのび、後に印野の地にて三十余戸と云う。亦史跡 勝間田城跡は山城としては古く、天陰の要害を利用して 楠木流の軍学による城跡地で、多くの堀切 堀割と土塁 郭等と、山井戸 水濠 池等によって、構築されており、中世を代表する山城であると共に、築城以来五百余年（昭和五十一年四月十日 城跡五百年祭を施行） その城郭の原形が殆ど完全なままで残存している稀有な城跡地で、実に本日の研修見学は得る処が多であり、御足労を願った 桐田栄氏に感謝しつつ、城跡をあ

とに一同山を下った。女性三名の方と 山本鶴善さんには、大変な御苦勞で申し訳も御座居ません。午後三時十分 また乗車して、榛原町国道に出る。吉田町 吉田インターより東名高速道にと入り 一路名古屋に向けて帰路につく。今日両町の研修に当り、時間の都合で高天神城趾だけ見学出来なかったことを残念に思い、何時かの機会まで待ちます。

朝からの迷ガイド役 浅井鹿雄さんの発想で車中 会員の皆様方の御感想、御意見等を拝聴しましたが、両町共に 文化施設が充実しており、その処に立派な人がおられる。よく郷土の歴史を知り 郷土愛が強く 深い。今より十年余も前に「村の当時に」郷土の映画を製作している。文化財指定件数が多い（大東町 国指定一件、県指定六件、町指定三十四件）（長久手町 国指定六件、県指定一件、町指定四件）等々、結構な御意見が多く また伊藤高義先生のメキシコ談話と国際的視野の広いお話し等、一同感銘しつつ、車は何時か名古屋インターへと入る。午後六時二十分。一同無事に役場前に到着する。皆さん大変一日御苦勞様で御座居ました。厚く御礼申し上げます。末筆ながら大東町、榛原町の方々 御親切の程厚く感謝御礼申し上げます。本日御都合で不出席の方六名 次会には是非御参加の程お願い致します。

昭和五十九年二月六日 紀行拙文を勞して会員諸賢に配付する。

福岡 鯨 三 書

近江徳勝寺と琵琶湖めぐり

今年は例年になく残暑が厳しい。九月一日、今日は二百十日、昨夜来の台風は関東と九州の一部に上陸した余波で、早朝は雨、七時十分頃に家を出た。曇り空で雨はやんでいた。近江浅井家三代菩提法要と歴史探訪の旅である。町役場前には、鯨バスが待機して居り、大西さん治め浅井家の方々が殆ど乗車して、車は七時半に出発した。途中 西長湫のバス停で、山本鶴善 寺島幸一氏の御乗車を願い、本郷駅で浅井台一さん外六、七名の御乗車を待って、一行四十八名 一路名古屋インターより名神高速道路へと車は入った。途中養老エリアに立寄り、関ヶ原の山峡を觀望しつつ、遠く古代を懐古した。

岩作は古くより山田郡にぞくし、六、七世紀頃には 石作連が治めた処で、発祥の氏人は 浅井氏であり、宇南島 中脇の地に住した。八三四年には石作神社を創建した。

石作氏は尾張氏の支族で 尾張国には多く 中島郡 葉栗郡 丹羽郡等に石作神社を祀る。又近江国木ノ本町山城国（京都） 乙訓郡にも石作神社を祀る。岩作の石作神社は明治五年 延喜式内 郷社の神格を賜り 境内面積六千九百六十坪。郷社警固祭りには往古より猪ノ子石、上社、下社、一社、藤森、高針、長湫、岩作の八ヶ村が参加して古代の氏子と云う。又現在、安昌寺に祀る十一面觀音は、一千百三十年前の秘仏で 古くは岩作字間瀬口（中島）の地に祀ったものである。近江ノ国は奈良、京都と並んで古代文化発祥の地で 有名な神社仏閣が多く、六世紀中頃に百済が滅亡し、六六七年天智天皇は天津の地に都を置いた。仏教の渡来は早く、觀音信仰は盛んで 国宝級の仏像を多く県下に所蔵する。浅井氏は藤原氏の出自と云う。平安時代末期 その支族が没落して 近江浅井郡の地に隱遁した。鎌倉時代には佐々木源氏が支配した後、室町時代に至り二家に分家して 六角氏 京極

氏となる。

京極氏は湖北六郡を支配し、浅井氏はその家臣となるが、永正、大永年間頃より浅井亮政 越前朝倉家の援助により、久政 長政と三代五十五年に亘り、近江一円を制したが、天正元年八月二十八日 織田信長により小谷城は落城し、久政 長政は自刃した。長政 時に二十九才と云う。お市の方は後に柴田勝家と再婚し、天正十一年 福井北ノ庄落城と共に自刃した。時に三十七才であった。長政には二人の弟があり、弟伝兵衛の子 新八郎は 織田信雄の臣となり、尾張荊安賀城主となる。その子田宮丸が長久手合戦の発端となり（天正十二年四月）長政の末弟を縫段之助と云う。姉川の合戦で戦死する。その子八郎は 元和元年（一六一五）大阪落城と共に討死するが、その嗣子七郎左衛門は従僕と共にのがれ落ちて 美濃に至るも詮議がきびしく諸国を流浪のはて三河国猿投村 広見村等に転住したが、後に岩作村中脇の地に住居帰農した。

岩作は古く六、七世紀頃 すでに石作氏が支配し、浅井氏はその支族であり 氏人として景行天皇 日本武尊の御東征に参加し、壬申の乱にも参戦していた（岩作百八塚）。

代々字南島 中脇の地に居住し、後に加藤氏が寺山に居住して 共に岩作を開拓した。古代より近江 石作 浅井氏との交流は深く 八三四年 祖神を石作神社を創建して祀り、氏人の氏神とした。

亦 字中島の地に十一面観音を祀り、岩作発祥の神仏とし崇拜し今日に至る。

同氏同根の中に融合し安住した、初代 浅井七郎左エ門は延宝六年（一六七八年）八十五才の松寿をまっとうして亡す。墓は岩作安昌寺墓地に 浅井家元祖之碑として在る。亦他に 長久手合戦天正慶長年以降 元禄年間までに岩作に転住し来たった。倉地氏 林氏 福岡氏 日比野氏 松原氏等を浅井氏 加藤氏と共に、岩作開拓九姓の祖と云う（元禄年までに五十一町歩を開拓した）。

初代浅井七郎左エ門以来三百有余年 十二代 浅井信義氏は中脇の地に在り、多くの分家を派生し発展して、多士濟々 岩作発展に寄興した。氏名を挙げれば、浅井文左エ門、浅井総助、浅井彦太郎、浅井伝右エ門、浅井松兵衛、浅井光太郎、浅井延太郎、浅井相次郎、浅井義嗣、浅井金松、浅井豊治、浅井広助、浅井祥雲、浅井菊寿 浅井憲寛、浅井光利、浅井伝次等々多くの浅井氏が郷邑発展に尽し貢献した。

以上で岩作の浅井氏を概説しつゝ、車はいつか彦根も通りすぎて長浜市内へと入り、徳勝寺入口に停車した。寺は曹洞宗で浅井家三代の菩提寺である。第二十九回の法要と言う。寺宝には、備前守長政の御朱印状二点を所蔵し 市文化財である。盛大な法要終了後、寺で昼食をとり出発した。近くの長浜城につく。昭和五十八年の築城で真新しい。羽柴秀吉が最初の城持ち大名として築城したもので、湖畔に立つ歴史博物館である。弥生時代頃よりの稲作農耕道具、小牧長久手合戦屏風、国友鉄砲等多くの美術 古文書が展示してある。

館を出発した車は、奥琵琶へと湖北の 緑翠を背に 湖畔の道を高月町木之本町へと走った。今日は余り風もなく湖面は静か。近くに竹生島が浮ぶ。奥琵琶ハイウェイの高所より びわ湖一帯の景観を展望して、西浅井町より海津を経て 車は湖西に出た。今宿の辺り 風が強く白波が高くなり、白ヒゲ明神社の大鳥居が湖上にそびえ建ち、湖畔の松柏が風に鳴っていた。車は静かに びわ湖タワーに入った。今日 夏休み最後の日曜日 大にぎあい、土産品に京名物八ッ橋を買い、車は発して琵琶湖大橋にかかる。全長千三百米余と云う。琵琶湖を横断して栗東より 名神高速道路に入る。左手の車窓に夕闇の近江富士が映り、想いは遠い祖先の苦難の道をたどり 戦国武将の悲劇を各々の胸に秘めて、車は暗夜の関ヶ原を走った。

最後の休養を 養老エリアでとり、一路帰途につく。木曾川も小牧山もすぎて 名古屋の夜景が近くに迫る頃、車は名古屋インターに入る。途中 西長湫で山本さん外数名が降りた。七時二十分頃 町役場前に無事到着した。

大変に御苦勞様でした。
末筆ながら、浅井台一様御夫妻並に大西二郎様の御厚志に感謝御礼申し上げます。浅井家及び皆様の御健勝を
祈る。

長久手町郷土史研究会より山本鶴善 寺島幸一 浅井金徳 青山清治 加藤桂 浅井鹿雄 福岡録三が参加し
ました。

昭和六十年九月三日

長久手町郷土史研究会

福岡録三書

東濃岩村古城跡明智大正村見聞記抄

一昨日より曇り時々雨の天候は 今日も又曇り空、十月十三日 我々郷土史研究会の秋の一日研修旅行で 午
前八時十分頃一行十八名は 役場前を出発した。車はグリーンロードにはいり一路東に走り、三河中山インター
にて下車し、藤岡町より小原村にはいる。和紙の里である。点在する農家と 稲刈は八分通り終っている様子。
車は飯田を経て 山峡に入る。三河と東濃の山々が幾重にも重り合う 山路の旧道は、つづら折りの細い道で
樹間を縫うように走る。谷間の樹々が 処々で黄色に染って 秋の深まりをみせている。何時か前がひらけて農
家が点在してきた。岐阜県瑞浪市である。陶町を走る頃 車中の談笑も終り九時三十分 予定より三十分ほども
早く 車は明智町大正村駐車場にとはいった。明智川の流れは美しい。橋を渡り 大正村役場に到着する。
明智町が町の活性化の為、大正村を制定したのは最近のこと。亦歴史的にも 遠山氏や 明智光秀出生の地と
して有名な処である。

まず 役場二階に案内された。山本芳翠の洋画が多く陳列されている。芳翠は当町の出身という。明治初年
我が国洋画界の草分けとして知られ、門下には黒田清輝 北蓮蔵がいることで余りにも有名である。役場より案
内されて、明智町代官屋敷御陣屋をみる。又隣接して 臨濟宗妙心寺派の竜護寺がある。遠山氏の菩提寺で 代
々の領主の古碑が巨杉の林立する中に苔むして建つ。尚、当寺の一隅には明智光秀の供養碑、光秀池等がある。
寺の林間を下って 八王子神社につく。天曆三年（九三九年）の創建と云う。遠山氏の再建で 御神殿 唐門
人麿呂社神殿 楓等が県指定の文化財という。神社を拝観した一行は 大正時代の街並をあるくことにした。道
は 足助より 飛驒に至る 中馬街道である。銀行がある。大正村の資料館で 内部は四階建で、大正時代のエ

レベーターや資料が多い。一行も少々歩きつかれたので、茶を喫して小休止の間に 明智氏の発祥を書くことにする。

明智家十一代光秀は、享禄元年（一五二八年）戊子三月十日に 美濃国恵那郡明智城で出生した。清和天皇より代々の土岐源氏で 初代を土岐明智頼重と云う（明智庄に住した）。頼高 頼篤 頼秋 頼秀と続く中に 多くを支配して、白鷹城 長山城等に移るが、弘治二年九月 稲葉城主斎藤義竜により落城した。光秀にいたる十一代 二百十五年であったと云う。

十一時五十分頃に大正村駐車場を出発した。車は山岡町を経て、岩村町のふるい街並に入り 岩村川の溪流を渡り、城跡山麓を大きく右に廻りながら 深い山間を登る。十二時十五分頃 岩村城跡山頂に到着した。城址は標高七二一米で 日本三大山城の一つで 城の創業は 源頼朝の臣 加藤景廉が遠山荘に築城したもので、代々の遠山氏が居城し 東濃地方から 信州の一部を支配したものである。天正元年（一五七三年）には、武田信玄の臣 秋山晴近により落城したが、亦天正三年に 織田信長に攻略されて 川尻鎮吉 森蘭丸が城主となるが、天正十年六月本能寺の変により、森長可が城主となったが、天正十二年四月長久手合戦により 森長可戦死と共に、森氏の末弟 忠政が城主となり、戦国時代の興亡を繰り返した。現在残る城跡の多くの苔むした石垣の殆どは 森氏時代の築造と云う。関ヶ原の合戦後、岩崎城より三河伊保城主となった 丹羽氏次の長子氏信が 寛永十五年（一六三八年）岩村二万石の城主となり、以来 五代 元禄十五年まで続き、その後は松平氏が入封して、七代 明治維新となり、仮籍を奉還した。亦城の建造物は明治六年までに町下に払下げて 取りこわしたと云う。亦岩村町には 徳川時代より城下に旧家豪商が多く、代々の藩財政に参与して貢献した。商家浅見家 木村家等は、丹羽氏信が伊保より入城の際、共に岩村に転居したものである。他に勝川家 山上家等がある。

亦徳川時代より 代々の岩村藩は文教に意を注ぎ、藩校「知新館」を設立して教育が盛んとなり、儒学の佐藤一斉 下田歌子は明治五年に岩村を出て 宮内省に出仕する。三好学は有名な植物学者となり、大島健一は陸軍中将 陸軍大臣となる。子の大島浩も又陸軍中将 駐独大使に栄進して、多くの有名人を輩出する。

我々一行は 町が八百年祭記念に建設した 出丸の隅櫓で持参の食事を終り、天守跡地にて記念写真をとる。帰りは大手跡より急坂を降り 岩村町郷土館につく。歴代藩主の豊富な資料を一堂に集めた特別展である。又隣接する民族資料館も拝観して、土産店に立寄り 思い思いに買物をした。帰途は一時間ほどの余裕があったので旧城下街を歩くことにした。木村家 浅見家 勝川家等、往時の御用商人の旧家の面影をよく遺して、最後に水半別館に到着し、広く立派な庭園を見て 中川とも作品展を拝観した。ともは中津川の出生と云う。異色の日本画家で 古く東濃地方の地狂言 村芝居 恵那文楽 人形浄るりに題材を求めて絵画いた人で、昭和五十七年九十二才で亡した。郷土画家の作品展を拝観した一行は、午後三時五分 岩村町をあとに帰途についた。静かな山々の緑 秋の稲田の刈り取りの終わった田園風景の曇り空に 雨雲が強くなり 周囲の山々が白く霧り立ってきた。雨 雨 雨が降りだしてきた。恵那にはいり 中央道に車がいる頃は、豪雨となり、水は車道を竜のように流れたが、車内は平穏で 先程より司会者により 感想や意見の発表が次々と出されていた。結構な御意見ばかりで、車は走り 雨も何時しかやんで 名古屋インターに入り、午後四時三十分 無事に役場前に到着した。運転手さんにも終日大変御苦労様でした。林副議長 大西さん、御多用中の処 有難う御座居ました。皆様にもよろしく。おつかれ様で有難う御座居ました。

昭和六十年十月十五日

長久手町郷土史研究会

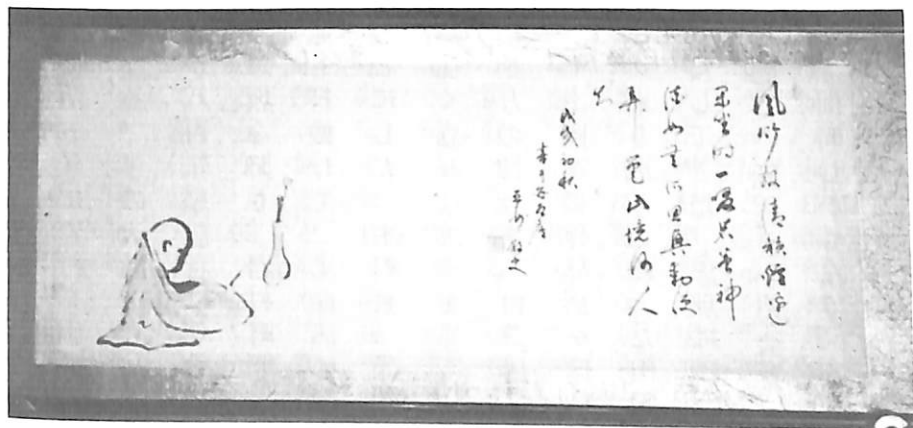
福岡 三書

紙本 墨書画 額装

岩作の人 浅井時次郎（思水）書画

戊年初秋作

録三 所蔵



洋画 メキシコ風景 額装

大草の人 伊藤高義画

昭和六十一年春

録三 所蔵



根尾谷淡墨の桜を観る記

春 らんまん いつも長久手古戦場の桜が満開の頃（今年は四月十五日頃で）、淡墨の桜を思い出す。私が桜を知ったのは十年余りにもなるが、今だに逢い見る事も出来ない。是非今年はと 想う頃、新聞・テレビも放送した。でも遂いに その幸運の日はきた。四月十九日（土）である。昨夜来の雨は 今朝も降り続く。一行三名三岡氏の車で 九時四十分すぎに 役場前を出発し、（青山氏は体の都合で不参加）一路名古屋インターより 名神高速を西進して 春雨煙る中を 小牧・一宮と 何時か木曾川も渡り、大垣インターにて下車して 市内に入る。西濃水の都で 長久手合戦当時 池田勝入は大垣城主で 桜と共に 四月九日 長久手の山野にて 雄図 無なく戦死した。車は何時か 岐阜方向より穂積町に入る。柿の産地で 桃畑は今を盛りと咲き競い 菜の花畑と共に美しい。街並を走ること 数分にして 車は本巣郡に入った。左手に根尾川を見る辺り 川堤に桜並木が続くが、大部分はちり終り葉桜であったが、処々には一本ずつ 今を盛りの桜が 川の流れに影をうつし 山峡はいよいよ深くなり 右手の山並は高く連なり、新緑の杉の美林が続く。根尾川は清く 瀬となり 遠くの山肌に まばらな農家が煙雨の中に点在して、根尾谷は一幅の山水画である。車が長久手を出発して二時間余り、村の板所集落 根尾川橋々上は車の列で一パイ、淡墨の桜見物の車ばかり。

「うすずみのさくら」は、岐阜県本巣郡根尾村板所字今村上段にある。彼岸桜で 樹齡は一千四百余年の老桜と云う。幹回り九、二米 高さ十七、二米で、大正十一年十月二十一日 国の天然記念物指定を受けた 由緒ある桜の巨樹である。

桜の伝説 今より一千四百余年の昔、応神天皇五世の孫彦主人王の御子男大逆王が、雄略天皇（二十一代）

の迫害により 尾張の国一の宮の地に難をさけ、後に 本巢の北方山岳地帯の根尾谷深く辿りつき 市場の山居に住し 後には神所の地に遷宮せられた。隠遁の地である。

皇子は 長じて十八才の時まで 此の山峡に辛苦の生活ではあったが、素朴で人情の厚い村人、純情な村娘、美しく高い山々、清らかな根尾川の流れ、四季折々に咲く 野山の草花に、皇子の郷愁は深く、切々と胸をうつものがあり、出迎えの大伴金村等と共に都に帰り皇位を継承したが、その旅立に際して植えた桜木が「淡墨の桜」と云う。皇子は第二十六代 継体天皇（五〇七）と申上る。

皇子は桜にそえて 歌一首を残された。

身の代と遣す桜は うすずみよ

千代に其の名を 栄かへ 止むる

以来桜は一千四百七十九年の統々たる長い 永い歴史の奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町 戦国時代の近世より 現代へと移行し、多くの変遷を見て来たが、皇子御手植の幼木は遂年生盛して成木となり、四囲に枝を配して笠状の大樹となり、蕾は薄紅色で気品に富み、開花すれば単弁にして素朴 清純と云う。満開に至って白色艶麗となり、春風一過にして花正に枝より辞して 紛々散花に際する頃は、特異の薄墨色を帯びて「世にうすずみの桜」と云う。大樹は寿齢を重ね 幾百の星霜を経て 巨大な老樹 寿桜となり、国の重要天然記念物として、今なお根尾谷の山峡深く、今村上段の山肌の地に 桜花らんまんと咲く名木も 多くの生命の危機があった。古代はしらず 大正初期に大雪で枝が多く折損して 樹盛が衰えた。又昭和二十三年の終戦頃には、遂に枯死寸前の状態であったと云うが、村の関係者一同及び全国の造園名手関係者に招知して、老木の起死回生の諸施策を構じて 再生したが、不幸 亦又昭和三十六年九月の伊勢湾台風の被害は多大で、多くの枝葉は折損し四散

して 無残な姿となり、回復を祈念して再度 昭和四十二年より四十三年にかけて、回生の諸手当に関係者は辛苦を勞して 今日 不死鳥の如く蘇った老桜は、春一番満開の期節と 遠くより多くの観桜客を此の山里に迎えて 千古よりの花の宴に、かげより関係者に深甚なる感謝を申し上げて、愚作の漢詩を一首呈する。

根尾清流深幽翠

幼帝郷愁悲恋別

淡墨老桜千歳余

回蘇誰知裡山春

録三題

十二時二十分頃か 多くの写真をとり、根尾村歴史資料館に村の歴史を参観し たずねて帰路につく。途中多くの露店が出て、山菜 菊花石 川魚等村の産物を売る。二、三の土産品を手にした一行は 車に乗車して帰りも 根尾川ぞいの山肌の道を 川と共に下り、途中追分道より 谷汲山に参詣することとした。行程十キロとある。溪流を左手に見て 緑翠の山は深く 車は何回ともなく曲折して走り ようやく谷汲山寺の駐車場に停車した。

朝よりの雨も 何時かあがり、曇り空で静か どこかの木の先で ホーホケキョと うぐいすが一声鳴いた。美しい 又一声。谷汲山華嚴寺の参道は一直線で 五百米余。両側の桜並木は満開をすぎて 紛々と桜吹雪で桜花の下には 多くの土産品店が軒を並べて 参拝者は多い。山門をくぐり 境内に入る。老杉巨樹が天をつく 辺り 十一面観世音菩薩の木のぼりが並列して立ち、眼前の急坂石段上に 重く大きく金堂がのしかかる様に立ち、本寺は岐阜県揖斐郡谷汲村徳積にあって、天台宗の古刹で 延暦十七年の創建と云う。西国三十三番観音霊場 満願の札所である。亦近くに横蔵寺もある。天台の古刹で 延暦二十二年に 僧最澄が創建した寺で、多くの

文化財を有し、妙心法師のミイラで有名であるが、時間の都合で断念した。帰りは又菊花石 ウイロの土産品を買って車中の人となり、帰路についた。穂積町より長良川ぞいに南下して 何か墨俣に一夜城跡あたりに出た。此処は古来より多くの合戦の地である。壬申の乱に大海人皇子の渡河合戦の伝説、源氏 平氏の対立による墨俣川の合戦は有名で、山田次郎重忠は「承久記」にその名をとどめた。亦永禄九年（一五六六）織田信長は、美濃の斉藤氏 稲葉城を攻めるに当り交通上 軍事上の要衝である墨俣に 信長の家臣木下藤吉郎が一夜にして築城したことは余りにも有名で、城跡地附近 サイ川の堤防上には 多くの桜並木があり 花も散り終り葉桜の候で春の風が川面を流れ吹いていた。

大垣インターより高速道に入り 一路帰途につく。木曾川 小牧も車中で舟を漕ぐ中にすぎて 五時頃か 無事に長久手に帰着した。三岡さんには大変御苦勞様でした。伊豆熱川と共に 再度の御世話で有難く厚く御礼申し上げます。皆様有難う。又行きます。うすずみの桜の写真も今日（二十三日）は出来てくるでしょう。絵画も二晩に五枚墨画したが最後の仕上げにもう一晚はかかります。拙作ですが、写真 紀行文と共に皆様に配付する所存で御座居ます。

皆様の御健勝を祈る。 拝

昭和六十一年 丙寅春四月十九日

長久手町郷土史研究会

福岡 三書

孫とともに奈良に遊ぶ記

今年の子供の夏休み中に 旅行をと思い、孫の意向により八月五、六日 奈良の古寺歴史探訪の旅と決定した。当日は快晴で 午前七時九分、長久手役場前バス停を発車して 藤ヶ丘より名古屋駅近鉄八時三十分発特急指定席に一行五名乗車した。途中四日市 津 名張もすぎて、山深いのどかな長谷寺の山村もいつの間にかあとに、十時二十五分頃には八木に到着した。ここで奈良京都行にのりかえて発車する。大和の田園風景が車窓に映る。三輪山神社の立看板がうしろに走した。又、西大寺駅で奈良線に乗りかえて 十一時十五分に近鉄奈良駅に到着した。手荷物は駅のロッカーに入れてみかるとなり、小休止した。

駅より近い興福寺に行く。寺は藤原不比等が和銅三年（七一〇）に創建した。藤原氏の氏寺で 南円堂 五重塔等があり参拝する。広い寺域には多くの伽藍と巨松が点在して、鹿も多く 寺内を散策して、国宝館特別展に行く。陳列品の多くは、明治七年 同十七年 昭和四十三年に、寺域の発掘調査の過程で出土したもので、奈良時代の唐草文鏡 銀鏡 水晶玉仏具 輪宝 土師器皿 塔風鉦 鬼瓦 軒瓦等々古代の発掘品が展示してあり拝観した。出たのは一時少し前で、美しい奈良公園の 小食堂で昼食にする。各人思い思いに食事をとり終り、春日神社参拝に向う。春日山にあり、奥ふかい参道を登る。松 杉 クス等の大木が多く、悠遠な神苑に 神鹿が多く群れて遊ぶ。社は藤原氏の氏神で古い大社で 全国に春日社を祀り 春日造りは有名である。参道の両側には大小の春日灯籠が多く林立する。登ること二十分余でようやく 樹間左手に重層朱塗の神門がみえてくる。左右に回廊をめぐるして 石段を登り、神門をくぐり数十歩にして 朱塗り 椀皮ぶきの参拝所があり、その背後に巨大な杉の神木が天に沖して 神殿はその奥ふかくに鎮座する。朱の回廊と 掛灯籠が連なり、泉水が流れる。

仙客幽邃の境地に遊ぶ。参拝して参道を下る。神苑はいつか奈良公園となり美しい芝生となり、地内に国立史料館が建つ。時間の都合で参観はやめにする。西日が強くさす館を背景にして記念写真をとることにした。

奈良公園は、興福寺境内 春日大社 若草山 東大寺境内等に隣接して、自然の風致をなし 広大な地域内に鹿が遊び、施設がある。公園より七百米歩くこと数分にして 東大寺山門が見えてくる。奈良時代七代七十四年 天平十五年（七四三）聖武天皇の発願により東大寺を 僧良弁 行基等が建立して 盧舎那大仏（金銅仏）を造営し、全国に国分寺 国分尼寺を置く。華嚴宗の大本山である。奈良の大仏は有名で 像高は約十五米といふ。創建以来、平安時代末 治承年間（一一八〇）に、亦戦国時代永祿年間（一五六七）の二度の兵火に多くの伽藍を焼失して、江戸時代の宝永五年（一七〇八）現在の東大寺が造営再建されたと云う。世界最大の金銅仏で、木造建築物である。

奈良に都が藤原京より遷たのは、元明天皇の和銅三年（七一〇）である。以来、元正 聖武 孝謙 淳仁 称徳 光仁天皇と代々に続き七十四年 平城京として奈良時代の都として二十万人余の人が住で盛え、東大寺 興福寺 薬師寺 唐招提寺等多くの堂塔伽藍が建立して、国の政治文化の中心地であった。

あをによし 奈良の都は咲く花の

におうがごとく 今盛りなり

万葉集巻五 大宰少式小野老朝臣 歌

右の名歌は、当時の盛観をよく語っている。東大寺は何時 何度来ても参観者が多い。山門をくぐって 右手に大きく鏡池が広がる。池水は清く 松の風情をうつして 中島が浮く。中門を左にしばらく行くと受付所があり、回廊の中にはいると 前面に大仏殿がそそり建つ。天平様式で 間口五十七米余 高さ四十七米余の大伽藍

である。棟の「シビ」が黄金に輝く。先ず 記念写真を一枚とってから仏殿に入る。

香薫の中に 天井は高く、暗い。人は多く 皆一様に仰ぎ見ている。金銅の盧舎那仏で 大仏を参拝して、暗い頭上附近にむけた。カメラで一枚写したが、割合によく出来ていた（後日）。うす暗い堂内を巡り、背後よりも大仏を拝し納経をうけて外に出る。大仏殿前の広場では、外人三十名ほどの団体が大合唱をしており 終りを待って 多くの拍手があり、その外人と一緒に 東の回廊より鏡池の北側に出た。午後の日ざしは今だに強く、時おり吹く涼風に 池畔の松の小枝が水面にただよい影を落す。遠くに咲く赤いサルスベリの花が一段と美しく、緑陰に鹿が二匹 足を折って休んでいる。見るともなく 眺めるともなく小休止の間、孫達は土産品の選定に余念がなく、各々何かを手にしていた。時に五時半を過ぎており 駅に帰ることにした。興福寺境内より歩く。右手に奈良県庁舎と、市商工会議所が並び建つ。近鉄駅に到着してロッカーより荷物を受けとり、駅前繁華街で喫茶店にはいり 小休止して、駅前本通りより タクシーに乗る。

今晚の宿泊は、大和山荘ホテルである。東大寺裏手広い松林を走りぬけると 池があり、池畔を廻り 正倉院の横手より裏に廻ると 桜並木の樹間に、堂々たる 瓦葺四脚門が見えてくる。ホテルの正門と云う。由緒のある処で 地名は雑司町という。ボーイの案内で三階の客室にはいる。十二畳の和室に六畳の洋室があり、南に大きく正倉院附近の緑の景色が広がり、閑静なたたずまいで 結構 結構と、室中に長ながと手足をのばした。亦夕食も豪華で 翌朝は八時に出発した。

出発前に記念写真を取り、正門、木村長門守碑 油倉六石合跡等を撮る。タクシーで法隆寺に行く。約四十分で到着した。南に長い松並木の参道を経て 南大門がある優麗な構で石壇を登り 中門に行きつく。仁王門で金剛力士の立像は立派である。左に松の下を廻って受付所より回廊内にはいると、眼前に金堂 五重塔が飛鳥様

式で建つ。法隆寺は今を去る一千三百八十年の昔、推古天皇と聖徳太子の発願により創建したもので、世界最古の木造建築で、多くの国宝、重要文化財を保有し、その寺域は広く五万六千五百坪という。金堂、五重塔、大講堂等を拝観して回廊東口より出る。外は広く東に経蔵、宝蔵が建ち、松間に鏡池がひろがる。池畔西よりに、子規の句碑が建つ。

柿くえば 鐘がなるなり 法隆寺

句碑を撮り、史料館に向う。有名な仏像、仏画、仏具、瓦等が多く陳列してある。時間をかけて拝観し、夢殿に行く。八葉蓮華の御堂で救世観音を奉安するという。参拝する。法隆寺をあとにして大和路田園地帯を車は走る。途中法輪寺による。聖徳宗の本山で三重塔が建つ。本尊は十一面観音で、丈六の古仏、杉の一本造りという。唐招提寺につく。律宗の総本山で、天武天皇の天平宝字三年の創建で、開山は鑑真和上と有名である。南大門、金堂、講堂、経蔵、宝蔵等多くの伽藍を拝観し、歩いて薬師寺に向う。六、七分にして寺に到着した。薬師寺は天武天皇の発願により創建され、南都七大寺の一つで、度々の兵火に焼失したが、昭和五十一年四月金堂を再建し、亦昭和五十六年四月西堂を再建して往古の大伽藍となる。拝観後昼食をする。

西ノ京駅より京都駅に、時間の都合で清水寺に行く。人は多く、又ここでも土産品を少々手にして帰る。午後五時四分京都駅発新幹線指定席に乗る。大津、米原、関ヶ原、木曾川も雑談の中に通りすぎて、五時五十一分名古屋駅に到着した。地下鉄で藤ヶ丘に、ここで夕食をとる。皆ほっとした気持ちで雑談が多い。うれしそうだ。亦バスの人となり、長久手の灯がなつかしく走る。暗闇は深く、家が黒く浮出て見える。風はない。「どこへ行っても家が一番いい」とだれかがつぶやき、西の闇に、星が流れた。

昭和六十一年八月十日

福岡録三書

初秋の信州・甲州路をたずねて

九月二十四日朝急に、電話で信州一泊で、行くことがきまり、今日午後五時に出発の予定で、北熊の三岡氏宅まで三名で行く。五時予定の時間になっても、三岡氏はいっこうに帰らないが、それでも待つこと四十分で帰ったので、五時五十分頃一行四名、北熊を出発し、車はグリーンロードに入り、一路東に行く。三河力石を経る頃はすっかり夜のトバリもおりて一五三号線を走り、足助より山峡に入り稲武の街並は明るい、また夜闇の中を車は何処を走っているのか、車中は政談話に花が咲いて、談笑の中に、長野県根羽村治部坂高原山荘入口についた。急坂を蛇行し林の所々に外灯が光る。別荘に到着した。今夜は此処で一泊、夜食の準備をするが、男でも仲々上手な出来ばえで、夜中一時頃まで話し床につく。翌朝は五時半頃に起きる。朝の冷気を感じつつ、雑木林は高く深い。静寂の中に、谷川の流れが聴える。もの音は、なに一つもない閑静な林の中で、風もない。七時頃には朝食をとり、後かたづけもよくして出発した。山荘入口左脇に、治部坂高原ロッヂの喫茶室で、小休止、コーヒーをとる。窓外の池には清冽な水が流れて、水車が廻り、緑の山が幾重にも山波を遠くにつくり、初秋の風が、朝もやの中を流れて清く美しい。八時頃か、峠の急坂を下って、飯田に向かう。途中橋を渡った。向かい個所に昼神温泉の大きな看板が立つ。左は深い谷川で、その路肩に長く、コスモスの花が咲き乱れて、初秋の風情を漂して、信州の秋を感じる。何時か人家が続く、車は街中にはいる。

飯田の市街を出て、坦々と走る中央道に郊外のリング畑に人が二、三人見えかくれして、棚下のリングが赤く色づいている。車は速度を増して、東に走る。後ろの座席で、誰かが、不意に、名古屋に何時頃につくか、などと冗談とも、本気ともわからない事をいいながらも、車は東に走り、諏訪にはいる。左手に広びろとした諏訪湖

を見て、諏訪の街がひろがり、遠くに八ヶ岳の連峯が雄大な景観をみせている。サービスエリアで小休止して、記念写真を 湖水を背景に撮る。又白い道を車は走る。右手に長い堤が続き、堤上の萩の花が今を盛りと咲き誇り、初秋の風に大きく波み打って、車は何時か 山梨県にはいったようだ。

長坂町、須玉町には武田氏の祖 源清光 光長の墓があり、谷戸城跡がある。車が東に走るにつれて、右手に釜無川が見えかくれして、いつか韮崎市にはいる。甲州街道によりひらけた宿場街で、米塩の集散地で、江戸時代には多くの馬宿があったという。しかし、平安末期より 甲斐源氏発祥の地盤となった処で、武田勝頼 最後の城跡 新府城を天正九年（一五八一）に築城したが、在城すること 僅かに六十日余にして、木曾義昌が織田信長に内通したため、天正十年信長の甲州攻略により三月三日 勝頼みずから城に火をはなち、郡内岩殿城をさしておちのびた城で、外に武田八幡宮 白山城跡 武田信義館跡 願成寺 妙浄寺等多くの史跡をのこす。車は韮崎も何時かすぎて、甲府市にはいる。広い甲府盆地の中心地で 西に南アルプス、北に八ヶ岳連峯、東に秩父多摩の連山と、南に富士の霊峯を仰ぎ 雄大な景観をみる。

甲斐の国に来て、武田信玄を書かざるを得ない。武田氏の発祥は、清和源氏新羅三郎義光にはじまり、その十八代 武田信虎が国人層をしだいに制圧して、甲斐一国の領主となり、十九代 武田信玄は大永元年甲府の北積翠寺に生まれた。天文十一年に父信虎を駿河に追放して、甲斐の国守になる。時に二十一才と云う。その後、信濃 駿河 関東 三河と攻略を広げて領有したが、信玄の軍旗「疾如風 徐如林 侵掠如火 不動如山」は有名で、また諏訪法性の「南無諏方南宮法性上下大明神」の旗をかかげて、越後の上杉氏と川中島で対戦すること五回におよぶ。戦国乱世の中に生きた一代の英雄 武田信玄も元亀四年 野田城の攻略と共に、病にかかり 信州駒場で病没したが、遺言により 三年間喪をかくして、天正四年 臨濟宗乾徳山恵林寺に埋葬した「法性院大増

正機山信玄公之墓」の石碑が建立する。外に多くの史跡が 長禅寺 大泉寺 円光院 武田神社 ツツジヶ崎武田氏館跡 積翠寺 要害城跡 甲府城跡 尊体寺 善光寺等々武田氏関係の史跡を多くのこしている。甲府をあとにして車は何時か 石和町にはいる。此処は 温泉と昇仙峡で有名である。笛吹川を左にみて勝沼にはいる。段々の山丘畑は、一面のブドウ畑ばかりで、甲州ブドウの産地である。勝沼をたって十五分頃、もう十二時はとつくにすぎた頃、車は東山梨郡大和村字田野につく。此処は、武田勝頼最後の地である。

二十代武田勝頼は、信玄と諏訪御前の子で、二十七才で家督を継いだ。悲運の武将で天正三年五月 三河長篠の合戦で 敗戦となり、衰運の回復ができずして、天正十年 織田信長の甲州攻略により 三月三日新府城を出て、岩殿城にむかったが、家臣 小山田信茂が背反して 入城を断念し、天目山下田野の山麓に於いて 遂に天正十年三月十一日 激戦のすえ 自刃してはてた。勝頼時に三十七才。北條夫人十九才という。夫人の一首に 西を出て東へゆきて後の世に

宿かしをはと たのむみほとけ

武田氏二十代 五百年の歴史は終わった。戦雲はれて笹子峠に 大菩薩峠の緑が遠く 白雲去来する頃、車は長い長い笹子トンネルの中を疾走していた。

長いトンネルをようやくにして出た。前面が急に明るい。左手は急峻が続き、右手は桂川の清流が走り、中央本線が蛇行する。高速道と並行して走る。十五、六分で大月市に到着した。此処は、武田時代、郡内岩殿城 小山田氏三代が居城した所で、徳川時代 天保七年の郡内騒動は有名で、一万人以上の貧農が決起して 五百人以上も刑罰をうけたと云う。車はいつか 都留市を通過して、富士吉田市の町並を左にみて 富士の裾野にはいっていく。北麓の山野で、山中湖 河口湖 精進湖 西湖 本栖湖で富士五湖という。河口湖附近のすそ野を曲折

してしばらく走る。途中 多くの洞窟や風穴がある。原生林の中をしばらく下ると、西湖湖畔に到着した。余り大きくはない湖で、水は紺碧で深く 対岸に五、六隻の釣舟が浮かび、白いすすきの穂波が 初秋の風にゆれて いる。四囲の周辺は黒々とした 溶岩が多く、萩の一株が黒い岩石と共に水に映じて影を写し、崖上の松 去来する雲と一幅の画趣をそそる風景の中で、おそい昼食をとることにした。西湖は、昭和四十一年九月二十五日、今より二十年前の今日 室戸台風により西湖の部落に 山津波が発生し、土砂の崩壊と共に九十四人の犠牲者を だして、その中十三人は土砂と共に西湖の湖底に 永久に眠ったという。「あゝ西湖 西湖と」刻した石碑が、湖畔の西に四基建つ。西湖の湖畔を出発したのは 二時をとくにすぎた頃と思う。車はしばらく原生林の道 を走り、高原のすそ野に出た。道の両側に広大な 高原地帯で起伏しており、処々に牛を放牧した牧場がある。富士山は厚い雲がかかり、僅かに山麓が霧の中に細い線をひいて 雄大な裾野が遠く遠く 広くひろがっている真中の道を 車は南に南にと走った頃、眼前に大杉が二本みえてきた。誰かが 白糸の滝だと言った。白糸滝には三、四回来ている。車は広い駐車場にはいった。今日はめずらしく閑散としていたが、何処かの農協の観光客か三、四十人の団体客が、そろそろと滝見物に歩いて行く。音止の滝は、川の水が一気に落下する様な雄大な滝で、白く高く 飛沫を上げていた。白糸の滝は急な石段をしばらく下ると、前面に 白く数十條の滝が落下している。富士の溶岩地帯の伏流水が 高い断崖上に落下するもので、自然の妙であり、実に壮観である。写真 を四、五枚写した。小休止後 車中の人となり、三時四十分頃帰途につくことにした。途中 富士大宮市を経てふじ より東名高速道にとはいれる。その頃は何処が どうか夢の中で 清水あたりは、すこし知っている。浜名湖エリアで小休止した車は、百キロから百三十キロぐらいで走り、昨日二十四日 二十五日の二日間に六百五十キロ余の道程を走ったと云う。三岡さんには大変お世話になりました。皆さん有難とう。午後七時頃に無事家に到着した。 昭和六十一年十月一日 長久手町郷土史研究会 福岡 録 三 書

秋の行楽 みちのく二人旅紀行

十月二十三日 秋の行楽 みちのく二人旅。午前六時 家を出発した。約四十分で小牧空港に到着する。出発までの時間 健と三人でコーヒーを喫して待つ。八時十分小牧空港を発した。今日は快晴で 秋の空は高く 美しい。高度七千米余 南アルプスの連山は青く 木曾の御嶽山頂上附近は白く 雪が光り、右手は遠く ぱくぱくたる雲上に 富士の霊峯を見て、一時間、機は何時か仙台空港にと着陸した。空港玄関で一行十八名、羽後観光バスに乗車する。東北の秋は少し寒い。南仙台より高速道にはいり 一路東に走る。広瀬川 名取川もいつか 渡り ひろびろとした田園風景に 農家が点在する。一ノ関もすぎた 平泉に向かう。古代の東北地方は 未開の国で 陸奥(ムツ)国 出羽国と云う。亦蝦夷(エゾ)ともいった。大和政権が 出雲国 吉備国 九州 四国等を併合して、東は 関東地方 武蔵国までで それより以東の奥羽地方の諸国は、齊明天皇の六五八年阿倍比羅夫が初めて討伐するが、七二四年に陸奥国に多賀城を設置する。亦平安時代の桓武天皇の七九七年に 坂上田村麻呂が平定し、その後も多くの反乱が続き、源頼義 義家が 安倍貞任 宗任等を討伐する。前九年の役後三年の役といい、ようやくにして平定する。その両度の戦役に参加し協力したのが藤原清衡で奥羽平定後平泉の地に 藤原氏三代百年の仏教文化王国を開き支配して、天仁二年(一一〇九年)中尊寺を創建して 金色堂を十六年の歳月をかけて建立した。

十一時三十分頃 車は中尊寺参道入口附近に到着した。天台宗東北大本山の古刹で 八百年祭である。参道月見坂の両側は 三百年以上の老杉巨樹が林立して、天をつく。深閑とした広い境内、多くの参拝客がある。坂を登りつめた処に 弁慶堂が建つ。内陣には 衣川の戦で立ったまま大往生をとげたという木像が安置されている。

東の物見台で 広く開けた田園風景は 秋の稲刈りも終り、北上川が流れ 衣川が合流している。堂より参道は平たんとなり 老杉の中で 紅葉が美しい。地藏堂 鐘堂 恩愛精舎が林間にみえて 中尊寺本堂につく。国宝重文等多くの文化財を保有するという。本堂を参拝ししばらく行くと、金色堂にたどりつく。藤原氏三代が栄華を極めた 平泉に残る 代表的な建物で、清衡 基衡 秀衡三公の廟所で 三間四方の小堂ながら、装飾は 金色さんぜんとして壮麗を極めて 平泉文化 八百年をよく知ることができる。金色堂の裏手脇に 芭蕉の句碑が一基樹間に建つ。

五月雨の降残してや光堂

とある。それより 経堂 覆堂と廻って、讚衡蔵で 山内に保有する仏像 美術品等の展示物を拝観して下山し、おそい昼食にした。食事後売店で 南部鉄瓶外二、三点の土産品を買い、宅送便に依頼して、車は二時ちかく中尊寺を出発して、十和田湖に向かう。

亦平泉には 中尊寺の外 二代基衡が開基した毛越寺がある。庭園は有名で 三代秀衡が創建したと云う。無量光院寺跡も残り、弁慶の墓 義経堂 衣川古戦場等多くの史跡が遺る。亦ふるく西行法師が平泉に歌ったうたに さきもせず たばしね山の さくら花 吉野のほかにかかるとは

と古歌を 吾妻鏡にのこしている。

平泉を発車して 高速道を 水沢 北上とすぎて 花巻より岩手県の中心地 盛岡に。此処は徳川時代 南部藩の所領地である。盛岡をすぎた頃より 車は左に分かれて大更 安代を走り、大湯温泉より 発荷峠に至る。その間の車窓左手に 名山 岩木山を見る。くもり空のあつい雲が 頂上附近に 低くかかり、南に広く 長く裾野をひく。雄大な山容で 北には白い雪をのせた姿は 美しく、奥羽地方を代表する霊山を観て 車は青森県

十和田湖の九十九まがりを曲折して下る。前面の湖水は広く 紅葉は美しい。

四時半をすぎた頃か 車は十和田湖パークホテルに到着した。休屋と云う湖畔である。十和田湖は日本最初の国立公園で その周囲五十九キロ 火山で出来た湖で、最深部は三七八米という。青藍色の水は澄で 神秘的な趣きをたたえた湖で、西湖 中湖 東湖に区分して 二つの半島が湖面に突出している。夜食は六時より宴会で、ホテルの売店でこけし外二、三点の土産品を買い、九時半頃には床につく。翌朝は早く 八時にホテルを出発して 八時二十分遊覧船第二八甲田にのる。船は乗客で満員 静かな湖面を 中山半島にそって航行する。そそり立つ断崖絶壁上に ブナ ナラ カツラ カエデ等の原生林が紅 黄と 燃えるように紅葉、華麗な色彩に朝の陽光が注ぎ 五色岩 烏帽子岩 屏風岩に 松の緑を 点景して、湖水は青く澄で 深く、秋の錦繡おりなす風景を満喫して五十分 遊覧船は 子ノ口に到着した。此処より奥入瀬に向かう。

奥入瀬は子ノ口より焼山まで十四キロ 奥入瀬川の溪流が ブナ ナラ カツラ カエデ等の原生林をぬって流れる溪流で、紅葉の下を 瀬となり 滝となり 白く 静かに苔むした岩石の間を流れて 閑静なたたずまいは 明治の文豪 大町桂月がことの外 愛した処である。私等一行は 石ヶ戸まで 探勝して帰途につく。途中川辺畔を十分程散歩して バスに乗車する。十和田湖畔を折り返し廻って 発荷峠につく。峠の展望台上的の観望はすばらしい景観で、眼下にひろがる 秋の十和田湖 いく重にもかさなり合う 緑の山々、遠く高く連なる八甲田山は白く 雲の中に。車は峠をあとに出発した。途中 大湯温泉を経て 大館市駅前で昼食となる。食事後 秋田杉の銘名菓子器等土産品二、三点を買う。此処は銅山 秋田犬の産地である。車は出発し 能代より 男鹿半島 寒風山に走る。日本海側で寒い。寒風山は 火山で出来た山で、高く 樹木のない裸山で、草生山を廻りながら車は登る。曇り空の頂上に展望台があり、眼下にひろがる山々と日本海 風もなく静か。雨が心配で早々

に展望台を下り、バスに乗る。車は山を廻って下る頃 夕闇が迫り暗い中を走った。途中車は 土産品店に立寄り、此処でも二、三点の品物を買う。午後五時半をすぎた頃か 車はようやくにして 男鹿温泉 セイコーグラインドホテルに到着した。湯に入り 会食は七時半頃に、土産品も買い 九時前に床に入る。翌朝は八時半に出発する。帰途の途中、車は高い山峡に入る。山間の深間に 一ツ目 二ツ目 三ツ目の湖水がある。四ツ目は 海港となり、漁船が出入する。数億年の太古 地球が形成した時、地核の変動で自然に出来た 人間の「ヘソ」の様なものという。車は八郎潟の湖畔を走り大潟村による。三千二百人の小村で 一戸当たりの耕作反別 十五町五反歩という。此処でも又三俵積の御殿まり土産品一ヶを買う。

大潟村を出発した車は、途中男鹿水族館を参観して、大棧橋有料道路を走る。山は高く険しい。断崖が急に海に落ちて男性的景観をその随所に見せて 五社堂門前の街をすぎた頃より 砂浜 松林の町や 村々が続く。途中漁市場に立より 思い思いの買物で、秋田空港に向かう。今日も秋ばれの晴天で 市街を通過。田園風景の中を車は 空港に無事到着した。

羽後観光の運転手さん 大変御世話になりました。バスガイドの加藤ルリ子さんには、毎日の 明るい説明や御案内 有難とう。空港で昼食をする。最後の買物を求めて 秋田空港を一時二十五分に発して、日本海沿岸ぞいに飛行して、二時三十三分頃 小牧空港に着陸した。皆さん有難とう。兄の出迎えをうけて 大きな荷物を四個車に。一路帰途につき 家に帰る。

昭和六十一年十月二十八日

福岡 録 三 書

延暦寺 三千院にたびして記

私達夫妻は、四、五年前に高野山一千五十年祭に参拝したことがあり、このたび比叡山延暦寺開創一千二百年祭にも、二人で参拝することにした。五月二十一日、一泊の予定で快晴の朝、七時半頃 役場前バス停を出発した。名古屋バスセンターを八時半に出発して途中 西春町役場前で婦人会員十五名ほどの乗車があり一路西に、京都にむけて 高速道を走った。途中多賀で休息し、また事故で草津附近の橋の上で車は余儀なく 四十分ほど停車して開道を待つことにしたが、十一時半頃には京都南インターより 城南宮に到着した。神社の創建は平安時代後期という。小川の流れに石楠が満開で薬水苑の名園を散策した。当地附近は明治維新の鳥羽、伏見の戦い激戦の跡地という。四十分ほどで宇治平等院に行く。到着後宇治川畔の食堂で昼食をとり、宇治川橋より清流にうつる緑翠の景を写真にとり、歴史に名高い平等院につく。

平等院は、藤原道長没後その子 関白藤原頼通が 天喜元年（一〇五三）に創建した阿弥陀堂で一名鳳凰堂という。宇治川の清流河畔の松林池泉上に藤原時代最盛期に建築された阿弥陀堂は、単層入母屋造りで、左右にのびる翼廊は軽快優美なその姿を 池泉にうつして、正に観無量寿 西方極楽浄土をこの世に往生し再現している。本尊仏は 阿弥陀如来、像高約三米の座像で 仏師定朝の晩年の傑作という。内部は多くの飛天とともに天蓋折上小組の格天井に ようらくが たれさがり、荘厳にして幻想的で、絢爛豪華である。その他広い境内には、観音堂、浄土院、最勝院等の塔頭がある。池泉には多くの水蓮の花 水辺に咲く花菖蒲が松風の中に、静かに白砂を散策して、治承四年（一一八〇）五月 以仁王の平家追討の令旨により此の地に戦死した 源頼政の墓に参拝して寺を出た。一同乗車して宇治川畔の新緑の 幾重にも屈折した清流の道を 石山寺に向けて車は走った。

車は何時か瀬田川を右手に見て 石山寺の門前駐車場にと入り下車する。長い参道をしばらく行くと、寺の山門に到着する。

石山寺は聖武天皇の勅願により、天平十九年（七四七）に良弁僧正が創建した。本尊仏は 丈六の観音仏で、西国十三番の札所で 古来より信仰の厚い霊所である。新緑のもみじの下をしばらく行くと詰所につく。硅灰岩の池泉の流れ、急な石段上に 広い境内が 多くの塔頭が緑陰に建立する。正面には巨大な硅灰岩の自然石が、その上に急な石段上に重層の多宝塔が建ち、左手には本堂が深い杉木立の中に建っている。寛弘元年八月 紫式部が源氏物語を執筆した。源氏の間がある。近く美しい瀬田川の流れ、秋の紅葉と月の名所で、亦寺内には 石山寺一切経 法華義疏 建久年検田帳等多くの古文書 建造物は国宝、重文として保存している。寺の参拝参観を終り寺を辞したのは午後四時をとくに過ぎていた頃で、一行は乗車して 今日宿泊地である雄琴温泉に向う。車はいつか瀬田ノ唐橋も右手に過ぎて 大津市街にとはいはる。此処は滋賀県の県庁所在地で、古代天智天皇の六六七年 ここに遷都して 志賀の都という。波しずかなびわ湖を右に 三井寺は左にと、近江大橋に見とれている頃 車はいつか西大津に入り 近江神宮参道入口 唐崎も過ぎて 右手には益々大きく広がるびわ湖の水が 曇り空の下 静かに 黒くただよう。左に遙かに遠く 比叡比良連山の山容が、漠々たる雲間にある頃 車はいつか坂本日吉大社も過ぎて びわ湖々畔を西に西にと走り、人家もまばらに 田植も終わった田圃風景が点在する。雄琴温泉地域にはいる。左の高い台地上に 七、八階建か 雄山荘ロイヤルホテルが見えてくる。今夜の宿泊である。車は西より大きく廻って、ホテルの裏手より 表玄関に到着した。四時四十分を過ぎており、一同下車して ホテルを背景にして記念写真をとり、五階の室内にとはいはる。五階からの展望はすばらしく、びわ湖が一望に眼下にひろがり、夜景の火が多く 近く 遠くに点滅して、絶景かなの外なし。

翌朝は午前九時にホテルを出発して、比叡山延暦寺に向う。伝教大師最澄上人が開創して一千二百年祭である。仰木より奥比叡ドライブウェイを新緑の屈折した道を走る。眼下に連なる多くの山々、遠くにひろがるびわ湖の湖水、白霧のたちこめる山稜の杉木立、清浄と神秘 悠久の歴史を感じつゝ、車は山上の駐車場に到着した。最澄上人は山麓の地坂本に生まれる。延暦四年（七八五）十九才で比叡山に登り、山学修行の後 延暦七年には根本中堂を建立したと云う。十六年後の延暦二十三年には唐ノ国に渡り、修士勉強して 天台の教義を修めて帰朝した。後にひろく天台宗の宗派を全国にひろめて 仏教の母体としたが、弘仁十三年（八二二）五十六才で没した。比叡山は広く 大きく、東塔 西塔 横川の地区に分けられる。これら三塔の諸堂を総称して延暦寺という。寺運は年々発興し発展して、多くの寺領田と僧兵を置いて 一大勢力となり、長暦二年（一〇八三）には山門と寺門の二派に分れて三井寺を創建する。亦元龜二年（一一五七）には織田信長の比叡山焼討ちにより数千人の僧侶が殺され、諸堂宇はことごとく焼失したが、十三年後に豊臣秀吉により再興の許可がおりたので、現在の諸堂伽藍を建造した。悠久一千二百年 長い 永い歴史の中で興亡を繰返して、法然 親鸞 栄西 道元 日蓮 一遍 空也等の高僧 知識が比叡の山より輩出して日本の仏教、思想、文化に大きく貢献し 来たことは、その初祖 最澄上人の遺徳が至上であるかを物語る。一行は下車した。朝よりの曇り空で 比叡の山頂は、山雲低くたれこめて、白霧が千古の老杉にかかって幽玄の仙境。受付所より参道を登る。まず大講堂に参拝して 鐘楼より根本中堂に参拝する。本尊仏は最澄上人自作の薬師如来をまつり、宝前には一千二百年 不滅の法燈が今も光り輝いている。中堂は延暦寺一山の総本堂で 参拝後前面の急な石段を上ると、文殊楼に出る。一山の総門である。それより林立する老杉の下を 法然堂 星峯稻荷 蓮如堂 総持坊と廻拝して中堂前が出る。一同休憩所にはいり休息する。千二百年祭で一般の参拝者も多く、学生の修学旅行が続々とつづく中を帰路につく。

靈山をあとにして田の谷峠より京都白川通りに出て、三千院に約一時間にして駐車場に入る。八瀬大原の里である。うねうねとした新緑の田舎道を行く。途中に点在する売店　せせらぎの流れにそってしばらく行くと律川呂川の溪流に逢う。美しい流れは瀬となり滝をつくって　緑の葉かげの下を流れて行く。雨模様の曇り空　小径をたどって三千院近くの食堂に到着した。十二時はすぎている。昼食を終り外に出たら小雨がばらついていた。三千院は天台宗の門跡寺院で　創建は一千有余年。秋の紅葉、春の石楠花は有名で　自然の庭園深く往生極樂院が建つ。単層入母屋造り柿葺で内部は舟底形天井で　阿弥陀如来に観音菩薩　勢至菩薩　三体の座像を安置する。外に來迎院　蓮成院　淨蓮華院等の塔頭寺院が山内に散在するが、寂光院に行くことにした。田植も終わった大原の田圃道を　谷川を渡り　農家の石垣にそい　細い流れの小径をいくまがりもして、深い谷間の杉木立の奥にひっそりと　寂光院があった。推古天皇二年に聖徳太子の草創と云う。本堂内陣は往時のままで、慶長八年に豊臣秀頼が修理した。地藏菩薩を祀る。寿永の嵐に平家一門は消えた。文治元年九月　建礼門院はこの寺に入りいまはなき高倉帝と安徳天皇の冥福を祈り閑居したが御歳三十六才で没したという。午後三時に大原を出発し京都東インターより高速道にはいり　名古屋より家に帰着したのは七時をすこしすぎた。

昭和六十二年五月二十八日

福岡 鯨 三 書

北海道二人旅紀行

七月十日　夫妻で　北海道五泊六日の旅に小牧空港を健の見送りで午後三時十五分に出発した。四時五十分には千歳に着陸した。快晴で清く美しい北海道である。一行三十六名函館観光バスに乗車して登別温泉に向う。いくえにも重なる緑の山々は濃くて広い。六時少々前に登別プリンスホテルに到着した。此処は有名な温泉地で立派なホテルが建ち並んでいる。翌十一日ホテルを七時四十分に出発する。右手に太平洋の広がる　たんたんたる広い道路を海岸ぞいに走る。左右は広大な緑地に　広い牧場がひろがり、遠くに点在する農家と白い波頭が砂浜に打ち寄せて、ただただ広い。白老より　苫小牧には多くの製紙工場があり。車は富川より山手にはいり、日高に向う頃、左右の広い畑と牧場には多くの競馬馬が飼育されている。日高を経た車は山並の山峽を走る。日勝峠にさしかかる頃、山はけわしく　道は曲折して、エゾ松　トド松が多く、一面の熊笹がおい茂って居り、白雲が低く　霧がわきたっている。峠を越える頃は霧が深く白雲の中を下ったが広い十勝平野はなにも見えない。清水にて車は左に、右に行くと帯広に行くと云う。山の濃い緑と　広い畑がどこまでも続く。遠くに点在する白い家や　赤い屋根の農家は、北海道特有の風景で　曇り空の中を車は走りに走り、午後五時頃に　阿寒湖湖畔に到着した。土産店が並ぶにぎやかな街で　霧雨が降っていた。一行は車から降りて小雨の中を遊覧船に乗船した。多くの船客で湖畔は深い霧雨で、阿寒湖の壮大な原始林も阿寒岳の雄姿もなく、碧く幽翠神秘的な湖面を船は中島につく。マリモの観覧所で　マリモは阿寒湖の奥の一部の湖中に発生するという。大正十年に国の天然記念物に指定されている。湖の遊覧は約一時間半で　六時三十分頃には、ホテルに到着した。七時すぎに会食で　食堂の入口で、帯広の甥夫婦がたずねて来てくれた。四年ぶりで　百二十キロ　二時間余りの行程でうれしく感謝した。

二時間ほどの会話で 小雨の中を帰って行った。有難とう。

翌十三日はホテルを午前八時に出発した。快晴で摩周湖に向う。今度の旅行のハイライトである。霧の摩周湖の霧を心配していたのは私一人だけではない、車中の人は皆一樣に心配の心境で 山峡に奥くふかく車は走った。駐車場は観光バスで一パイ。幸にも湖面の霧は晴て 翠緑の山の頂上附近には白雲か霧がかかり、湖面は碧く神秘的で水面が盛り上がる様に 風に流れて 中島が浮いて美しい。人も舟もない古代のままの神の姿で、思わず無中で十枚ほどのカメラのシャッターを切って写した。摩周湖の景観に満足した一行は、硫黄山に向い屈斜路湖で記念写真をとり、途中二代目酋長という中山西三さんの店で彫刻一枚を買う。車は広い畑や 広野を走って清里より 斜里に出た。北海道北辺の地である。広く 静かなオホーツクの海が眼前に大きく広がる。曇り空で雨模様様の天気、風もある。車はオホーツク海の沿岸にそい知床に向い走った。冬のは流水が多いという。寒々とした北の風情が何是かただよう。ウトロに到着した。今日は海が荒れて波が高く 遊覧船は休止というので断念して帰ることにした。途中小雨の中で オシンコシンの滝を見る。折り返した車は斜里より 海にそって北上した。網走に向う。途中多くの湖沼が開けて一帯の湿地が多く 原生花園として自然の草花を保護して 牛の放牧と共に多くの観光客が散策して居り 僅かな人家がここに点在していた。車がしばらく走ると、網走の街に入る。街は整然として美しい。網走といえば監獄で有名。刑務所は 街外れの 網走川が満々たる水を流して大きく曲折して流れる要害の地に建つ。前面には大きく立派な橋がかかる。車は川にそい 大きく廻り廻って天都山に登る。山の頂上に今夜の宿泊地ホテルがある。午後五時半 様やくにしてホテルに到着した。今日も三百五十キロ以上は走行した様子である。

翌朝 網走の天都山の山頂ホテルを八時に出発する。途中道の右手に「くさり塚」を見る。明治二十年より三十年頃 北海道開発に当たり多くの囚人を使用して山野の開拓をして、特に 道路の建設には多くの囚人が労役遂いには死亡して くさりをつけたままのその姿で その場所に多く土葬したと云う。昭和の今日道路改修により発見したが、その数は実に三百数十体と云う。くさり塚に埋葬して毎年参拝し回向して祭るといふ供養碑が建つ。車は北見に入る。美しい町である。附近は広大な農場が多い。北見を出て西に西へと走る頃、北見富士が見えて来た。キツネ園を見学し 水銀鉱山の跡地等の説明を車中で聴きつつ、車は急坂を曲折して走り、大雪山連峰の雪渓が前面に展開する。北海道を代表する第一の高山で美しい。石北峠を登りつめて下る頃、左手に石狩川の源流が木陰の下に美しい流れを見せて急流となる辺りより 有名な層雲峡の絶景が見えてくる。奇岩奇石が数十米の絶壁をなして連なり、大雪の清流が滝となり落下三千尺緑陰に四散して、石狩の清流となる。実に壮大にして 天下の奇観である。延々として二キロと続く。車は上川より旭川に入る。北海道中心部の街で 整然と美しい。旭川より 滝川に、大正三年炭鉱開設以来七十三年 昭和六十二年七月 円高不況の中で遂いに閉山したという。途中岩見沢を経て 札幌市街にと入る。北海道の首都で 百六十五万人都市である。有名な時計台、大通り公園と テレビ塔、旧北海道庁舎等の建物が多かつた。街は整然とし実に美しい。川ぞいに定山溪に向う。今夜の宿泊地で七時にホテルに到着した。

翌朝は八時に出発し、中山峠に明治三年に 本願寺が一万八千両の費用で建設した道という。車がしばらく走ると洞や湖の景観が左手眼下に広がる。大島が碧い湖水に浮く。車は下りながら左に廻り湖畔を走り、昭和新山に、一夜に爆発して出来た山という。次に大沼公園に行く。大小様々な多くの島々で景観である。大沼公園を出た車は走って函館に入る。北海道第二の都市で玄関口である。まず五稜郭城跡に行く。城跡は我国最初の洋式城郭で星形である。明治維新に榎本武揚が戦う。城跡見学後に修道院に行く。終了後ホテルに夜食後七時より 函

館山三百三十米の山上より、函館の夜景を展望したが、実に壮大華麗で優美そのものであった。帰りの途中で、高田屋嘉兵衛の銅像を見る。

翌朝八時半にホテルを出て 朝市に行く。北海道最後の土産品を買い、千歳空港に向う。途中車は八雲町に入る。八雲町と長久手町の歴史的関係と八雲町の発祥は、明治十年に旧名古屋藩士吉田知行が 八雲町附近を視察して、翌十一年に時の北海道長官 黒田清隆より百五十万坪の払下げを受けて、藩士八十五名を入植させて、翌十二年に再度百三十万坪の払下げをうけて、七十余名の藩士を入植させたのに始まると云う。其の後吉田知行は名古屋徳川家の家令となり、明治三十年には徳川公に随行してヨーロッパに視察旅行をするが、住居は長久手町岩作中島一番地に住して居り、明治三十九年五月 大草 前熊 北熊 岩作 長久手村の五ヶ村が合併して、現在の長久手町を創設した当時の初代村長に吉田知行がなった。父の吉田知紀は岩作の安昌寺に墓が在るが、知行は八雲町に葬る。以下略

駄足をしている間に車は千歳空港に到着した。空港を五時四十分に出発して 七時四十分名古屋空港に無事着陸した。健の出迎えをうけて家に帰着したのは 九時半頃で、皆さん有難とう 御世話になりました。

運転手さん ガイドさんには、長い旅行中大変に御世話になりました。厚く御礼申し上げます。 拜

昭和六十二年七月二十日

福岡 録 三 書

長久手町に生きた 郷土史と 私

私は 長久手町大字岩作字東中甲ノ五十七番地に、父福岡開太郎 母かねの長男として、大正六年十二月十八日に出生した。妹は三人で皆健在 孫があります。父は農業のかたわら大工仕事に従事しており、大正十四年三月長久手尋常高等小学校八ヶ年を卒業して、瀬戸市陶磁器工業組合に書記として奉職する。当時は毎月一日十六日休みで、給与は月給で九円であった。当時買った片袖の座机は三円五十銭で今も家にある。その頃に住居を字東中六十七番地の一に移転して居住したが、勤めは工業組合より 三共化学工業(株)に転職して、給料は十五円より 十八円に、二十円まで勤務して、二十一才となり、軍務は朝鮮(韓国)部隊(当時は戦争中)に入隊して服役し、除隊後に朝鮮警察官を拝命して 京城府光化門通り 警察学校を修了して、朝鮮江原道高城郡高城邑東里 高城警察署勤務を被命して、その後大津 長箭 杆城等の駐在所に転勤したが、その間の昭和十七年十月に妻八重子と結婚して、高城 大津にて家庭生活をした。大東亜戦争は益々激しくなり、召集令状を受けて南朝鮮の太田部隊に入隊するも、その後除隊となり、高城警察署に復帰後、大津駐在所より 江原道庁警察本部経済警察課に勤務して、春川邑昭陽通りに居住し、昭和十八年十一月に長男 健が出生した。昭和二十年八月十五日 大東亜戦争の終戦と共に、内地の実家に引揚げたが、幸に父母共に健在で 農業をしていたので、そのまま同居して農業に従事することが出来た。想えば両親には申し訳れもなく、最大の不幸をした。特に父親に対しては何にもせずに慙愧に思う。同年輩者の多くは戦死したが、幸にも生命を得ただけでもと 今思考して 感謝している次第である。

私は 小学校の四、五年生頃に安昌寺の住持 泰成和尚について 御経を一年余り修得したのが最初で、亦五、

六年生には平岩先生より珠算を二年ほど修得した。後年経済警察専門であったのは、この珠算に基因すると思う。

十六才で当時の若衆制度に入り、棒ノ手を修練した。最初の棒宿は東中の 浅井文左エ門さんの宅で 当時の師匠は松原源六氏で 加藤行三郎氏に直接の手ほどきをうけて 毎年のようにでた警固祭りに多く参加し、又馬だけの曳馬祭りにも参加したものである。棒ノ手では瀬戸市深川神社 瀬戸警察署前や名古屋市熱田神宮 鶴舞公園等で多くの演技をした。その間の十七才頃より 岩作字中根原の 加藤猶市先生（豊翠）について書道を修得する。先生は当時小学校の教員で名古屋市の書家 佐分移山の高弟で非常に温厚な人格者であった。その書筆跡の多くは岩作の教円寺に遺る。亦その当時、長久手町内の能書家は、加藤香川 福岡松山 近藤光華 福岡年春 青山亮及浅井思水等の人であった。亦その頃に、私は絵画を小学校教員の釜田先生に少々の手ほどきをうけた。先生は名古屋市在住の画家鬼頭鍋三郎に師事した人と聞く。その時分に 長久手村立長久手青年学校三ヶ年を修了していた。亦詩吟剣舞は十八才頃に当時の青年修養道場であった名古屋市覚王山昭和塾堂において 山田碩山について師事し修得したが、其の後警察勤務中にも度々吟詠の講習をうけた。後年長男の健がこの道にはいり詩を吟詠している。

亦終戦当時父親存命中頃に茶華道にこり、華は拈華流を、茶は表千家と、中島丈四郎氏（一葉斎湖舟）釣月庵に師事して習う。私の雅号は 一鵬斎孤雲という。書道は師の豊翠より翠谷の号を賜わり 今に称号している。

亦私は、昭和二十年終戦当時の岩作二分会の分会長、岩作消防分団長等を歴任して、長久手農業協同組合の専務理事 農業委員 名古屋検察庁審査委員 岩作区会議員 及石作神社氏子総代等の役職を七十才の今日までに歴任して、現在は長久手町郷土史研究会の会長として、郷土史の発掘調査をしている。

亦終戦時の貧困な時代に父は他界して、私は家を継ぐ。家の農業に従事しながら、農協理事退職後は 瀬戸市

の村井電機（株）に勤め、二、三年後に丸山陶器（株）に勤務し、その頃の 昭和三十八年十月 秋の石作神社祭礼前に現在の居住地 岩作字泥亀首六番地の一に転居して今日に至る。私の四十六才の時でした。その二、三年後に、長男健が 福岡印刷と名称して印刷営業を家で開業したので、農業 瀬戸の会社勤務と兼業の中で、協力して 印刷事業の育成発展に努力し 基礎づくりにつとめ、その頃に弟も高等学校を出て 名古屋で印刷技術を修得していたが、共同事業に参加し 遂年営業の拡大発展とともに 従業員も多くなり、昭和四十七年四月 東海印刷株式会社に改組して会社を設立した。私が初代の社長となる。その間には、二人の息子の結婚、住宅や工場建物の建設、印刷機械具類等の購入設置で多事多難で辛苦の年がいく年か続き困難をきわめたが、意志強く残業に残業と続けて、幸にも親子六人三夫婦を中心にして、従業員の協力を得て 今日をなした。特に息子達は長年 工場内で同一の仕事にたずさわりながらも、唯の一度も意見が対立したこともなく、悪口 批判したこともない。互に理解し 協力の心で、又嫁 孫に至るまで、和気愛々で 本当によく出来た息子達夫婦と感服し、内心うれしく感謝している。

亦私が 多年長久手町の郷土史に関心をもつようになったのは、昭和三十年 四十才頃からと思う。高度経済成長時代に入り、名古屋市圏発達の時代で、長久手町内の都市化と、人口増、土地整理と宅地化、個人住宅の建替が多くなり、戦前の生活、祭り、芸能等の文化は 長い戦争中に自然消滅して、戦後の新しい教育は 新しい生活と文化に、余りにも多く変様していった。もともと歴史のすきな私は、自分のすきで、出来ることで、社会に少しでも貢献出来れば最上の幸と、亦男子一代この世に生をうけて 唯だ家の為に、自分の為にだけでよいのか？ 疑問と 疑惑の中で、人間個人の欲望には際限がない、毎日の生活の中で、仕事の中で、町の為に社会の為に「何にかをやろう」。町会議員に出て町政も考慮したが、印刷営業としての商売人としての両立が疑

念の中で断念して、何時か次第に長久手愛好会を組織して 郷土史をたずねるようになり、幸にも 長久手町には、町を代表する文化財である 長久手合戦古戦場と、警固祭り 棒ノ手があり、此の三代表的文化財を基礎にして、長久手町発祥二千年 数十代に亘る先人の足跡をさぐり、古きよき文化遺産を遺し 保存して、後世の人に引き継ぐのが 自分自身の仕事のように、又責任のようにして 多くの事物の調査・研究と「書に 画に 文章に 写真に」と多年に亘り 数多くの作品と、調査書をつくり発表して来たし、亦多くの有名人の作品をも蒐集して来た。その費用や 日時は多大で 深く妻や 息子夫婦に感謝している。亦岩作の人 浅井恩水 加藤豊翠 安昌寺柴田義雄、長湫の人 中島文四郎 山本鶴善氏の諸氏には多年に亘り、御指導に預り深甚なる謝意を表する次第です。

亦昭和五十三年三月十二日 母親かね が八十七才の天寿をまっとうして他界した。ほんとうに永い一代 私 は随分と御世話になった。静かに心から冥福を祈るばかり。私達世代者は戦争の為に、転変万化 紆余曲折で流転が多く、昭和六年九月に満州事変が発生して戦争に入る。その当時私は十四才でした。昭和十二年八月には支那事変にと発展して、昭和十四年五月にはノモンハン事変と拡大し、遂いには大東亜戦争へと戦果は益々拡大発展して、昭和二十年八月十五日 敗戦焦土の中で終戦をむかえた。実に永い十四年間 戦争という国の難事の渦中に翻弄されて 個人では如何とも為しがたく、時代の時の流れに青春の身を 南冥の果てに、はたまた、北辺 厳寒の地に斃れた友人は幾人か 想えば思えば 感無量で、人生の宿命が去来する。

幸に 私は今日此処に 七十才。古稀をむかえた。その歳に当たり、過去三十余年の星霜歲月の中で「道 愛 自然」がすきで、多くの趣味道楽の中で作品を書画したのも、皆その心よりの発想で、こよなく郷土長久手を愛し、郷土史に信念と情熱をつくして 多くの文章を綴って来た。今その総てを一巻の書籍にまとめて 世に贈る。

本書発行に際しては 多くの人の協賛に預り、かつ青山清治氏 浅井鹿雄氏 日比野義信氏 石崎義雄氏 大西次郎氏 及伊藤祥子氏の諸氏には深甚なる賛辞を賜わり有難く厚く御礼申し上げます。

末筆ながら 印刷所の皆様、二人の息子夫婦、妻の協力と労苦に心からうれしく 感謝の中に 筆を置く。

昭和六十二年八月

歴史紀行作品集の発刊に際して

二男 福岡 慎介

「温故知新」古きをたずね求めて、そこから新しい知識を得る。と言われる格言も最近では、「新人類」である若い人達の波で塗り変えられようとしている。

現在、新聞、マスコミなどで賑わっている経済摩擦、半導体問題などに観られる点においても国際間の文化の相違もあると思う。

人が、毎日生活を営む上で、経済が重要視されがちであるが、社会形成するなかで今頃、文化、教育がクロージアップして来ている点は見のがせない。

現代のように忙しい毎日を過していると、生活するのが精一ぱいであるが、忙しい毎日であるが故に、「情緒やゆとり」がより必要な世の中になろう。

私は、この本の発行に際して、文化の大切さを再認識したような気がする。この本が地域文化に少しでも役に立てば息子としてこれほど嬉しいことはない。

父に願うことは健康であって、今後ますます頑張ってほしいだけである。感謝、感謝!!

昭和六十二年八月

おわりに

父 鯨三が、我が家に文化を造った。

香流の川を囲み、豊かな緑の小さな村に、いっばいつめ込まれた歴史の香と、音の中に生まれ育った自分の半生を、毎日コツコツと先人の生きざまを調べ続けペンと筆で描き上げた。

一枚の墨絵の向う側には、郷土ながくてへの底知れない「愛情」と「情熱」が、静かに、そして生きいきと脈打っている。

それ程上手とも思えない一枚の絵が、なぜか心を動かす。観る時々によって、数々の過去が脳裏に去来する。我々子供達は父の造った、小さな足跡を受け継いで、背伸びせず、楽しみながら、じっくり積み重ね、少しでも大きく育てることが、自分自身を育くむことではなからうか。

今、日本人の質の向上が叫ばれている。その責任を学校教育に押しつけているが、もっと原点に振り返った時、やはり一つの家庭にどれだけ「文化」が生きているかではないだろうか。

この本を読み終えた時、そんな人間の生き方を教わった。

さあ今度は我々の出番だ。心のひだを織り込みながら子供達に語り継ぎ本物の「文教の街ながくて」を育てなければ……。そして、この小編にありがとうの心を込めて第二、第三の出版を楽しみにペンを置く。

父が大変、御世話になっております。紙上をかりて有難く厚く御礼申し上げます。
父の 益々の健康を祈る

昭和六十二年八月

福岡 健

表紙題字
瀬戸市

安川陽山書

発行 昭和六十二年九月 日

著者

古稀記念
福岡 隼三

非売品

愛知県愛知郡長久手町大字
岩作字泥亀首六番地ノ一

印刷所

東海印刷株式会社
代表者 福岡 健